一寸お寄りな　新「へエ有難う御坐い升私ハチ此地へ参りまして未だ名主様へ染〻お近付お
も成ませんで兄貴が連れてお近付よ参ると云つて居り升が何たか氣が詰ると思つてツイ御
無沙汰をして参りませんのを　賤「ナニ氣が詰る所ぢやァ無いサックリ能く理解た人ざヨ私
を娘の樣よ可愛がつて呉れるから一寸お寄りな……チー作さん　作「夫が好い新吉さんお出
ヨ、何でもお出をと勧められるから新吉ハ幸ひ名主よ逢ふと行きましたが少し田甫を距れ
て庭が有て圍ひハ生垣に成て一寸した門の形が有中よ花壇などがある　しゃ「サア新吉さん
此方へ惣「大層遅かつたナしず「遅いたつて見る處がないから累の墓を見て來ましたが氣味
が悪くて面白くないから歸つて來たの　作「只今　惣「大きに作藏御苦勞誰か一緒かし　しゃ「彼
の人は新吉さんと云て私が檐下よ居る時分貸本屋の小僧さんで居てその時分よ本を脊負て
來て馴染なので思ひ掛なく逢ましたらまだ旦那樣にお目よ掛らないから何卒お目通りがし
たいと云ふから夫ハ恰ど好い旦那樣は家よ來て居らつしやるからと云て無理よ連れて來ま
の　惣「さア〻〻然うかサア此方へ　新「へエ初めまして私ばエー三藏の家へ養子よ參りま
した新吉と申す不調法者で何卒一度ハ旦那樣ふお目通りしたいと思ひましたが掛違ひまし
てお目通りを致しません今日ハ好い折柄お賤さんにお目よ掛つて[illegible]
持參致しませんで　惣「イヽエ、話には聞たが大層心掛の善い人だつて[illegible]
く行てヲ　新「へエ身体が悪いので法藏寺の和尚樣が無縁の墓へ香花を捧ると身体が壯健よ

成と云ふから初めハ排斥ましたが夫でも親切な勧めだと思つて參り升が妙なので此頃は其
功德かして大きふ壯健よ成ましたと惣「ウン成程然うかへ能く墓參りをする中々柔和やかな
實銘な男だと云つて村でも評判が宜い　賤「本當よ極く温和い仁で貸本屋よ居て本を脊負て
來る時分よも一寸來ても新吉さん手傳でお呉れなんて云うと冬抔ハ障子を張替たり水を汲
さり戸外を掃除したり誠よ一寸容貌は好ェチー若い藝妓衆と大騒やつたので……新吉さん
迷惑しないで窮屈にそると却つて旦那ハ困るから、チー旦那初てゞすから御土産抔と云た
んだけれども止ましたが初でそからお金を一寸少し許り遣て下さいな　惣「お金を……幾許
賤「幾許だつて少ー許りハ戸外見し貴方ど名主だらへーへー平伏さるし初めでそから三
兩〻お遣んなさいヨ　惣「三兩……餘多いや一兩で宜からう　賤「お遣り被成いヨ向ふハ目下
だから夫に旦那アノ博多の帶ハお前さんよ似合ませんから彼帶もお遣り被成ヨウ　惣「帶を
……種々お物を取れるなア、と是が始まりで新吉ハ近しく來升

第三十九席

お賤は調子ゞ宜ー酒が出ると一寸小聲で一中節でも遣るから新吉と面白いから猶近しく來
る其中よ惡緣こと申ながら新吉とお賤と深い中よ成ましたと誰れ有と知る者は御座い
ませんけれども自然と容子が訝しいので村の者も勧付いて來ましと新吉と家へ歸ると女房
が火傷の跡で片髮元チョロよ成て居り眞黑な痣の中からビカリと眼が光る妖怪の樣お顏よ

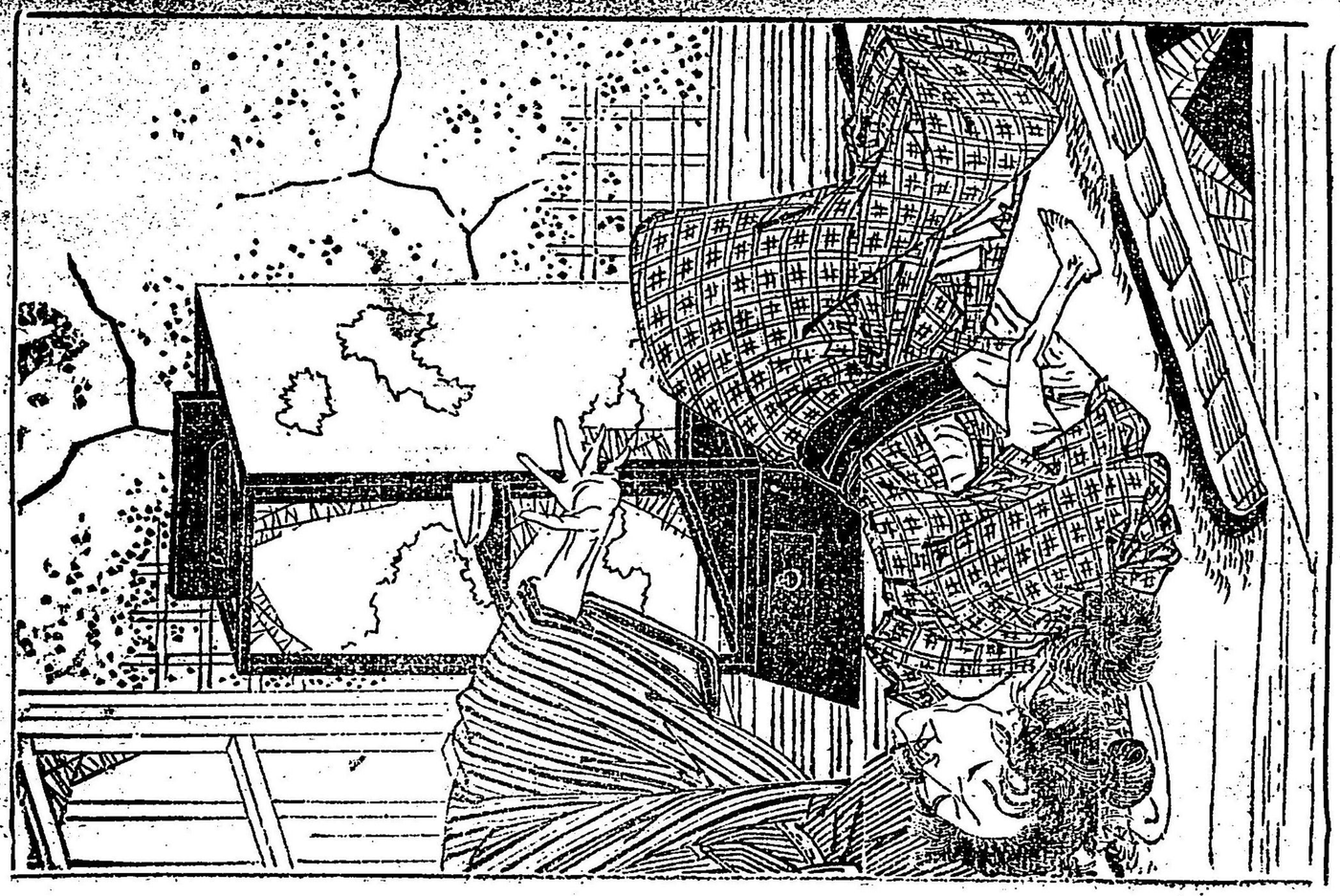
小兒は獄門の首に似て居るから新吉と家へ歸ると度事れない又夫よ打て替つてお賤の處へ來ると辨天樣か乙姫の樣な別嬪がチャホヤ云ふから新吉ハ狐鼠〳〵拔けては旦那の來ない晩にと近くシケ込んで作藏に少し錢を遣さば自由よ逢引が出來升るが偖惡い事は出來ぬもので兄貴ハ心配ーても新吉よ異見を云ふ事ハ出來ませんらお累ふ内々異見を云てせ升異見を云てないと爲めふ成ぬ向ふが名主樣だらら知れてハ成ぬと云ふ夫を思ふから女房お累が少し異見がましい事を云ふと新吉は腹を立てうち打擲致ス升るので今迄と異つて實に荒々敷い事を致してハ家を出て行き升る樣ゑ事あれ共人が善いからお累ハ心配する所ら段々病氣よ成まして遂にハ頭が破れる樣よ痛いとか胸が裂る樣だとか癪と云ふ事を聲にて只チロ〳〵泣て計り居ります兄貴と改まつて枕元へ來て 三段々村方れ者れ耳に這入り今日ハ老母れ耳にも這入つて捨てハ置かれぬ私が附いて居て名主樣よ濟まあい殊よ家の物を洗ひ浚ひ持出して質よ置き水街道の方で遊んで家へ歸らぬよ夜よなればお賤の處へシケ込で居りお前ら鹽梅か惡くッても小兒か蟲ら發つても藥一服呑ませる了簡もあい不人情な新吉金ゑ遣れば手が切まるから手を切て仕舞へ、と兄が申し升る所がお累ハ「何うも相濟ません ら縱令親や兄弟よ見捨られても夫よ附が女れ道殊よハ小兒も有升から母上さんやお兄樣よは不孝で有升か私ハ何も新吉さんの事は思へ斷られません、とピッタリ云ひ切たから 三然うあまば兄妹れ緣を斷ら、と云渡ス て纏めて三十兩の金を出そと新吉と幸ひ金が欲いら兄と緣を切て仕舞て行通ひなし新吉ハ此金を持て遊び歩行いて家へ歸らぬから自分ハ却つて面白いら只惘然なのと女房お累次第〳〵よ胸の焰ハ沸かへる樣よ成升殊に小兒ハ蟲が出てピィ〳〵泣立られ糸の樣に痩ても藥一服呑ませませんなれども三藏の手が斷れたから村方の者も見舞に來る人も御坐りません新吉ハ能氣よ成まして種ゑお物を持出てハ賣拂ひ布團どころくない遂ふハ根太板迄引剝して持出す樣な事ゑ御坐い升からお累は泣入て居り升が三藏ハ兄妹の情で緣を斷ても片時も忘れる暇ハ有ません故或日用達よ參つて歸りがけ舊來居ります與助と云ふ奉公人を連れて竊つと忍んで參りお累の家の軒下よ立て 三與助ヤ 與「〳〵ェ 三新吉が居る樣なれゑ寄ねが新吉が居なければ一寸逢て行度から窺ゑ覗いて樣子を見て 三新吉が居てハ迎も顏出しと出來ぬ 與「マア大概留守勝だと云ふから寄て上てお呉ん被成なチー可憐で貴方の手が切れてから誰も見舞よも行かぬ縱令貴方の手が斷れても鹽梅が惡いから村の者は見舞よ行たつても宜が夫を行ぬてェから大概人の不人情も分つて居まさア何うか寄て顏を見て遣つてお呉んなせへ私もお累さんが幼少うちから居やすから訪問てへと思ふが尋ぬる事が出來ぬが途中で逢ても新吉さんお累さんゑ鹽梅ハ何うでと云ふと何だ汝は緣の斷た所の奉公人ど死亡ふと如何しやうと世話よハならねへと斯う云のて彼の野郎彼樣な奴でもなかつたが魔降だのが始終ハハア祿お事ハぬへとお累さんに答はねへけれとも夫聞と遂足遠くなる譯ゑ 三何たる因果でお累ハ彼樣な惡徒の不人情お奴

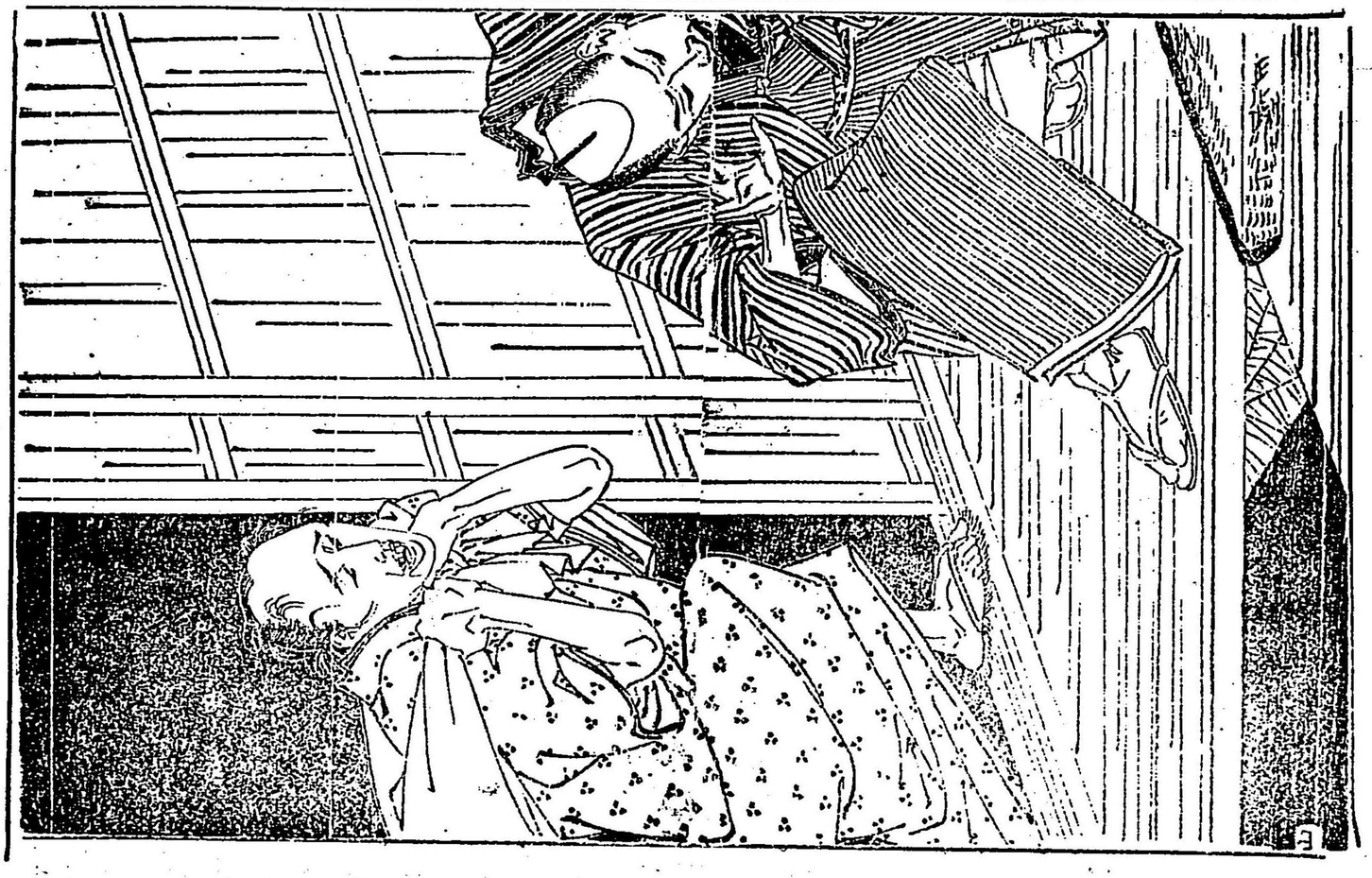
を思ひ断れないと云ふのゝ何かの業た、ヨ……覗いて見なヨ 與「覗けませんヨ 三「ナぜ與
「何も檐先へ顔を出そと蚊が舞て來て鼻乳から這入さ口から飛出さうな蚊でアー何うも苛
エ蚊だ……誰も居ねへ樣で 三「然うか、ぢやァ這入て見樣と日暮方で薄暗いから土間の所
から探り〳〵上つて參ると煎餅の樣な薄へらの布團を一枚敷て其上へ小兒を抱てゴロリと
寢て居りまそ蚊の多いよ蚊帳もなし蚊燻しもなし暗くつて蔭張り分りません 三「ハイ御免
ヨ「オー茲よ寐て居るエーお累〳〵私だヨ兄たヨ 三「三藏たヨ 累「ハ……ハイ

第四十席

三「ア、危ない……起なくつても宜ヨ其儘して居なヨ然うして子お前とゝ縁斷よ成つて仕
舞つたから私が出這入をする譯ぢやァないが縁は斷れても血筋ゝ斷れぬと云ふ譬へで何と
なく……お前の迷ひから此樣な難儀をする何うかしてお前の迷ひか晴れて新吉と手が斷れ
て家へ歸へる樣よしたいと思つて居るからモウ一應お前の胸を聞よ來たので新吉も居ない
容子だから話しよ來たエー恰ど與助ゲ供で子彼れもお前が幼少い時分からの馴染だから何
うぞ一目逢つて來度と云て……與助此方へ這入な 與「ヘエ有難う……お累さん與助で御坐
い升ヨお訪問申してエけれども旦那よも云ふ通り新吉さんが憎まれ口い利のでツイ足イ遠
く成て尋ねませんで、長へ間盥梅が惡くつてお困りだらう何樣な曖梅で……エ！暗くつて
蔭張分りませんゲ些とお擦り申しませう……オー〳〵其樣なよ痩もしねへ 三「夫ゝ已れだ

ヨ 與「然かへお前さんか暗くつて分らねへから 三「何しろ暗くつて仕樣がない灯を點なけ
ればならん……新吉ゝ何處へ行さへ 累「ハイ有難う兄さん能ク被爲入さ下さいましたお目よ
掛られた義理でゝ有りませんゲ何卒モウ私も長い事は御坐い升ないから一眼お目よ掛つて
死度と存ぜまーても心がらでお招申そ事も出來ない身の上よ成[illegible]
の罰で御坐い升が心よ掛て居ましさ願ひか屆きまして能く入しつて下さいました……與助
能く來てお呉れた子 與「ヘエ來てエけまどもチー何うも來られ[illegible]憎まれ口イ利
くぞナア實よハア仕樣がねへさ……蚊ゲ多いナアマア 三「新吉ゝ何處へ行た[illegible]ナニ友達よ誘
ゝれて遊びよ行さと……作藏と云ふ馬方と一所よ遊んで居やァがる忌々敷奴だ……蚊帳は
何處ふあゑ蚊帳を釣りませう……ナニないのかへ 累「ハイ蚊帳どころぞと御坐いません着
て居り升物を引剝て持出ぜましてゝ賣升ゝ質よ入升か、もう蚊帳も持出して賣ました樣子
つて自分ゝ勝手三昧ーて居るから厚くもねへゲ夫とお累樣ァ憎にたつて現在赤兒が蚊ふ喰
殺されても撫ゝねてエ云ふあァ心が鬼ゞチー 三「與助や家へ行て蚊帳を取て來て呉んな家
の六疊へ釣る蚊帳が恰ど宜いあれと六七の蚊帳だらあれそ恰ど宜からう若ぜあれでなれ
れば七八の大きいので宜い病人の中へ這入て擦る者も廣い方が宜にらら 與「直ぐ往て來ま
せう 三「早く往て 與「ヘエ……お累樣直往て參り升ヨ、と親切お男て飛樣にして蚊帳を取





りよ行きました　三「暗くつを往かぬから灯りを點けませう何處に火打箱はあるのだへ、何所よエ…寵も持出して賣たア呆れ升何もお家をれお飲も喰ねへ了簡左樣云ふ惡い奴だ、と段々手探りで蠻所の隅へ行て　三「ア、茲に在つさ〳〵、と漸く火灯箱を取出しましてカチ〳〵打升るが石が丸く成て火が出ない漸くれ事で火を附木よ移し破れ行燈を引出して灯を點け熟々お累の顔を見ると實よ今よも死なふかと思ふ程瘠衰へて見る影も有ませんから兄三藏れ驚ろきやして　三「ア、お累お前是れ一通りの病氣でれない餘程の大病どヨ此前よ來た時も此樣よ瘠ても居なつたが何も喫させれませも藥一服煎じて呑ませる了簡もなく出歩行いてもつがり居る奴だから自分よれ烹炊も出來ず、お前か此樣な病氣でも見舞よ來るハもないろら知らせる人もなー物を喫なけりやア力ぢ附かないから是でれ縱令病氣でなくも死ます見れば疊も持出して賣りやアがつたと見にく根太が處々剝がれて……マア樣の下から草ぢ出て居るぜ實よ何うも酷いぢやアないかエーオイ彼の非道な新吉を何處までもお前本夫と思つて慕ふ了簡かへ、お前は罰が當つく居るのだヨ、私が親母樣よお氣の毒だと思つく種々云ふと親母樣も私への義理だから何の親同胞を捨て出る樣な者は娘とも思れぬ譬同士だ病氣見舞よも行く呉れるナ彼樣な奴は早く死ねバ宜いと口でれ被爲仰けれども朝晩如來樣よ向つて看經の末よれお累れ大病で御坐ますと何卒お累の病氣全快を願ひ升新吉と手を斷ますて一つ處へ親子三人寄て笑ひ顔を看て私しも死度う御坐ます何卒御保護被成く下さいまし神樣や佛樣よ無理な願掛をなさるもお前ぢ可愛いろらで親の心子知らすと云ふのはお前の事だサア今日れ新吉とフツ、リ縁を斷り升諦め升とお前が云へば彼樣な奴だから三十兩か四十兩の端金で手を切てお前を家へ連れて行て身体さへ丈夫に成ば立派な處へ縁附ける左も無ければ別家をしても宜く彼奴ふ面當だからナ、エー今日れ斷念ませと云はなけれも成ませんヨ、サア斷念たと云おさいエー、オイ云へないかへ今日諦めなけれれ私れモウ二度と再び顔は見ませんモウ決して足踏は致しませんもう兄妹の是が別れ外よ兄弟が有ぢやアなしお前と私許り、お前本夫を持さないうち何と云つた　、私ゞ　へ緣付ましても子といふれ兄さんと私切りざから二人で親母樣よ孝行爲やうと云つ　ア ないかシテ見れば親れ有難い事も知て居るだらうサアお前の身が大事たろら云　答が出來ませんかヨ、エーお累返答しなければ私は二度と再び來ません

第四十一席

累「ハイ〳〵、と利かない手を漸と突くガックリ起上り兄三藏れ樣を見る眼よ溜る涙の雨れら〳〵と膝よ飜るのを　三「コレ！

百三十七

障るヨ　累「ハイお兄樣どうも重々れ不孝で御座ますーて　お兄樣れお言葉を背きましては阿母樣へ猶々不孝を　困　嬰つて邪見でも迚も側れ居られません少し許

撲打擲致し升から小兒が可愛くないかど膝の上へ此坊を載せ升の小兒を壁の上へ放し出し升夫程氣に適ぬ女房なれゝ離縁をしてうと申しますと男の子は男に付くものだカら此の與之助ぱ置いて樣な人の側へ此坊を置ましてはミズ〳〵見殺しに致し升る樣なものされてお況樣や阿母樣に不孝を致し升せめて此與之助が四歳が五歳ぱ〳〵 三「其樣な分らぬ事を云てゝ困り升ヨお前何うも……四歳の五歳体が保ちやアしませんヨ能く考へて御覽子を拾る數ぱ有が身を拾る數ぱあり た置いて行けと云ふなら置いて行て御覽乳れなゝ因るから矢張た前の方へ歸つてエ、私の云ふ事を聽かれませんか是程ゴ譯を云てもお前ぱ聽かれませんかへ……惡魔が魅入たのたお前其樣な心ではおかつたが情けない了簡だ私れもう二度ど再び來ません思〔ゝ〕お前ぱ白痴に成て仕舞たのだ呆を升、と腹が立のでれ有ませんか妹ゞ可愛紛しに強い異見を云ふとお累ぱ取詰て來まして癇を起し 累「ウーン、と虚空を摑んで横にバックリ倒れましたから三藏れ驚ろきまして 三「ヱー困つたナア少し微言を云ふと癇を起す樣な小さい心で有なから何う云もので此樣おに強情を張のだらう：新吉の野郎め……困つたナ水ぱゐへかナ何卒コレお累氣丈して呉れよ心を慥かゴ持なければ成んヨ此大病の中て落が來で[illegible]ん氣丈して、と一人で手ぱ餘る處へ[illegible]て來だれ與助、風雨激烈に蚊帳の大きなの

「ヱーマア夫ア、お累さん〳〵何しゴだコレお累さんアヽマア齒ア喰しむつてエライ顔ゴ成て是れマア死ゴゴ違へねへ骨と皮許りて 三「死だのちやアねへ今塞て來たのだゲアヽ是切りゴ成かしら……アヽモウ迎も助かるまゐ 與「助からねへてエ憫然ゴ……コレマア迎も駄目ゴチーお累さん私イ幼少うちから馴染でれ御座へませんか私イ今ア蚊帳ア取に行間待ても宜かんべエが夫ゴマア死で仕舞とれ情けねへ彼樣お惡徒野郎が側ゴ附て居るから近隣の者も見舞ゴも來ゼ藥一服煎ゼて飲ませる看病人も無ゐ此樣ゴ成て死ぬのれ誠ゴ情けねへ譯て何して死だかナア……三「其樣に泣たつて仕樣ゲ有物か命數が盡れば仕方がねへ其樣ゴ女〻敷泣お男らしくもねへ腹一杯親同胞に不孝をして苦勞を掛て是ぞ先立つたア此樣な憎い奴れねへ憫然とれ思れない惡いと思へ泣事ぱねへ泣な 與「泣なつて泣ゴつて宜かんべエ死だ時でも泣なきやア泣時れねへ私イ憫然でなんねへゴヨ斯んゴ立派な兄さんゲ有ても藥一服煎じて飲せねへで憫然ゴと思ふうら泣のだお前さんも我慢しゼゴ泣が宜エ三「マア水でも飲して見やうか 與「まゴ水も何も飲せねエのかへ 三「ナイ已れが水を飲せるから其處を押へて首を斯やつて……固く成て居るうちのう力一ぱい……ナニ腕が折ゴゼ……死を居るから構やアしねへ宜か……今水を飲せるからウグ〳〵〳〵〳〵 與「何だか云ふ事が分んねへ 三「……往けねへ已ゴ飲で仕舞た 與「仕樣が無な合でて饒舌れば飲込ゴ……饒舌

ちやよ、と漸く三藏が口移をにすると水が通つたと見て 累「ウム、と云ふ 三「ア、與助漸く水が通つた 與「通つたか、通れば助かり升お累様ア氣丈して、水が通つたから氣丈だてお累さん〳〵 三「お累氣丈しろ兄さんが此處よ附て居るから氣丈ーろよ 與「お累様氣丈おしなさいヨ與助が此處へ參つて居り升からお累様氣丈おしなさへヨ 累「ア……… 三「其方へ退きなさい天窓を出すからア、痛い 與「大丈夫已れ來さからヨウ、ア、好い鹽梅と氣が付たア…… 三「何た手前氣が付きやア夫で好いや氣ゞ付て泣奴が有ものか 與「嬉し涙で……モウ大丈夫だ 三「モウ一杯飲むかへサア〳〵水を飲なさへ

第四十二席

累「ハイ……氣が付ました何卒御免被成て下さいな 三「私ゞ餘り叱言を云たのは惡う御坐いましさツイお前の身の上を思ふばつかりよ愚痴が出て病人よ叱言を云て病よ障る様な事をして、兄さんが思ひ切りが惡いのだから皆定まる約束と思つてもう何も云ひますまい叱言を云たのハ惡かつた堪忍して 與「誰エ叱言云た能く無へ事だ……貴方正直ざから惡い此大病人よ叱言を云ふてエ此馬鹿野郎め 三「何だ馬鹿野郎とは 與「けれとも叱言を云たつて日那様もお前様の身を案じてネー新吉さんと手が切れて家へ歸へる様よ致度と思ふから巽見を云ふのを惡く思はねへ様よヨウ〳〵 三「蚊帳を持て來たから釣りませう恐ろしく蚊に喰れた釣手が有かへ 累「釣手ハ貰れあいから掛つて居ります 三「然うかと漸く二人で蚊帳を釣て病人の枕邊を廣くして 三「アノチ今歸り掛けで持合せが少ないが三兩許り有から是を小遣よ置て行ませう私も諦らめてもう何も云ません若し小遣が無くなつさら誰か頼んで取に越しなヨウ、大事よしなヨウ、蚊帳を釣さから……もう宜ワ何をモウ其様お事を云ふなよ……サア行ませう〳〵 與「ヘエ恭りませう……ぢやアチーお累さん行升よ旦那様が歸へゐと云ふから私も歸へるが大事よしてお呉ん被成よ、よう 悔々思ハねへが宜へ、エー何も仕様がねへ歸ア升よ 三「愚頭〳〵云ばそよ先へ出ゐよ、出なつさら出なよ、先へ出なてへよ、と兄が立よ掛ると利かない手を突て漸ゑよ這出しさ蚊帳を斯様掀つてお累が出まして、行きよ掛る兄れ裾を押へさなり聲を振はして泣倒れ升る 三「其様よお前泣たア何がそると毒だよ、サア蚊帳の中へ這入な坊が泣くよ、サア泣さ居るから這入な 累「御兄様只今まで重々の不孝を致ゑまゑた先立さ濟ませんゞ迎も妾は助かりません何卒御立腹でも御坐ゐませうが阿母様よ只ざ一眼お目ゐ掛つでお謝をして死度存じ升が阿母様よお出下さる様よ貴方からお謝を被成て下さいませんか 三「もう其んな事をお云でないよ阿母様も亦是非來たがつさ居るれざからお連れ申す様よしませう其様な事を云ハゑに悔々せずよ……サア〳〵蚊帳の中へ這入で居なよ 與「大丈夫ざよ阿母様ア已れが連れて來るよ其様な事を云ふと悲歎つで歸れねへから這入てお呉ん被成よ、ア、小兒が泣くよ可憐に本當に啼れねへ 三「ア、鼻血が出た與助男の鼻血ざから仔細ハ有まいけれとも盆凹の毛を一本拔て散

毛を抜のは呪さから……ア、痛へ其樣よ澤山拔く奴が有ろ一掴拔て　與「澤山拔
んと驗と思つて　三「エ、痛いワ……サア〳〵行き升よ、と餘波惜いが二人とも戸外へ
と生憎氣よ成事許ま　三「ア、痛……　與「何うかーましたかへ　三「下駄の鼻緒が切れ
横鼻緒が切れましさかへエ　三「與助何うも氣よ成なァお累の病氣は迚も助かるまいヨ
へエ助かりませんか憫然よ、チー早く阿母樣ァお越ー申す樣よーませうか　三「何しろ豆
らう、と三藏が歸るを入違へて歸つて來たのを深見新吉酒の機嫌で作藏を連れてヒ
〳〵蹌踉ながら歸つて來て　新「チイ作藏今夜行かあけまい惡からうなア　作「惡で惡くねへ
て行かねば已れ陀られるだ行て遣て下せへ出掛よ已ァ肩叩てナァ作さん今夜新吉さんを連
れて來ないと打敲くヨと云て斯う脊中ァ打つたからナニ大夫丈だ一杯飲を日か暮ると來ろ
から大丈夫さと云て聲掛て來たた　新「毎も行度よ向ふで散財して酒肴を取て貰つて餘り氣
が利カねへ些とは旨へ物でも買て行うと思ふが金がねへから仕方がねへ　作「金なくつたつ
て向ふで以て小遣も已れよ呉れさ何もハァ新吉さんなら命までも入れ上る積りさよと姉御
ぶ云つてるから行さ逢てお遣りなせへよ　新「明日ハまた大生鄕邊で一杯遣て日を暮さなけ
れば成ねへ仕方がねへから今日ハ家よ寐やうと思つて作家に寐ゐつて已が困るから行てヨ
ウ　新「……コウ〳〵見ねへ〳〵　作「何さか　新「妙な事がある已れの家よ蚊帳か釣てあゐ作
「ハテ是ハ珍らしいナァ是ハ評判そべヨ

新「其樣お餘計な憎まれ口を利なエ今行逢ッたなァ三藏だ已れが留守よ來やァかッて蚊帳
ァ釣て行きやァがッたのだナ斯んな大きな蚊帳が人もんヂャァねへ蚊帳を悄と盤んで距れ
た處へ持て行て質に入れゝば二兩や三兩は貸から病人に知れねへ樣に持出さう　作「だから
金と云ふものは何處から來るか知れねへおァ取るべエ　新「手前蹌踉〳〵して居て往けねへ
病人が眼を覺ずと往けねへから、と云ふが醉て居り升クら階子に突當ッてトタリハダリ、
是では誰よでも知れますが新吉が病人ハ天窓の上からソックリか帳を取て持出さうとすゐ
と　累は存じて居り升から　累「旦那樣お歸り遊せ　新「ア、眼が覺たこの　累「ハイ貴郎此蚊帳
を如何なさいます　新「何うするたッて暑苦しいヨ今友達を連れて來たが狹い家にダ、ビッ
ロイ大きな蚊帳を引摺り引ン廻ァ去て風が這入らねへのか暑くッて仕樣がねへこら取のだ
累「坊が蚊に螫れて可憐で御坐い升から何卒夫丈はお釣り遊はネで　新「少し金が人用なら
ヨ是を持て行て金を借るんだ友達の交際で仕樣がねへから持て行ヨ　累「ハイ夫をお持遊バ
去てい困り升から何卒お願ひで　新「お願ひだッて誰が斯な狹い家へ大きな蚊帳を引摺引ン
廻いせと言た技ハ已の家だ誰が蚊帳を釣た　累「ハイ今日兄が通り掛りまして手前ハ憎い奴
だが如何にも坊が可憐だ蚊ッ喰だらげよ成から釣て遣らうと申しで家ゐら取寄て釣て呉れ
ましたので　新「夫が已れの氣に入らねへのだヨ況と已れい緣が切れて居る手前ハ已れの女

房だ親同胞を捨ても本夫に附を手前云ッた廉が有ざらう、然うチャアねへかエ、ヂイ縁の切れた兄を何故敷居を跨がせて入れた夫が己れの氣ふ入らねへ兄の釣ッた蚊帳なれば猶氣よ入らねへ氣色が悪いうら是を賣て他の蚊帳にするのだ 累「何卒金子がお入用なれば兄が金を三兩程置て參りましたから是をお持遊ばして蚊帳丈ハ何卒 新「金を置て行ゞ、然うかドレ見せろ 作「だから金ハ何處ゝら出るか知んねへ富貴天にあり牡丹餅棚ゝ有と神道者が云ふ通りだ、チイサア行ベエ 新「行くたッて三兩許りチャア塩噌ゝ足りねへと往けねへ蚊帳も次手に持て行て質ゝ入れ樣じやアねへか 作「マア蚊帳ハ廢ヨ小兒が蚊ゝ喰れるからと姉御が云ふから三兩取たら堪忍ーて遣て小兒が可憐だから蚊帳ハ廢せヨ 新「何だ弱へ事を云ふナ 作「弱へたッて人間だからお內儀さんが鹽梅の悪いのゝ可憐位へ知て居らア廢せよ 新「可憐も何も有もんか何を云ャアがるのだ此ン畜生……蚊帳を放さねへろ 累「夫ハ旦那樣お情けなう御坐います金子をお持遊ハーて其上蚊帳迄も持て行てハ私ハ搆ひませんか坊が可憐で 新「何だ坊ハ己ゝの餓鬼だ何だ放さねへかヨウ此畜生め、と拳を固めて病人の頬をポカリ〳〵撲から是を見て居る作藏も身の毛立樣で 作「廢せヨ兄貴已[illegible]て仕舞た兄貴廢せヨ、姉御見込ざら放さねへ男だからナア仕方が無から放しなさい、ダガ敲くのハ廢せよ 新「ナニ……此畜生め…ヲイ天窓の兀てる所を打つと手が粘ッて變な心持がするから棒が何がねへか……其處ゝ箒が有ッア其箒を取て呉んな 作「廢せヨ〳〵箒なはお願ひだから廢せヨ 新「ナニ此畜生撲るぞ 作「姉御雜薪を取て出さねへと己らを撲るから放すが宜エ見込れたら蚊帳は助からねへからよ 新「サア出せ、出さねへと撲るゞ厭でも撲るゞ此度ア手ヂャアねへ薪だゞ放なさねへか 累「アーお情けない新吉さん此蚊帳ハ私が死んでも放しませんと縋り付のを五ッ六ッ續け打ふする、泣轉がる處を無理ゝ取うとも[illegible]るからピリ〳〵と蚊帳が裂る生爪が剝れる作藏ハ 作「南無阿彌陀佛〳〵酷い事をするなア顔は奇麗だが怖ろねへ事をする怖へナア 新「サア此蚊帳ア持テ行う 作「アレ〳〵 新「ナニ作「爪がヨウ 新「ドー……違へねへ縋り付ギャアがるから生爪が剝れた厭な色だナ血が付いて居らア作藏舐ろ 作「厭だよせ虫持じやア有めへ！爪へ喰ふ奴が有もんか 新「此蚊帳ア持て往たら三兩か五兩も貸か 作「貸もんか 新「爪を返んで借やう 作「琴の爪ジャアあるめへし、とそう〳〵敷奴で其蚊帳を肩ゝ引掛けて出て行きまそ、お累と出口へ斯う這ひ出したら口惜ゑいと見ゐて 累「エイ新吉さんと云ふと 新「何を云ャアがる、とッカ〳〵と立ち戻ッて來脇ゝ掛ッて有た藥鑵を取て沸湯を口から掛ると現在我子與之助の顔へ掛ッたから小兒ハ 小兒「ヒー、と二聲三聲啼人たのか此世のあごり 累「鬼の樣うあるお前さん 新「何を云アかるのゞ、と持て居ゞ藥鑵を投ると雙ゝ頭から肩へ沸湯を浴せたからお累ハ泣倒れる、新吉は摺てそゝ作藏を連て出て參りまーたが斯う惜く成と云のは佛説で云ふ惡因緣で心ゝら鬼は有ませんが憎い〳〵と恐ッて居る處から自然と同樣な事ゝなり升

新吉ハ蚊帳を持て出まして是を金ヨ云て作藏と二人でお賤の宅へシケ込み秘然酒盛を致し て居ア升其内ヨ段ゝと作藏が醉て來ると馬士で御坐い升から田畑で話しを爲付て居り升か らッイ聲が大きくなる 新「チイ作、手前醉と大きな聲を出して困る些と靜ヨーろ 作「靜か ヨたッて大丈夫だ人子一人通らねへ土手下れ一軒家田や畑で懸隔ッて誰れも通ア屯やアしね へから心配ねへヨ 賤「宜いヨ私はまた作さんの醉たのハ可笑ヨ餘念が無ッてお前さん慾の 無い人だよ 作「慾が無い事アねへ是で慾張て居るだが何方かと云ふと足癖の悪い馬ア曳張 て下り坂を歩行より阿哥と二人で此家へ來て斯う遣て醉て居れば快からチ、 作「先刻ハ已 ア醉が醒たチ 新「廢セー先刻の話ハ廢セヨ 作「廢せたつてお賤さんお前マア新吉さんハ可 愛人たと思ッて居るから首尾して他人ヨも知ねへ樣に素面くれて聘るけれども新吉さんが 此處へ來るてエ心配ハ是りア已が魂消た事がある今日チ 新「其樣お詰らねへ事を云ふお手 前ハ醉ふとお饒舌をして往けねへ 作「お饒舌たつて一杯飲で醉ふ乘て云ふのだエ、チイ夫 でチーマア一杯飲で闇ッだ處が錢イなへと云ふから無ッたッて好いや何でもお賤さんの處 へ行ッてお呉んなせへと云ふと毎も行て馳走ヨ成て小遣貰ッて歸るベエ能でもねへチャア ねへお何卒已れも偶ヨア旨へ物でも買て行てお賤ヨ食はしてエて其處ハソレ情合だから其 樣な事を云たゞグイ、や旨へ物て持行たッて無へものハア駄目さお賤さんの方が旨へ物

拵れへて待て居るうら今晩呼んで來て呉んなせへヨと已れが頼まれたから攜ねへチャア ねべかと云ッても金が無けれもてエれで家へ歸へると家ヨ蚊帳が釣て有るだ 新「よせ〳〵 其樣お話ハ癪せヨ 作「話したッて宜うんべエ……夫れで其蚊帳ア質屋へ持ッて行かうテ 取ヨ掛ると女房ハ顰梅が悪いし小兒ハ寐て居るし 新「コレ癪せ癪さねへか 作「云ッたッ て宜エ其樣なふ小言云ハあへがエー……蚊帳へ縋り付いて已らア宜エが小兒が蚊ヨ喰はれ さ可憐うだから何卒ヨウと云ッてハア蚊帳ヨ縋り付だ夫を無理ヨ引張だからお前生爪エ剝 したゞ 新「チイ串戲ヂャアねへ折角の興が醒らア癪せ搔痒るぞ 作「搔痒ッチャア往けねへ 新「お饒舌は廢せ 作「宜やナ 新「串戲云ふお饒舌ヨと口を押るゞ 作「よせ口を押へチャア 往けねへエ……チイお賤さん其爪を已れかに喰へテ、誰が爪エ食ふ奴が有るもんかてエと 已が口べおッべし込んダ夫アマア宜エがお前藥鑵を新「串戲ハよセ 作「イヽヤ、よセヨ搔 痒てへ 新「寢ッちまいな〳〵、と無理に欺しゝ部屋へ連て行ッて寢かしゝ仕舞ました夫か ら二人も寐る仕度ヨ成り升と何う云ふ事か其晩ハ酒の機嫌でお新がスや〳〵能ゝ寐ます雨 ハドウドと車軸を流す樣に降て來ました彼是八ッ時でもあらうと云ふ時刻に表の戸をトン 〳〵「御免なさい〳〵 新「お賤〳〵 誰か表を叩ゝヨ能く寐るナアお賤〳〵 賤「アイヨアヽ 眠い如何ゑたれか今夜の樣ヨ眠いと思ッた事ハあいヨ 新「誰か表を叩いて居る 賤「ハイ… 何方「一寸御免あすンて私しで御坐います 新「何ゞ庭の方から來た樣たゞ 賤「今朋け升

ヨ何方で御坐い升か名を云て下さらないでは困り升が「ヘイ新吉れ女房累で御坐います賤「エ……お内儀が來ゝとサア……ハイ只今 新「よしねへ來る譯はねへ病人で居のゝものの賤「お前達ッて 新 來る氣遣ねへヨ 賤「氣遣がないゝとつてお内儀が迎ひに來たのゞから嬉さうな顔付をしてサ 新「串戲ぢやアねへ嬉しい事も何も有もんか來る氣遣ねへヨ 賤「只今朋け升ヨ 大事な御良人を引留て濟ませんチー、と仇口を利ながらカラッと明けますとゞん〳〵降る中をビショ濡に成て利かない身體で小兒を抱て漸々と樣側から 累「御免なさい、と這入たから 新「何だッて此降中を來たのだナア何しにれだ 累「貴方がお賤さんで御坐い升か聞違つてお目に掛りませんが毎度新吉が上がりまして御厄介樣に成升から何卒一度ゝお目に掛つて御禮を申し度いと存じて居りましても何分にも小兒ゝ御坐い升し私しも疾より不快で居りましゝ故御無沙汰を致しましゝ 賤「誠にマア何も降る中を夜中にお出被成て其樣事を被爲仰てゝ困りますチー新吉さんも江戸からの御馴染で御座い升から私しゝ是地へ參つても馴染も無いもんで御坐い升から遊びにお出被度ゝ下さいと私しが申ましゝ夫から旦那も誠に贔負にして斯う遣て御出で被成が御良人を引留ゝ遊をしたと云へゝお前さんも心持が快くゝ有り升まいけれども是に付てゝ種々深い譯が有事で御座い升が其ゝ只今何も云ひません……新吉さん折角迎ひにお出被成たからお歸りヨ 新「歸へる事ゝねへ……チイお前串戲ぢやアねへ其樣な打扮をして來て見ッても無い本夫の恥を晒しに來る樣なものだエ何たなアオイ此降中をお前何だ逆上て居るぜ迷痴て居るなア

第四十五席

累「ハイ迷痴たろ知りません私ゝ何うなッても宜敷御坐い升が貴方の兒だから殺そとも何とも勝手に被成だが表向にゝ出來ませんから此坊ヤア丈ゝ今晩夜が明けあいうち法藏寺樣へでも願ッて埋葬を致し度と存じ升誰も宅へ參り人はなし私が此病人をは何う致そ事も出來ませんろら何卒一寸お歸り被成て御葬ひ丈を被成て然うしてまた此方へ遊に入しッて下さい……お賤さん私が申し升と宅が立腹致そ升から何卒貴女から今夜丈歸ッて小兒の始末を付て遣と被仰ッて 賤「ハイ…お歸りヨ新吉さんヨウ 新「歸れたッて夜中に仕樣がねへ 賤「夜中だッて用があッて迎ひに來たのだからお歸りヨ……旨く云て居くも本木に優る梢木と無いと云ふ事だからチーお内儀に迎ひに來られゝゝ心持が宜いチー旨く云つたッく莞爾〳〵 顔付に見にるヨ 新「何が莞爾〳〵……串戲ぢやアねへ歸へらねへよチイ 累「ハイ何卒お前さん坊の始末を 新「始末も何もねへ行かねへか 賤「其樣に云ゝすふお前お歸りヨ折角お迎ひに出成被たお誠にお氣の毒樣大事な御良人を引留ゝチ……サアお歸りヨ手を引かれてヨ 新「何を云のだ……歸らねへか、とサア癇癪に障ッたろら新吉ゝ突然利かない身體の女房お累の胸倉を捉るが早いかドンと突と樣側から小兒を抱たなりコロ〳〵と轉がり落ち 累「アゝ情けない新吉さん今夜歸ッて下さらんと此の兒の始末が出來ませんと泥だ

らけの姿で這ひ上る處を突飛すと仰向に倒れると攘はずピタリと戸を締て下し棧

舞ッたから表へお累がワッと啼き倒れまする此の時雨ハ愈〻烈しくドウードット降出しま

す 新「エー氣色が惡い酒を出しねへ 賤「酒をたッて私しハ困るヨ彼樣な酷いことをして一

寸と歸ッてお遣りヨ 新「旨く云ッてやァがる……酒を出しねへ冷たくッても宜いや、と燗

冷しの酒を湯呑ふ八分目許りも酌て飲み 新「お前も飲ねへ、と互ひよ飲で床よ付と何う云

ふ譯う其晩ハお賤ゞ枕を付ると常になくスァ〳〵能く寐ます小川から雨の落込で來る音が

ドウ〳〵と云升夜ハ深けて一際蕭然と致し升と新吉ハ何うも寐付れませんもう小一時も經

たかと思ふと二疊の部屋よ寢て居りました馬方の作藏が魘さゑる聲が 作「ウーンーア……

ア…… 新「忌へましい奴だな此畜生作藏〳〵 チイ作ャ魘れて居るぜ作藏眠を覺されねへかヨ

作藏夢を見て居るのだ作「エ……ウゞーウンア……新「忌へまーい畜生だやィ 作「へエ……

ア、 新「膽を潰サァ串戲ぢやァねへ寢惚るナお賤が眠を覺サァ 作「寢惚たのぢやァねへヨ

新「何うしと 作「已れが彼處よ寢〻居るとお前の處のお前裏の方の竹を打付た窓ゞある彼處のお前雨

戸を明けて如何ーて這入たろと見るとお前の處の姉御お累さんが小兒を抱てッブ濡れで痩

た手を已れの胸の上へ載せてヨウ新吉さんを歸してお呉ンなさいヨ新吉さんを歸してお呉

んなさヘヨと云ッて已れが胸を押壓れる時の怖へへの怖くねへのテ已れハ苦悶ッてロィ利け

なかッと 新「夢を見たのざヨ種〻な事ゞ氣を揉から然う云夢を見るのだ夢だヨ 作「夢で無

ヨ……ア、彼處の二疊の隅よ樽が有だらう 新「ウン 作「樽の上よ籠が掛てある 新「ウンあ

る 作「籠の掛てある處よ小兒を抱いて立て居るヨウ 新「よせ畜生氣の故だ 作「氣の故ざや

ア無へァ、恐怖ねへァレ〳〵 新「チィ潜り込て已れの處へ這入て來ちやァ往けねへ仕樣ゞ

ねへあァ……トン〳〵「御免なさい〳〵 新「誰だィ、作「また來たァ、恐怖ねへ〳〵 新「誰

ざィ 男「エー新吉さんと其方よお出ゞ被成升か一寸くら歸

さんが飛だ事よ成ましたから方々搜して居たんと直ぐよ飯

か…… 新「誰だか見ナ 作「怖くッて外へと出られねへ皆此處

往かねへ足ィすくんで歩行れねへ

第四十六席

新「何方ゞ御坐い升、どガラリと明けて見ると村の者 男「ャァ新吉さん…居だら、ア、好

ろつた、サァ歸ッて、氣の毒とも何とも姉御れ始末が付かねへ何うも搜ーたの索されへの

テ直ぐ歸らないゞれ往げねへ屆ける所へ屆けゞ名主樣へも話しィして子困るからサァ歸ッ

ゞ、と言れ新吉ハ何の事だか頓と分りませんが致し方なく夜明け方ふ歸り升ると情けな

いかな女房お累ハ草苅鎌の研澄しゞので咽喉笛を搖切ゞ片手よ小兒を抱たなり死て居るか

ら悽とする程凄かッたが仕方ゞないろら氣ゞ狂つて抔と云立て先づ名主へも屆れて野邊送

りをする事よ成ました、夫からハ隱りて三藏も中々容易に寄り付ません新吉もお累が死で

らけの姿で這ひ上る處を突飛すと仰向に倒れると攀はずピタリと戸を締て下し桟

雛ッたから表へお累がワッと啼き倒れまする此の時雨ハ愈〳〵烈しくドウードット降出しま

す 新「エー氣色が惡い酒を出しねへ 賤「酒をたッて私しハ困るヨ彼樣な酷いことをして一

すと歸ッてお遣りヨ 新「旨く云ッてやァがる……酒を出しねへ冷たくッても宜いや、と燈

冷しの酒を湯呑小八分目許りも酌て飲み 新「お前も飲ねへ、と互ひよ飲で床よ付と何う云

ふ譯ゥ其晩ハお賤ゥ枕を付ると常になくスァ〳〵能く寐ます小川から雨の落込で來る音が

ドウ〳〵と云升夜ハ深けて一際蕭然と致し升と新吉ハ何うも寐付れませんもう小一時も經

たかと思ふと二疊の部屋よ寢て居りました馬方の作藏が魘さゑる聲が 作「ウーンーア……

ア…… 新「忌へまし い奴だな此畜生作藏〳〵 チイ作ヤ魘れて居るぜ作藏眠を覺さねへかヨ

作藏夢を見て居るのだ作「エ……ウゾーウンア……新「忌へまーい畜生だやイ 作「ヘエ……

ア、 新「膽を潰サァ串戯ぢやァねへ寢惚るナお賤が眠を覺サァ 作「寢惚たのぢやァねへヨ

新「何うしと 作「已れが彼處よ寢〻居るとお前裏の方の竹を打付た窓ゥある彼處のお前雨

戸を明けて如何ーて這入たらと見るとお前の處の姉御お累さんが小兒を抱てッブ濡れで痩

た手を已れの胸の上へ戴せてヨウ新吉さんを歸してお呉んなさいヨ新吉さんを歸してお呉

んあさへヨと云ッて已れが胸を押壓れる時の怖へのテ已れハ苦悶ッてロイ利け

なかッと 新「夢を見たのざヨ種〻な事で氣を揉から然う云夢を見るのだ夢だヨ 作「夢で無

ヨ……ア、彼處の二疊の隅よ樽が有だらう 新「ウン 作「樽の上よ籠が掛てある 新「ウンあ

る 作「籠の掛てある處よ小兒を抱いて立て居るヨウ 新「よせ畜生氣の故だ 作「氣の故ざや

ア無へア、恐怖ねへアレ〳〵 新「チイ潜り込て已れの處へ這入て來ちやァ往けねへ仕樣ゥ

ねへあア……トン〳〵 「御免なさい〳〵 新「誰だイ、作「また來たァ、恐怖ねへ〳〵 新「誰

ざイ 男「エー新吉さんと其方よお出で被成升か一寸くら歸

さんが飛だ事よ成ましたから方々搜して居たんと直ぐよ皈

か…… 新「誰だか見ナ 作「怖くッて外へなど出られねへ皆此處

往かねへ足イすくんで歩行れねへ

第四十六席

新「何方で御坐い升、どガラリと明けて見ると村の者 男「ヤァ新吉さん…居だろ、ア、好

うつた、サァ歸ッて、氣の毒とも何とも姉御れ始末が付かねへ何うも搜ーたの索さねへの

テ直ぐ歸らないでハ往げねへ屈ける所へ屈けと名主樣へも話しイして手困るからサァ歸ッ

と、と言ハれ新吉ハ何の事だか頓と分りませんが致し方なく夜明け方ふ歸り升ると情けな

いかな女房お累ハ草苅鎌の研澄しとので咽喉笛を搖切と片手よ小兒を抱たなり死て居るか

ら悽とする程凄かッたが仕方ゥないうら氣ゥ狂つて抔と云立て先づ名主へも屈れて野邊送

りをする事よ成ました、夫からハ隱りて三藏も中々容易に寄り付ません新吉もお累が死で

仕舞た跡ハ三藏うら内所で金を送る事もおし別ヨ目的があいうら宿替をしやうと欲がる人ヨ悉皆家を讓つて時々お賤の處へシケ込まそ其間ハ仕方がないから水街道へ參ッて宿屋へ泊り大生郷ハ宇治の里へ參ッて泊り抔して惣右衛門が留守だと近々シケ込まず世間でも噂付て居るから新吉と憎まれ者で誰も交際人ダあい横曾根邊りの者ハ新吉ヨ逢ても挨拶もせぬ樣ヨ成まゑた新吉ハドン〳〵降る中を潛と忍んでお賤の處へ來まーた 新「チイ〳〵お賤さん 賤「アイ新吉さんかへ 新「ア、明てお呉れな 賤「アイ能くお出ざチ傘なしかへ 新「傘ハ有たか借傘で柄漏がして駄ても駄ねへでも同ゑ事でズブ濡だ、旦那の病氣ば何うたへ賤お前がチョク〳〵見舞ヨ來て呉れるので新吉ハ親切な者ど心ヨ掛てチョク〳〵來て呉れるが感心だつて悅まんで居るが年が年だからチー何ざッて五十五だもれ病氣疲れでスつかり寢付で居るらお上りヨ 新「然うろへ……夜る來るのも極りが悪い樣だが實ハ少ー小遣が無くなつて外へ泊ゑ譯に往ねへから看病かたノ〳〵來たのだが能く御新造さんが承知で旦那を此方へ越して置くチ 賤「ナーニ碌な看病もしないけれどもお本宅でハ氣ヨ入らないと云ッてチ氣ヨ入た處で看病をして貰ふが宜いと人が來ると憎まれ口を利からお内儀さんも若旦那も此二三日來ないから私一人で看病すゑのどから實は困るヨ困るけれども其代ヨハ首尾ダ宜くッて種々旦那ヨ話して置た事も有のどからチ遺言狀まで私ハ頼んで書て貰ッて置さから……今能く寢付て居るし遊んでお在でお搖ぶうても病氣疲れで能く寢て居るから玆

で何を言ても旦那ヨ聞ける氣遣ひは無し外ヨ誰も居ないから眞ヨ對坐で話しそるがチ私ハ旦那に受出されて此處へ來てお前と江戸に居る時分からマア心易いが私の方で彼樣な事を言出してからお前も否〳〵ながらお内儀ゑで彼云ふ譯ヨ成て苦勞さした事も忘れやアしないから私は何處迄もお前ヨ否がられさる縋り付く了簡だが若しお前ヨ否がられて見捨られゑと困ゑが見捨ないと云ふお前の證據が見度ワ 新「見捨ゑも見捨ないも實ハお前已だつて縁類知已もなゐ身体今は斯う成つて某も鼻摘みで新吉と云ふと他人ハ恐怖を慓つて居るのだ長く此處ヨ居る氣もないうら寧そ土地を替へて常陸の方へでも行うか上州ハ方へ行かうか夫とも江戸へ歸らうと思ふ事も有がお前ダ此處に居るうちハ何うしても離れる事ハ出來ないが村中で憎まれてるから土手ヨ待伏せてもして居て向脛脚でも引拂ハれやアしねかと心配でノウ 賤「私も一緒ヨ行て仕舞ひ度が今旦那が死掛つて居るから旦那が死で仕舞へバ行かれるが今直ヨは行けない大きな聲でハ言へないけれども私は紀念配の事も遺言狀ヨ書かして置さしゑ前の事も書かしてチ、其處は旨く行て居るけども旦那が全快ばまた五十五たもの其樣ヨお爺さんでもないから達者ヨなりやア何時までも一緒ヨ居てペン〳〵とおん爺の機嫌を取らなれば為らないが新吉さん無理な事を頼む樣ヨがお前私を見捨なゐと云證據を見せるゑれど今夜見せてお呉れ 新「何う仕樣 賤「うちの旦那を殺してお呉れナ

新「殺せッて其樣な事ハ出來ねへ　賤「なぜ〳〵何故出來ないノ　新「人情とーて出來ねへお前れ周旋が宜から旦那ハ已れが來ると新吉奴の樣ま深切な者ハねへ小遣を持て行け一人身でハ困るたふう此の帶と奴ま遣る着物も遣ると譬着古ま物でも眞ま深切まして呉れて旦那の顏を見てハ如何しても殺せないヨ　賤「殺せ升、だから新吉さん私ハお前が可愛いと云ふ情のない事を知つて居るヨ　新「情がないとハ　賤「情ゞ有るから殺してお呉れヨ　新「情が有から殺せないのだ　賤「何を云ふのさチ自狂たいヨお出でつたらお出ヨ、然うなると婦人の方ゞ度胸の能ものでの新吉の手を引いて病間へ潛ッと忍んで參り升と惣右衛門ハ病氣疲れでグッスリと寢入端で御坐いま升、ブル〳〵慄へて居る新吉ま搆ハず細引を取て向ふの桂へ結び付け惣右衛門の側へ來て寐息を窺がつて起るか起ぬか試しま小聲で　賤「旦那〳〵と二聲三聲呼んでみてがグウ〳〵と鼾ゞ途斷れませんから悽然と襟の間へ細引を挾みまた此方へ綾ま取てれ賤ハ新吉ま眼注せをするから新吉もモウ仕方がないと度胸を据て細引を手ま卷付げて足を踏張るおしづハ枕を押へて　賤「旦那へ〳〵、と云ひあから枕を引く突端新吉は力ま任して　新「ウンー、と引くと仰向ま寢たあと虛空を摑んで　惣「ウーン　賤「自狂たいチ新吉さんグッと斯うお引きヨもう一ッお引きヨ　新「ウン、と又た引く突端新吉ハ滑ッて後ろの桂で頭をコッン　新「アイタ……　賤「ア、自狂たいチ、と有合せた小杉紙を臺處て三帖ばかり潛して來てビッタリと惣右衛門の顏へ當がつて暫らく置た、新吉は夫れ程の惡徒でもないからブル〳〵慄へて居ま升る、涵紙を取て呼吸を見てパッタリ息ハ絶えた容子細りま揉療治を始めましてすると此の痕ゞ二本付て居り升から手の掌で水を付てハ頻お前ハ今夜歸ッて然うーてコレ〳〵ま呉るのだから明日お前悟られない樣ま度胸を据て來てお呉れヨ、と云て新吉を歸してスッパリ跡方の始末を付て直ま自分ハ本家へ跣足で駈込で行まーて　賤「旦那樣が危篤成りましてまだ息ハ有升が御容子が變ッてから、と云ふと驚ろきまして本家でハ悴惣二郎から弟息子の惣吉にお内儀さん村の年寄が駈て來て見て間ま合ません間ま合ないハ譯で殺した奴が知したので御坐い升から是非なく是ら遺言狀をと云ので出して見ると其書置に私ハ老年の病氣だから明日が日も知ん若ー私が死後ハ家督相續ハ惣二郎また弟惣吉にハ相當の處へ惣二郎の眼識を以て養子お遣て呉れ紀念配ハ是〳〵何事も年寄作右衛門と相談の上事を謀る樣お賤ハ緣類知已もない者無理無体ま身受をして連て來てま者で有うら私ゞ死ねば衆人ま憎まれて此土地ま居られまいから元〳〵の通り江戸へ飯して遣ッて呉ま飯る時ハ必らず金を五十兩付て飯して呉れ紀念わけハお賤に是〳〵新吉ハ折〳〵見舞に來る親切お男なれともお賤と中が好うら村方の者ハ密通でもして居る樣ま思ふが彼ハ江戸からの懇意男で左樣な譯でもあハ親切な者で有事ハ見拔いて居るから已れゞ葬式は本葬ハ跡でしても遺骸を埋めるのハ內葬ましてて湯灌ハ新吉一人に申ー付る外

の者ハ親類でも手を付る事ハ相成ぬ、と云ふ妙な書置で御ざい升が田舎は堅いから其通と
ふ先づお寺様へ知らせよ遣と夜よ入り内葬だから湯灌に成まえても新吉一人、湯灌ハ一人
でハ出來ぬもので棺桶を湯灌場よ置て誰も手を付てハ成ぬと云ふのだから 新「皆さん入し
ッてハ困りまセヨ遺言に背き升から「貴よお前ハ仕合だ、と年寄らら親類の者も本堂よ扣
へて居る是から早桶の蓋を取ると合掌を組たなり惣右衛門の佛様ハ斯う首を垂れて居るの
を見ると新吉は現在自分が殺しさと思ふとチド〳〵して手が附けられません殊よ一人でハ
出來ないかと思ッて居る處へ土手ハ甚藏と云ふ男是ハ新吉と一たん兄弟分に成ました惡漢
甚「新吉〳〵 新「阿哥か 甚「一寸顔出しをしたのだが本家へ行たらお内儀さんが泣て居る
ぢ誠よお愁傷でノウ可惜旦那を殺しさエ、此位物ハ解つた彼様な名主ハ近村よねへ善い人
だが新吉手前仕合だナ一人で湯灌を吸附られて紀念分配も澤山とエ、チィおつう遣つて居
るぜ 新「却つて有難迷惑で一人で困つてるのだ 甚「困るたつて新吉一人で湯灌ハ馴れなく
てつと出來ねへエ、チィ其ぢやア往かねへ内所で已をが手傳つて遣らうか 新「チャア内所
で遣つて呉んねへ

第四十八席

甚「弓張抔ア其方の羽目へ指しねへナ提灯をヨ……盥を伏せて置て佛様の腕の下へ手を入
れてズーと遣ッて盥の際で棺桶を横よすると ズーと足が出る足を盥の上へ載せて胡坐をか

いせて膝で押せばるのた自分の胸の處へ佛様の頭を押付て助骨まで流ふのだ 新「一
人デヤア出來ねへ 甚「已れと馴れて居らア手傳つて遣らう 新「何う 甚「何うだつて盥を伏
するのだヨ提打を其方へ……エー暗へ心を切りねへ……エ、出しねへ……出さ〳〵チハ冷て
エなアお手傳ひで御坐へ……棺桶をグつと引のど 新「何う 甚「何うたつてグつト力よ任し
てエ、氣味を惡がるナ 新「ア……出た〳〵 甚「出たつて出したのだサア胡坐をろハせナ盥
の上へ……宜し〳〵ソリャ來た水を、水ざヨ湯灌をするのよ水が汲でねへのか仕様がねへ
ナア早く水を持て來ねへ、と云ふから新吉ハブル〳〵振べながら二つの手桶を提て井戸端
へ行 甚「旦那お手傳でゲズヨ、と抱上げて見ると佛様の首がガックリ垂れると何う云ふも
のか惣右衛門の鼻から夕ラ〳〵と鼻血が流れました 甚「チや血が出た緣類か親類が來ると
血が出ると云ふが已れハ緣類親類でもねへが何うして血が出るか……チハ恐ろしく片方か
ら出るなア、と仰向にして佛様の首を見ると時過たから前よりハ判然と黑ずんだ紫色に
細引の痕ガ二本有るから甚藏ハジーと暫ら之見て居る處へ手桶提げて新吉がヒヨコ〳〵遣
て來て 新「哥水を持て來たヨ 甚「水を持て來たら此方へ入まて戸を締おヨ新「ナー何だ「甚
此處へ來て見やア佛様の顔を見やア新見たッて仕様がねへ甚見やア此鼻血をヨ 新「往けね
へおア…其様なものを見たつて仕様がねへ…惡い胡藏アするなア 甚「惡いとつて已れがお
いのチやアねへ自然よ出たのだ……新吉咽喉頸の筋が出て居るナ此筋を見や 新「エ……筋

が有たつても搏ゝ子へ水を掛て早く埋やうオイ早く納めやう 甚「納められるもんかへ、やイ、是りやア旦那ハ病氣で死ゞのぢやアねへ變死だ咽喉頸ゝ筋があり鼻血ゞ出れば何奴か縊り殺しゝ奴が有るゝ違へチへ 新「何だ人聽が惡いや大きな聲をしゝさんな佛樣ハ爲ゝなちチべ 甚「手前も已れも旦那にゝ御恩があらア其旦那の變死を此儘ゝ埋ちやア濟チへ彼かゝ吒村ゝ居る奴ゞ殺したゝ違へ無へうら聲を搜ゝて手前も已れも旦那ハ聲を取て恩返しを仕なげアやア濟チへ、代官へても何處へでも引張て行のゞ本堂ゝ若旦那が居るから若旦那に一寸と云つて呼で 新「何だな其樣ゝ事をして哥困るヨ 籤を突付ゝ蛇を出セ樣な事を云ちやア困らアゝ今ゝ經を誦でゝから、エーチイ哥夫は夫ゝして埋て仕舞はふ 甚「埋られるもんかへ夫とも新吉、寶ハ哥 私が殺したんだと一言云やア默つて埋て遣らう 新「何を詰らねへ事を…ナ何を思ひ掛ねへ事を云ぢやアチへか何たつて旦那を 甚「手前が殺しゝんぢなけりやア外に聲が有のゞから聲討をしやうぢやアチへか、手前ゝ賤ゝ疾から深へ中ゞ逢引するゝなア種が上つて居るが手前ハ度胸がなゝつても彼女ア度胸が宜から殺して呉れェと云ひ兼チへ、キウと遣たナ 新「何うも……ナ何ゞつゝ夫は……何も、エ、ヂイ阿哥外の事と違つて大恩人ゞもれ、何う云ふ譯で思ひ違にて其樣な事を、エ、ヂイ阿哥 甚「何を云やアがるのゞ手前が殺さなけりやア殺さチへで宜いやア手前ゝ已れハ兄弟分の好みが有るから打明けて殺しゝと云やア默つて口を拭て埋るゞ外に聲が有ば聲討ゞマア佛樣を本堂へ持て行

う新「コレドイ、何も困るナ、エ、チイ阿哥、エ、阿哥表向にすれば大變な事に成ヨ 甚「エ……成たつて宜ィや、不人情な事を云ふナ手前が殺されたなら黙つて埋るてエのだ殺したら殺したと云ひねへ、殺しさか 新「仕樣がチへナ何うも已まゞ殺したと云ふ譯ちやァねへゞ夫は……困つて仕舞つたナァ……唯だ一寸手傳つたのゝ 甚「ナニ手傳つゝぢやァお賤が遣たが新一夫よゝ種々譯が有ので唯繩を引張ゝ許りで 甚「夫で宜しい引張た許りで澤山だお賤が引なァ女の力ちやァ足チへから新吉さん此繩を締て抔ァ能く有る形だ宜しい宜し〳〵早く水を掛やァ、とザブリ水を打掛て其儘にお香剃の眞似をして暗いうちよ葬りよ成ましたから誰有て知る者は御坐いませんか此種を知て居る者は土手の甚藏許り七日が過ると土手の甚藏が賭博よ負て素つ裸躰よなり塞いうら犢鼻揮の上に馬の腹掛を引掛て妙な姿よ成りましてお賤の處へ參り 甚「エ御免なせへ……と是から强借よある處一寸一息吐きまして

第四十九席

土手れ甚藏がお賤の宅へ參りましたのハ七日も過ましてから炎熱の冷めた時分行ゞのハ巧れ深い奴ゞ御坐い升恰と九月十一日で餘程寒いから素肌へ馬の腹掛を卷付ましたから太輪に抱名荷の紋が肩の處へ出て居り升妙か形を致して 甚「ヘエ御免被成……ヘエ今日ハ 賤「ヘイ何誰へ 甚「ヘエお賤さん御免なさへ今日ハ 賤「チや……新吉さん土手の甚藏さんが來たヨ 新「エー土手の甚藏、新吉ハ他人ゞ來ると火鉢れ側よ食客の樣な風をして居るゞ

人が歸つて仕舞ば本夫振て居り升が甚藏と聞と慄とする程で心の中で驚ろきましたが眼をパチ〳〵して火鉢の側よ小さく成て居ゞ升と 甚「誠よ續いて好鹽梅よ御天氣で 賤「ハイ……サアヤア一服御喫り被成ヨ 甚「ヘエ……御免なさへ斯う云ふ爲体でチーお賤さん御本家へも御悔よ上りましたゞ旦那がお亡なりて嘸もう御愁傷で御坐いませうへエ私も世話よ成た旦那で平常優ゑくして甚藏や惡い事をそると村へ置ねへぞと親切よ意見を云て八釜しい事は八釜しいけれども時ゝ小遣もお呉被成てチ善人で惜まれる人ハ早く死ぬと云ふが五十五ぢやャ定命とハ云れねへ位へゞ嘸お前さんもお力落しで……新吉此家よ居るのが手前、エチイ 新「阿哥此方へお上りなさい 甚「お賤さん新吉がお前さんの處へ來て御厄介で家は彼樣な鹽梅よ成て此方より外に居る處が無へから宜い事よして新吉が寐泊りをして居ると云ふのだか私も新吉もお賤さんもお互ひよ江戸子で妙なもので村の者ぢやァ話しが合チへから新吉と私ハ兄弟分よあり兄弟分の好みで互エよ錢がチへと云やあソレ持てけといふやうよ腹の中をサックリ割た問柄新吉の事を惡く云ふ奴が有ると何でエと云つて喧嘩もする樣な譯でヘエ有難う……カラ最う何うも仕樣がチへ新吉物がヘマに行てナ此通り人間が馬の腹掛を借りて着て居る樣よ成ちやァ意氣地はチへ馬の腹掛けて寒さを凌ぐので……ヘエ有がたう……好いお宅でゲスチー私ゞ初めて來たので 賤「然うですかナニ好い家を拵らへて下すつても仕方が御座りませんヨ斯う急よ旦那樣がお亡れよ成うとゞ思ひませ

んでチー何時でも此處ゴ住て居る丁簡で居ヲまえたが旦那が亡おられては仕方が有ヲません他ゴ行處はなしマア生れ故郷の江戸へ歸る樣お事ゴ成升が本當ゴ夢の樣な心持で嗚呼詰らないものだと考ゲへ出すと悲しく成てチ　甚「然うでせう是は何うも實ゴナア……新吉お賤さんは何の位落膽たか知れやアえね、ナア……へエ有難うお良ひお茶だねー此樣な良茶を村ゴ奴に飲しゴッて分らチ……へエ……有難う…お賤さん誠ゴ申し兼た譯でげそがチー旦那が存命で被爲人バ無論て御無心申すのだが此通りの始末でカラモウ仕樣がチへ何うかお願ひで御坐い升が些と許ヲ小遣をお貰へ申し度が何うか些と計ヲ、借金を償却ゴ江戸へでも歸り度了簡も有のでずが何うか…新吉誠ゴ無理だがお賤さんゴ願つてチー…姉さんお願ひでげそが些と許り小遣をチー　賤「ハイ困り升チー旦那が死亡おりまえて私ゴ小遣も何もないのでそが澤山の事ゴ出來ませんが眞の志許りで誠に少ええ許りで御坐い升が甚「イヽエモウ　賤「眞の少し許りでお足えゴハ成升まいが一杯召喫つて　甚「ヘエ有難うヘエ……ゴヽと開て見ると二朱金で二個　甚「是ハお賤さんたつた一分で　賤「ハイ　甚「一分ヤ二分ぢやア借りたつて私の身の行立譯ハ有ませんチー借金だらけだから些と眼鼻を付て私も何うか堅氣ゴ成てエと思つてお願ひ申のだが夫を一分ぢかり貰つても法が付かチへうら少し眼鼻の付く樣ゴモウ些と許ヲ何うかチ　賤「チャ一分でハ少ないと仰しやるノ、然う、お氣の毒樣出來ません私どもゴ深川に居り升時にも隨分錢貰ひは來ましたが一分遣れハ大概歸りました一分より餘計は上る譯ゴやアヲ參りませんハイ女の身の上で有升からチ、ハイ一分で少ないと仰しやれハ身寄親類ではなし上る譯ハ有ませんか然して幾許欲いと仰しやるので御坐い升エ　甚「幾許カクラてエお强請申そのでげそから貰ふ方で限りハねへ幾許多くッても宜いがお賤さんの方ハ澤山遣りゴくねへと云ふのが當然の話しダガ借金の眼鼻を付けゴ身の立樣ゴして貰ふゴやア何樣な事をしても三拾兩貰はなけりやア押付ねへから三拾兩お借り申えてへのさチエ何か　賤「何だエ三拾兩呆れかへッて仕舞ふヨ女と思つて馬鹿ゴしてお呉れでないヨ何たエお前さんハ、お前さんと私ハ何たエ碌ゴお目ゴ掛つた事も有ませんヨ女一人と思つて馬鹿ゴーて三拾兩ハイ然うですかと誰が貸しますエ訳えな事を云つて、ナン、ナン、ナン何をお前さんに三拾兩お金を借そ緣がないでは有ませんか

第五十席

甚「夫ハ緣ハない、緣はないがチ緣を付けりやア付かねへ事も有ますめへチー新吉と私は兄弟分チー其新吉が此方樣へ來て御厄介に成て居るもの其緣で來ゴ私　賤「新吉さんハ兄弟分か知りませんが私ハお前さんを知りません……新吉さん歸つてお呉んなさいヨウ呆れらア馬鹿〳〵しい人を馬鹿ゴして三拾兩なんて誰が貸奴が有るのか……三拾兩貸す私ゴお前さんゴ弱い尻尾を見られて居れば仕方がないが私の家で情交れ仲宿をえたとの堂敷でも爲たなら怖いから貸す事も有が何もお前さん方ゴ三拾兩の大金を强借ら

ハ有ませんヨ……ハイ三文も出來ませんヨ　甚「然う腹
やァ仕樣がねへ、エ、ヨイ、どがチーお賤さん人間が馬の腹掛を着て來る位の恥を明
しそお前さんよ頼むのだ私も此大の野郎が兩手を突て斯んな形アーてお頼み申それだか
ら能々の事、宜かチー夫よたつと一分ざやァ法か付かねへ、私の樣な大きな野郎ら手を突
てのお頼みざチ此身体を打毀して薪よしても一分や二分のものもあらアチ馬の腹掛を着て
頼むれたがらお前さん三拾兩貸して呉れても宜からうと思ふ賤何ら宜いのたへ、何か宜
いのたヨ何もお前さん方に三拾両の四拾両れと借ることられる縁が有ません惡い事をーた覺え
は有りません博奕の宿や地獄の宿ハーませんから貸されませんヨ　甚「ちやァ何う有ても往
けねへのかへ　賤「飯つてお呉んなさい　甚「然うか無理にお借り申さうと云ふ譯ぢやァねへ
ぢやァ歸りませう……新吉默つて引込で居るなへ此處へ出ろ借りて呉れ、やィ　新「其
樣な大きな聲をあてはせけねへやナ阿哥仕方がねへ……お賤さん仕方がねへ貸ーチー、
賤「何だへお前さんハ心易いか知りませんが私ゝ存しません何樣な事が有ても出來ません
ヨ飯ッてお呉んなさい　甚「何う有ても貸せねへテものァ無理よやァ借ねへじやァ云ッて聞
かせろどコレ女たど思ふから柔和しく出ることやァ宜氣よ成やァがッて大膽へ事をしやァがッ
て色の仲宿や博奕れ堂敵が何程の罪れ世の中に惡い事と云ふなァ人殺しよ有夫姦と盜賊ど
賤「何を云ふのざ　甚「ナニ、何うしたもねへ……新吉此處へ出ろ……エーチィ

咽喉頸の筋が一本拾兩にーても二十兩が物アあらァ　新「マァ……默ッて阿哥　甚「何でエ筵
棒め已れら柔和しゝして居るのだから文句なしよ出すが當然ざ手前等が此村よ居ると村が
穢れらァ手前等を此處へ置くもんか筵棒め今よ道礫刑よしやうと簀卷ふしゝ絹川へ投り込
うと已れか口ーッたから然う思ッてろへ　新「チィ其樣な事を人ふ　甚「人に知れたつて撈ふ
もんかへ　新「マァ〳〵待ねへ、知らねへのだヨお賤さんと一件れ事を知らねへのだヨだか
ら已れが何うか才覺して持ゝ行ふ今夜屹度三拾兩持て行ヨ　甚「間抜め默止て引込んゝ居る
奴が有もんか夫んなら直くよ出せ　新「今は無から晩方までよ持て行ヨ　甚「ぢやァ屹度持ッ
て來い　新「今よ持て行からキャァ〳〵騷かねへで實と已がまゝお賤よ饒舌ねへからだよ當
人が知らねへのだからヨ　甚「コレ博奕の仲宿ハ何だ大膽女ちよゞ　新「其樣な大きな聲を
甚「屹度持て來ハ來ねへと了簡が有ゞ　新「何でと置ても屹度金と持て行ヨ……驚ろい
たチー　賤「チィ新吉さん何たッゝ彼奴にへエつくモーつゝするのゝヨお前ゞへラ〳〵そる
と猶增長すらァチ　新「何うしさも往けないヨ貸なけれりやァ成ねへ　賤「何で彼奴よ貸のた
へ　新「何ゝッて往ねへ事よ成て仕舞ッた……旦那の湯殿の時彼奴か來アやゞッて一人ち
やァ出來ねアへから手傳と云ッて佛樣を見ると咽喉頸よ筋が有のを見付やがッてァ屹度殺
したらう殺ゝたと云やァだまッゝるが云なけりやァ佛樣を本堂へ持て行て詮議方すると云
ふから驚ろいゝ否應なしよ種を明ゝた　賤「アレ〳〵あれだもの新吉さん夫ゝもの本當よ仕

方があいヨ彼までよそるにやァ旦那の壯健の時分から丹精したふ彼は惡徒の種を明して仕舞ッて何うするのだよ幾許貸したッて役よ立つものかヲ側から借りよ來るヨ彼奴がサ 新「だけれども隱すよも何も仕樣がない本堂へ持て行れりやァ直よ惡事が露見ゑやァねへか默ッて埋て遣るから云へと云ふのゑ 賤「本當よ仕樣が無いヨ何處へでも持て行けと云へば宜じやァないか 新「然う云ふと直よ彼男が持で行よ 賤「持て行たッて宜じやァねへか何處でも覺にと有ませんと私も云ひ張ふちやァないか 新「云張れないヨ被男ァ中々の男て夫よ彼ァ云ふ時と口が利けないからヲー脛疵だからふ前れ云ふ樣な訣よやァ往かねへ金で口止めするより外よ仕方ハないヨ 賤「でも三拾兩貸すと當每〳〵來でハ大きな聲で怒鳴と御で甚藏が怒鳴かと他人の耳ふも這入り探索が居るから訝しく勘付られて彼男が縛られて叩かれゐと饒舌かち何れ道新吉さん仕方がない土手の甚藏を何うかして殺してふ仕舞ヨウ

第五十一席

新「何ーと〳〵中々彼男ァ已れより張ハ男を滅法力が有から彼男ハ撲れても痛くねへてエのゑ五人位ゐ蒐らねへしやァふッつかねへ 賤「何うが工夫が有だらうしやァないか 新「工夫が中々往かないヨ 賤「一寸〳〵新吉さん耳をふ貸ー 新「エ……ウン〳〵成程是れハ旨へ賤「だからサァ夫より外よ仕方があいヨ悟られると往けない、惡徒だから悟られなハ樣よ氣丈り男らゑ〳〵ヨと何か私語新吉が得心して旦那の短かい脇差を帶て新吉が日が暮れて少したつと土手れ甚藏の家へ來と土間口うら 新「ハイ御免 甚「サァ上りやァ、マァ下駄を穿たなりで上りやァ、草履か……搏ハねへ疊がねへから掃除も何もしねへから其儘上りや 新「阿哥先刻の樣よ高聲で彼樣な事を云て呉れちやァ困るじやァねへか已は何うしやうかと思つた表よ人でも立て居たら 甚「何故、宜ゑやァ無へか已ゑが面を出したら默つて金を出そかと思つたら迷誤〳〵して居やァがつて、手前ふ賤よ惚て居やァがる馬鹿、彼女め好氣よ成りやァがつて、怒鳴り付けるから仕方なしに云たんだ、此畜生金ー持て來たか 新「彼れらら跡でふ賤よ話しをして實は是々明したと云つたら夫ハ濟まない事を云つた知らなかつたから誠よ惡ハ事を云つたが甚藏さんに惡く思ハねへ樣よ然う云つて呉れと云ふのゑ 甚「手前湯灌場の事を云つたか 新「云つたヨ云つたら驚ろいてふ賤ハ甚藏さんふ濟まなりつた然う云ふ譯あら何故早く私よ然う云ちないで、だが土手の甚藏さんよ茲で三拾や四拾や上ても燒石よ水で駄目だから纏まつた金を上げやうから何うか夫まで堅氣になり、此方も江戸へ行つて小世代を持つからふ互ひに此の事ハ云ねへと云ふ證據の書付でも貰つて澤山ハ上げられないが百兩上るから百兩で堅氣よ成つたら宜からうと云ふのゑ 長「彼樣な事をして居ても甚藏さんも詰らねへじやァないか、兄弟分の友誼で此市 達引て呉れるなら生涯食へる樣よ百兩遣らうと云のゑ百兩貰つて堅氣に成ハ 有難へ百兩呉れゝゑ生涯ふ互エよ堅氣よ成てエ已れも馬鹿ハ廢てエや 新「然 ルねへ

甚「ジャアマア金さへ持て來りやア、新「今茲よいねへ 甚「何を云んンだ馬鹿 新「マア人の云ふ事を聞ねへ旦那が存命のうちゐ賤よ己れが死だら食方ふ困るだらうから死でも食方の付樣よと云つゝ寶ハ根本の聖天山の手水鉢の根よ金が埋く有から夫を以てと吩付て有のゞエー二百両あると思ひねへ聖天山の左りの手水鉢れ側よ二百両埋く有のゞから夫を百両づゝ分て江戸へ持て行ッてゐ互ひふ惡事ハ云はねへ云ひ升めへと約束ーて堅氣よ成て親類に成うちやアねへか 甚「然うか新吉旦那もゐ賤にやア惚れて居たなア二百兩と云ふ金を埋て置て是ゞ食へヨとなア若旦那にも云ハねへで金を埋て置てエのば金持ハ違はア 新「早く堀らねへと彼處の山ハ自然薯を堀よ行く男が有るから無暗に遣ちれると往けねへ 甚「ぢやア早く…… 新「鋤か鍬ハねへか 甚「丁度鋤ゞ有から、と有合の鋤を擔いで是から二十丁もある根本の聖天山へ上つて見る、と四邊ハ森〳〵と樹木が茂つて居り裏手ハ絹川の流ハドウ〳〵と此頃れ雨氣よ水增して急よ落す河水の音高く月ハ光ふと隈なく冴て流れへ映る誠よ好い景色だが高い處は寒う御坐ゐ升のゞ 甚「新吉此處ゞ滅法寒ゐナア 新「ナニ穴を堀と暖かくなつて汗が出ゐよ穴を堀ゞねへ 甚「餘計な事を云ふナ 新「此處ゞ〳〵、と差圖を致し升から甚 宜〳〵と云ながら新吉と土手の甚藏がボカ〳〵堀升る所が金は出ません、幾千堀ても金ハ出ない譯で固よゞ無い金、ビツショリ汗を搖て 甚「新吉金は無へぜ 新「無いね 甚「何を云ふんだ無駄つ骨を折しやアがつて金ハ有やアしねへ

新「左りと云つたがヒョつとしたら向つて左りかもら 甚「何を云ンだ仕樣がねへナ此畜生、咽喉が渴いて仕樣がねへ、斯なにびつしよりに成た 新「己も咽喉が渴くから水を飲てエと思つても手洗鉢は売て柄杓はカラ〳〵だが誰もゐ參りに來ないと見えるナ、ウン然〳〵此方へ來な聖天山の裏手の清水の湧く處がある、社の裏手で崖の中段にチヨロ〳〵煙管の管から出る樣な清水が溜つて月が映つて居る阿哥彼處の水は旨へな 甚「旨へが怖くつて下りられねへ 新「下りられねへて何うかしで下りられるだらう待ねへアノ杉だか松か柏の根方に成て居る處に藤蔓に蔦や何が繩の樣に成て有から阿哥此蔓に吊下つて行ば大丈夫だが己れは行た事かねへからゐ前行て呉んねへナ 甚「此奴ア旨へ事を考がへやアがつた新吉の智惠ちやアねへ樣た此奴ア旨へ柄杓は有か、と手洗鉢の柄杓を口に咬へて土手の甚藏が蔦蔓に掴まつて段々下りて行と恰ど松柏の根方の傍て居る處に足掛りを拵らへて段〳〵と谷間へ下りまして 甚「アー斯うやつて見ると高いナア新吉ヤイ〳〵水は充分あらア 新「早くゐ前飲だら一杯持へ來て呉んねへ 甚「手前下りやアな持へ行く譯にア往かねへボタ〳〵柄杓が濡らア、カラ〳〵に成て居たからナア……アヽ旨へ〳〵甘露だ良い水ダ ナニ持て行のは騷ぎだヨ 新「後生だからゐ願ひだから少しても手拭に浸して 甚「忌へましい奴だナ……待ちやア、と一杯掬ぐ 新「左りと云つたがヒョつとしたら向つて左りかもら 甚「何を云ンだ仕樣がねへナ此畜生、咽喉が渴いて仕樣がねへ、斯なにびつしよりに成た 新「己も咽喉が渴くから水を飲てエと思つても手洗鉢は売て柄杓はカラ〳〵だが誰もゐ參りに來ないと見えるナ、ウン然〳〵此方へ來な聖天山の裏手の清水の湧く處がある、社の裏手で崖の中段にチヨロ〳〵煙管の管から出る樣な清水が溜つて月が映つて居る阿哥彼處の水は旨へな 甚「旨へが怖くつて下りられねへ 新「下りられねへて何うかしで下りられるだらう待ねへアノ杉だか松か柏の根方に成て居る處に藤蔓に蔦や何が繩の樣に成て有から阿哥此蔓に吊下つて行ば大丈夫だが己れは行た事かねへからゐ前行て呉んねへナ 甚「此奴ア旨へ事を考がへやアがつた新吉の智惠ちやアねへ樣た此奴ア旨へ柄杓を口に咬へて土手の甚藏が蔦蔓に掴まつて段々下りて行と恰ど松柏の根方の傍て居る處に足掛りを拵らへて段〳〵と谷間へ下りまして 甚「アー斯うやつて見ると高いナア新吉ヤイ〳〵水は充分あらア 新「早くゐ前飲だら一杯持へ來て呉んねへ 甚「手前下りやアな持へ行く譯にア往かねへボタ〳〵柄杓が濡らア、カラ〳〵に成て居たからナア……アヽ旨へ〳〵甘露だ良い水ダ ナニ持て行のは騷ぎだヨ 新「後生だからゐ願ひだから少しても手拭に浸して 甚「忌へましい奴だナ……待ちやア、と一杯掬ぐ

平らに柄杓の柄を啣へて蔦蔓に掴り松柏の根方を足掛りにして揺れても翻れない樣にして段〻登つて來る處を足掛りの無い處を狙ひすまして新吉が腰に帶したる小力を引抜き力一ぱいにプツリと藤蔓蔦蔓を切るとヅル〳〵ヅーつと眞逆倒に落ちたか何うして松柏の根方は張て居るし山石の角が出張て居り升から頭上を打破つて落升ると迚も助かり樣は御坐いませんが新吉は側にある石をおろ〳〵谷間へ轉がし落しました其のうち頻〳〵と雲が出て月が暗く成ましたから夫を幸はひに新吉は脇差を鞘に納めてサツサと歸つて來て 新「チ、〳〵お賤さん〳〵明けてお呉れ〳〵 賤「誰だエ 新「已らだヨ 賤「ア新吉さんかへ能く歸つて來てお呉だねへ案じて居たヨ、サアお這入 新「アヽビショ濡だ何か斯う單物か何か着て〳〵もんだ 賤「袷と單物と重ねて置たヨ……サア是をお着、旨く行たかへ 新「スツ張り行た 賤「私の云つた通り跡から石を投込たのかへ 新「投込た〳〵氣が付だから跡から石を二個許り投込たアレが頭へ當りやア直に阿陀佛だ 賤「宜い子……今背中を拭から一服お喫ヨ熱湯で拭方が好いから、と銅鹽へ湯を汲で新吉の背中を拭てやり 賤「袷におなり 新「大きにサバ〳〵たと其うち此方へ膳を持て來て酒の燗を付け月を見ながら一猪口初めてモウ是で二人とも怖い者は無ヨ 新「何うも實に旨へ事を考がへて、一寸彼奴も氣が付かねへが藤蔓に傳はつて下りると云つた時に手前の智恵ぢやアねへ樣だと云つた時は胸が悸としたが眞逆倒に成て落る上から側に在つた石をゴロ〳〵、アノ石で頭を打破たに違へねへが彼奴は惡徒の罰だ(已が惡徒の癖に)是から二人で中好く酒盛をして居るうち空は段〻雲が出て來て薄暗くなり 賤「もう寐樣ちやアないか、と云ので戸締りをして掛ましたが 新「また曇つて來たぜ早く仕ねエ 賤「今お待と、床を敷く間新吉は煙草を喫で居ると戸外の處は細い土手に成て下に生垣が有り土手下の葭蘆が茂つて居り升小溝の處をパリ〳〵〳〵と云ふ音 新「何だ音がするぜ 賤「お前さんは臆病だよ少し音がすると…… 新「デモ何だかパリ〳〵 賤「ナアに犬だヨ 新「何だか大變にパリ付ヨ何だらう、と忍怖じ〳〵庭を見る突端に驟雲が斷れて月があり〳〵と照り渡り映す月影で見ると生垣を割て出ましたのは頭髪は亂れて肩に掛り頭盎は打裂て面部から肩へ血だらけになり素肌へ馬の腹掛を卷付た形りで何處を何う助かつたか土手の甚藏が庭に出た時は驚ろきましたの驚ろきませんのでは御坐う升せぬ、是から惡事露見と云ふ處一寸一息吐きまして

第五十三席

引續きお聽きに入れました新吉お賤は我罪を隱さうが爲めに土手の甚藏を欺むいて根元の聖天山の谷へ突落し上から大石を突轉がしましたからモウ甚藏の助かる氣遣ひは無いと安心して二人對坐で堤下の新家で一口飲んで是れから寐やうと思つて雨戸を締やうと云ふ所へ土手の生垣を破つて出たのは土手の甚藏、頭腦は破れて眉間から頤へ掛けて血は流れ素肌に馬の腹掛けを卷付けた姿で庭口の所へ斯う片足踏出して小座敷の方を睨みました其顏

色ハ實に二タ眼とは見られぬ怖敬い怖ひ姿で御座り升から新吉お賤と驚ろいたの驚ろかないのゞつト致しました座敷へ上つてキャア〳〵騒がれてハ大變と思ひましたが新吉は原來夫程悪徒と云ふ程でも有りませんから只だ甚藏の面相に驚ろきぶる〳〵慄へて居から賤「新吉さんお前爰に居てはいけゐいよ何樣な事が有つても詮方がないのら土手へ連れて行て彼奴を斬拂つておしまひよ 新「斬拂ふエたつて出れば殺をれる 賤「大丈夫だヨ戸外へ連れて行て堤の上で。ト愚圖〳〵云つて居るうちズカ〳〵と飛込で椽側へ片足踏のけました甚藏い出樣とする新吉の胸ぐらを把つて 甚「已いけつ太へ男能くも彼の谷へ突落しやァがつたナお賤も助けちやァ置か糸へ能も已れを編しやァがつさなサァ出ろいけつ太へ男だお賤の女も今見て居ろ。と堤の上に引擋つて行かうとする此方は出樣とする向ふは引からづる〳〵と土手下へ落たから 新「ウム後生だから助けて……阿哥苦しい已の持て居る金ハ僉ぬ前に……コレサ阿哥何も彼もみんなれ前ゐ呈るから何うか堪忍して然う云ふ譯ちやァ糸へ行間違ひだから 甚「糞でも喰へナニ痛へと不戯氣やァがるな。と力を入て新吉の手を逆に把つて捻り拳固を振り上げてコニ〳〵撲たから痛いの痛ないのつて眼から火の出るやうて御坐い升 新「阿哥助けて呉れ〳〵。と叫きますのを 甚「卑奴助けるものかれ賤の賤女も今後かゞだ。と腰かゞ出刀庖丁を取出して新吉の胸下を目懸けて突かうとずる新吉ハ仰向ふ成つて 新「已が悪るのつた堪忍して阿哥後生だから助れてヨー。と云ふも大きな聲を出しい事が露顯しやうと思ひ升から小聲で助けて呉んねェーと呼ぶばりで御坐います、すると何處から飛で來ましたかッドンと一發鐵砲の流丸が甚藏が今新吉を殺さうと出刀庖丁を振り翳して居る胸元へ中りましたから バつタリ前へ俯轉りましたが片手ゐ出刀庖丁を持ち片手は土手の草に取つきズーど立上つたが爪立てブル〳〵つと反身に成る途端にガラ〳〵〳〵と口から血吐を吐きながらドンと前へ倒れた時ハ新吉も鐵砲の音に驚ろき呆氣に取られて一向譯が分らないから身分が殺された心がしましたが只た南無阿彌陀佛〳〵と申ましたが暫らくして漸やくに氣が付き起上りまして四邊を見廻えし 新「ア、何處から來たか鐵砲の流丸、お蔭で已ハ助かつたが獵師が兎でも打うど思つて彈丸が反れたかの……ア、僥倖命强かつた危ない處を遁れた誰れが鐵砲を打たか有難いとた併し獵夫が此樣子を見て居りハせぬかと絹刷の方を詠の升れど只水音のみて御坐いまして注來ハ絶えた具の夜中て御坐い升此方の庭の生垣の方からテラリ〳〵と火縄の火が見える樣だから油斷をせず張望て見升ると寐衣帶の姿で小鳥を打升る種か鳥を持つて漸くに草にすがつて來たのなお賤 賤「新吉さんお前に怪我ハ無かつたかへ 新「お賤……手前ハ ア何うした 賤「私ハモウ途方ゐ暮れて仕舞つてお前ゐ怪我をさしてハ成ないのら何うしやうかと思つても女が刃物三昧しても彼奴にハ協ハないし何うしやうのと考がへたからフイト氣がついたんだよ此間ネ旦那が鐵砲を出さて小鳥をうつ時手前もやつて見ろッてんでネ、やッ

と引金に指を掛る事だけネ教へッて疊ゐたので時〻やッた見た事がある今も丸が込めて有る事を思ひ出したから直に旦那の手箱の中から取出してネ思ひ切て遣て見たんだけれども好奇心に近くて發しただけで狙ひも反へず行て、お前に怪我さへ無げれば私へマア有難い新な嬉しい事へ無よ 新「何しろ何うせ此事が露顯せずにへ居ねへ、甚藏を撲殺して仕舞ッてお前と己と一緒に成て居られる譯のものぢやアねへから今のうち身を隱してェものだ

●堰「アヽ私もネ茲に居る氣ハサラ〳〵無いから遺物分のお金も有るのだけれども四十九日まで待ッては居られないから少しは私の貯へへも有るから夫れを待て二人で直ぐに逃げ樣ちやアないか 新「ウム少しも早く今宵の内よ。と云ので是から衣類や櫛 笄 貯へへの金子までも一ト風呂敷として跡を晦ましに明近い頃に逐電して仕舞むまえだ、又た甚藏の死骸へ

[illegible]にありましたが夜が明けて百姓ゞ通り掛つて騷き名主へも屆けたか甚藏へ平素惡[illegible]の何うか死んで呉れれば宜いと思つて居た處ろ甚藏が絹川べりで鐵砲で撃殺されて居ると云ふのを村の人達が聞込んでアヽ是からへ安心だ甚藏が死ねへ村の者が助るまとヨで歌こび其儘名主樣へ屆けて法藏寺に葬つたか投込同樣生存中惡事の罰で勿論惡徒ですから[illegible]の所業と詮議して呉る者も有ません新吉お賤の逃去りましたのは固より不義淫行[illegible]て居て名主樣が沒なると自分達は衣類や手廻りの小道具何や彼やを盜んで居なく成ッ[illegible]彼は素より浮氣を云て居た者の逃亡だから左も有るべーと是も穿鑿る者も[illegible]

いので何事も有りませんが名主惣右衛門へ變死は誰有つて知る者へ無い肝腎の知つて居る甚藏が殺されましたから惣右衛門へ全たく病死をたのだと心得て居り升が中にへ疑がつて居る者も有まえて種と云ふがマア名主の跡目は長男惣次郎・誠に柔和温順の人で阿父さんへ道樂のみを致ましえたが夫れにはひきかへ惣次郎は堅くつて內氣てすから他よ出たとも無い人で御坐い升が或時村の友達よ誘れまして水街道へ參つて桃屋と云ふ家で一猪口やりました其時酌よ出た婦人が名をお隅と申しまえて齡へ廿歳ですが誠に入柄の好い大人しやかの婦人で御坐い升

第五十四席

水街道辺りでへ皆枕附と云ひまして働き女がお客よ身を任せるが多く有升が此お隅へ唯だ無事よ勸めを致えて餘程人柄の好い立振舞のら物の言樣裕捌まで一默の申分のない女ですから惣次郎へ麹屋の亭主を呼で是へ定し出の宜敵い者だらうと聞合せ升と元へ谷出羽守樣の御家來で神崎定右衛門と云ふ人の子で御父親樣と一緒に浜人して此水街道を通り此家に泊り合せると定右衛門が生憎病氣で長く煩らッて沒なり跡で藥代や葬式料に困ッて居り升故宿の主人が金を出して世話を致しまトたから思報ゞ方と此家に奉公致し外よ身寄親類もない心細い身の上で御坐い升から何分願ひ升外の女とは違ひまえて與面目の奉公を致して居り升者ゆえ貧にして下さいと云ふので惣次郎の氣よ入りまして度〻遊びに來る其頃の名主と

中しては中々幅の利いた者ですから名主様の座敷へ出る時は働き女でもマア名主様に出たヨ抔と申して榮譽にしたもので御坐い升惣次郎もお隅には多分の祝義を遣はし折節は吸物などを持て來て遣る事も有から男ぶりと云ひ氣立と云ひ柔和温順で親切な名主様とお隅も大切に致し何うも有難いと思ひ或日の事 隅「私は外に參る處もない身の上で御坐い升から何分御贔負被成て下さい。」と云ので惣次郎も近々來る中に不圖した様で此のお隅と深く成ました事で、今迄堅い人が急に浮れ出すと是は又別で御坐いまして此頃は家を外に致す様な事が度々で御坐い升から阿母様も心配する弟御も御坐い升が是はまだ九歳で何も役にたつ譯でも御坐いませぬから親母様も種々心配被成が常に堅い人だから迂闊意見がましい事も云れませんので扣へて居る、すると其翌年寛政十年となり大生郷村の天神様から左り沈曲ると法恩寺村と云ふ其法恩寺の境内に相撲が有升此相撲場は細川越中守様御免の相撲場と云とで木村權六と云ふ人が只今以て住で居升、繩編の幕張りを致して田舍相撲でも立派な者で近郷からも隨分見物が參り升此處に參って居る關取は花車重吉と云、先達て圓朝古い番附を見ましたが成程西の二段目の末から二番目に居り升是は信州飯山の人で十一の時初めて羽生村へ來て名主方に二年ばかり奉公して居る其中に力もあり體格も好ので自分も好きの處から法恩寺村の場所へ飛入りに這入ると若いにしては強い此間は三段目の角力を投たなどゝ賞られましたから自分も一層相撲に成らうと其頃の源氏山と云ふ年寄の弟子と成ッたが是より花車が來たと云へば土地の者が贔負にして見物に來る惣次郎も何時も多分の祝義を遣いしまえたが今度もお偶を伴て見物しやうと思ひ相撲は附たりお偶ふ逢度かゝ忽卒〳〵支度を致しますと母が心配して 母「アノ歸るから今夜は些と早く歸って貰エ度、明日は少し用が有からのう」惣次郎「少しも遲く成かも知れません若し遲くなれば喜右衛門どんに何彼と頼んで置たから御心配は無いが萬一去て花車も一抔やり度など、言ふと些とも私も遣ア度物も有舛から又歸るまでふ着物でも持たして遣りたう御坐い舛し其様な事で種〻又相談も致し舛から若し遲く成ましたら何うかお先きにお寐み被成ッて下さいまし」母「ハイ遲くなゝは先きに寐ても好だけれどもア此頃は他へ出ると泊ッて來る事もあり今迄旦那様が達者の時分にはお前が家を明けた事はなへ、彼様堅へ若旦那様はなへ今の世は逆様だ親が女郎を買て子が後生を願ふと言ふ唄の通りだ惣次郎様の様な彼様な若旦那ア持ながら惣右衛門どんは高年ィして蕩樂する杯と村の者が言ふから鼻が高へと思ッたが旦那殿が死で仕舞ッて見ると今ではお前の身代さからマア家の爲ェ思ッてお前も今迄骨折ッて呉れた、が去年方りから大分泊りがけふ出かけるものだかゝ村の者も今迄は堅へ人だッたが何う言ふ譯たのゝ泊り歩行が役柄もしながらハア宜くねへ事だア年經た阿母を置てなんて惡口ィ利く者も有で……成だけ他人には能く言はしさいが是は親の慾だかゝれ前の事たから間違へはなかんべーが成たけマア歸れるだら歸ッて貰エてエだ心配だかゝのう

惣二郎「イエナニ然う御心配なれた參ふんても宜しう、是非參り度譯ては有ません花車も來た事だから聊かでも祝義を遣り度と思ひましたが然う云ふ譯あら參ふんでも宜ーいので新右衛門も同道する積りでしたが左樣なれば往かあいでも前方で咎めるでをなし立腹も仕升まい、夫では止免ましう」母「然う云をハァ困るへエいやァねへか行なァとゝ云はねへが出れば泊りがけの事も有し歸ラ祭へ事も有かラ夫で母が案じるかラと云ふので行なァとは云はねへ行ても能かラ早く歸ッて來うと云ふのだゐ前は今迄親に暴言を云ひ掛た事はねへか此頃ゝ容子ウ異ッて意見ラしい事を言へバ顔色が變ふかラ云ふだ私は段〻年を經り惣吉ゝまだ幼少なり役ふは立ねへかラ。お前も堅くッて今迄人ゐ云れる事も無ッただかラ間違へゝ無がラうれども若エ者の噂ふ彼樣なハァ美くしい女子が有かラ家へ歸るゝ厭だんべエ老媼の顔見るも太儀だラう抔と云ふ者も有かラ其樣な事を聞と心配で成ねへもんだかラ少しも能く思ゝせたへのが親の慾で御坐ラァ……行なと云ふ譯でそれへ往てを館かラ歸れたラ早く歸ッて來うと云ふと膽れてそんたラ往くめへ抔と…年寄ればハァ然う不前にまで云はれて邪魔に成カト思ッて早く死度抔と愚痴も出るものでのう

第五十五席

惣次郎「イエ左樣なれば早く歸ッて參り升思ゝず言過ぎて何うも惡るいとをヤまをて今夜は早く歸ッて參り升大きに餘計な御心配を懸ををて誠に濟みません」母「然うたれば宜しい

機嫌を直して往くが宜よ……コレ〳〵太助や」太「ハイ」母「汝伴か」太「〳〵エ」關取が出るてェから行て見樣と思ッて」母「汝口が苛いから人中へ這入て詰らねへ口利てゝ旦那樣の顔に障るから氣イ付て能く柔和く慎しんで往てかうよ」太「ヘー思こまりました私が行けバ大夫丈だそんなら往て參り升左樣なら、と惣次郎ゝ是から水街道の麩屋に行て彼のお住を洲一れて法恩寺村の場所ま行かうと思ッたか今日は大きた入りだと云ふら夫よりゝ花車を他へ招んで酒を飲した方が宜ゝい夫に妁連れで雜沓の中で間違でも有てゝ成ぬ殊にお住を連れて行くゝ心配でもあり役柄をも考がへだのら大生郷の天神樣の宇治の里と云ふ割烹店へ上り此處の奥で一猪口遣ッて居ると問がわるい時ゝ仕方のないもので彼のお住に心底惚を口說て彈かれて安田一角と云ふ横曾根村の撃剣家自かラ道場を建て近村の人達が稽古に參る腕前ゝ鈍くも田舍者を嚇かして居る見た處ゝ强さうな散髮を撫付て肩の幅が三尺もあり腕杯に毛が生へて筋骨逞ましい男で一寸見ゝ名人ラしく見ゐる先生で御坐い升無反の小長いのを帶しし町高の袴をダ、ッ廣く穿き大先生の樣に思はれ升が博賭打のお手傳でもしやうと云ゐ浪人者を二人連れて宇治の里の下座敷で一口遣つて居ると奥に惣次郎がお隅を連れて來居る事を聞とグックッと癪よ障り何か有ッたら關係を付樣と思つて居る此方では御飯が濟だのら歸り掛に花車の家に往かうと云ゐのので急いで出るお隅も安田か來て居るのを認りましたから氣味か惡く早く歸らうと思ふので奥から出て廊下を來るど何うしても其處を

通らぬけれゝ出ゝれないかゝ安田ゝ故意と三人の刀の鐺を出して置き舛と長い刀の柄前に
ゝ隅が躓づきましたのを見ると 安「コレ〳〵待てコレ其處へ行者待て 惣「エ〳〵私で御
坐ゝ舛か 安「手前何處の者か知らんけれとも人の前を通る時ゝ挨拶して通れ殊にコレ武士
の腰に帶して歩行く腰の物の柄前に足をのけて蔑忽て御坐ると一言の謝言も致さず無暗に
參ることが有か必定心有ッてのことたらう 惣「ヘイ頓と心得ません……で御前蹤忽だから往け
ないれ武家樣のゝ腰の物に足をかけて何のことたチー……ヘイ何も相濟ませんで御坐いまし
たッイ取急ぎまして意外不調法を致しました當人に成代りまして御謝を申し上げ舛何分御
勘辨を願ひ舛 安「ナニ謝を申そなラ何處の者か姓名も言はず人に物を謝るには姓名を申せ
白痴め 惣「ヘー手前は羽生村の惣次郎と申す何も辨まへませぬ百姓で御坐い舛 安「ナニ羽
生村の惣次郎……ウム名主だなイヽヤ名主だ羽生村にて外に惣次郎と言ふ名前の者は無い
樣だ名主役をも勤むる者か人の前を通る時にゝ御免被成とのゝ先さに參るとか何とか聊か
禮義會釋を知らぬ事も有まい小前の分ゝぬ者などには理解をも言ひ聞けべき名主役でゝ無
いか夫が殊に武士の腰の物を足下にのけて無言て行くと言ふ方が有か……答めたゝこそ謝
もするか答めずば此儘行き過るてあちう無禮至極の奴……左樣では御坐らんか仁村氏 仁「
是は御腹立の處御尤も是は何も横合から指出て兎や角言ふでは無が、けれとも斯う言ふ席
だから何も先生たつて大したゝ答めを被成譯でも有るまいか今仰せの如く名主役をも勤む

る者が少しゝ其邊の心得が無くては勤まらぬ小前の者が分らん事でも言ふ時ゝ呼寄て理解
をも言ひ聞けべきの役柄だ然るにズン〳〵行と言ふ法てない是はイヤ……先生御立腹御尤
もゝ是ゝ幾許被仰ッても宜しゝ御腹立御尤もの次第で 惣「重々御尤もで相濟ません御尤も
至極で御坐り舛何うか御勘辨を願い舛 安「只勘辨だけでゝ濟むまい苟にも武士の魂とも
言ふ大切な物手前達は何か武士が腰ふ帶して居る物ゝ人斬庖丁あど、惡口を言ふのゝ手前
の樣な者だらうか人を無暗に斬る刀でないヽ、エー戰場の折には敵を斷切るのゝ太刀とも
言ひ片手樣りにするから片刀とも言ひ又短かゝのを鎧通しとも言ふ武士たるものか功名手
柄を致そ處の道具太平の御代に一事一點間違ひを致せゝ直くにも切腹しなけれゝ成ぬ大切
の腰の物じや夫を人切庖丁など、惡口を言ひ居るから挨拶もせずに行たのだ夫に違ひなか
らうナア 連の男「コレゝ先生至極御尤も……怪しのらんと、何だエ、何うも其武士たるへ
き者の腰に帶をるものを人斬庖丁など、は以ての外だ……太平あれゝてそ能いが若し戰場
往來の時是をエヽ太刀とも唱へる片刀とも言ふ…今一ッ短かいのゝ何でしたッけ……ウム
鎧通ーとも言ふ一事一點間違ひが有れは切腹致すべき尊とい處の腰の物夫を何だ無禮至極
何の樣に彼仰ッても宜しい 惣「重々恐れ入りましたか何分御勘辨に成舛事なれは何の樣に
お謝を致して宜敷かゝと心得ません の 安「刀を淨免て返せ淨まれば許して遣ハず 惣「何の
樣に致せは淨まり舛事か百姓風情で何も存ませんて 安「知らんと言ふ事が有か淨めて返

さんうちは勘辨罷り相成らぬ、惣次郎もつく〳〵思りましたがお住ハ平素から一角は酒の上ゞ惡く我儘なのを知ッて居り升また女が出ると柔かに成事も存ゞて居るのら却ッて斯う云ふ時ハ女の方が宜からうと思ッて後の方からつこの〳〵と進み出まして 住「先生誠に久濃

安「何んだ」

第五十六席

住「麹屋の住で御坐い升が只今 私が旦那様のお伴をして來てツイ例の麁粗家で駈出して躓づきまして、足で蹴たの踏だのと云ふ譯でハ有ませんが鳥渡足が觸りましたので貴方と紳て居れど宜敷のに迂濶足が出ましたのも夫故先生樣の御立腹で誠に 私がお供に來て濟ませんから不調法で御坐い升が何卒御勘辨被成て下さいな決為て蹴たの踏だのと云ふ譯でもなゝお供をして來て不調法ゞ有ッては羽生村の旦那さまゝ濟ませんしアノ 私の麁粗家の事ハ先生も御存ぢで入らッしやい升のらお馴染甲斐に不調法の處ハ重ねてお謝を致し升ら御勘辨を 安「默れナニ馴染が何うした馴染あら如何よ無禮致しても濟むと思ふか手前にハ聊の祝義を遣ゝした事も有が何れ程の馴染だ又批者ハ料理屋の働き女に馴染を持たん：：無禮を働らいても馴染なら許して貰へると思ふか鼻を殺ぎ耳を斬ッて馴染だから御免と夫で濟か無禮至極な奴女の足ゝ刀を踏まれては猶更汚れた淨めを返せ 仁「コレハ先生至極御尤もだ……御尤もだが酒も何も不旨く成たナア是は何う云ふ身分柄が知らんが馴染だか

ら勘辨と云ふ謝の仕樣はないが……誰かアゝれ住が妙な處で出會しとナア……先生〳〵麹屋の住で御座い升……能く來たナアニ、住か是は何うも謝まれ〳〵重ハ何も濟ぬ……先生〳〵れ住で御座升、貴公知ゝあんだ、アハ、、、、何うもそ粗ハチー謝るより外に仕方がない謝て勘辨成らんと云ふ事は無い重ゝ恐入ッたと謝……ゝ能く來たナア先生……先生〳〵勘辨して御遣り被成いれ住で御座る 安「テ……何を嘘言、勘辨相成んと。猶更頷に筋を出して中〳〵承知しませんから惣次郎も眞逆其儘に逃出す譯には往かず困り果て居り升と奥の離れ座敷の方に客人ゝ連れられて參ッて居ゝ花車重吉、客人ハ至急の用が出來て歸りましたから花車は遂に此樣子を聞て惣次郎とハ固より馴染なり兄弟分の契約を致した花車で御座い升かゝ心配して居り紳か 太「モシ旦那樣〳〵 惣「何だ 太「關取がチー奥ゝ來て居るだ大きに心配して居るだが一すくら旦那にれ目に掛りてエと云が 惣「ナニ花車か、夫は宜かッた關取に謝をして貰へゝ……一寸 安「コレ〳〵逃出す事ハ成ぬ 惣「イエ逃げは致しませんが主樣を立てまして御謝を申し上げ紳曹ゝく御免を。と云ふので狐鼠〳〵と後にさがる此隙に宇治の里の亭主手代などゝ変る〳〵謝升けれども一向に聞入れが有ません。

惣「關取ゝ此方カヘ 花車「ハイ 惣「誠に何も此所で逢ふとは思はなカッた 花「エ、今悉皆聞きました何しろ相手が悪いがテー……何か是には仔細があッてだアと鑑定して居るが何しろ筋の悪い奴で是は私がテー成り替ッて謝て見ませう 惣「何卒關取なら愛嬌を賣るゝ前

だから厭でも有うか先さの機嫌を直す樣に　花「案玄チーでも宜よ　太「私い宿を出る時に間違へても出かすとなんチーから名前に掛るかゝッて母君に吩咐ッて汝れ行て詰らねと口イ利て間違へ出のしてはなんねへと氣イ付られたんだが斯う成ては私ヤ出先きで濟糸へ事だのら關取頼むゾへ　花「心配しねへでも宜よ私が請合ッた宜しい。と落着ハゝつて花車齡は二十八で有升が至ッて賢い　男「大形の縮緬の單衣の上に黒縮緬の羽織を着て大きな鎖り付の烟草入を握り天窓ハ櫓落しと云ふ髪、一体角力者の愛嬌と云ものは大兵で怖ゝしい姿で太い聲の中に何となく一寸愛嬌の有ものでノサリ〳〵と歩行て參りまして●　花「ハイ御免被成先生今日ハ　安「何だ誰さい　花「ハイ法恩寺の場所ゑ來て居ます花車重吉と云ふ弱イ角力取で何卒ゑ見知り置れて皆樣御贔負に願ひ升　安「ハイ左樣か私は相撲ハ元來嫌ひで遂ゾ見ゑ往ッた事も無いが關取何ゾ用で御坐るかい　花「ハイ只今承たまはりますれば羽生村の旦那樣が貴君方に對して意外不調法をしたと申す事だが何分にも聞濟みがあいのので私は馴染の事でも有に由て……重吉手前ハ顔賣る商買ぢや成り潛ッて謝て呉れいッて頼まれまして見兼て中に這入ましたが●チー重〳〵御立腹でも御舛いませうか斯う云ふ料理屋で商買柄の處で紛紜すれど此家も迷惑なりゑ互ひに一杯づゝも飲まうと思ふに酒を甘うない先生も甘うない譯だから成り替ッてお謝し升から……花車に花を持させて御勘辨を願ひ升　安「誠に氣の毒だか勘辨は致されんて勘辨致し難い譯が有かゝて勘辨しないと云ふハ武士の腰

刀を女の足下に掛られてハ此儘に所持もされぬから淨めて返せと先刻から申しで居るのだ　花「夫ハ然うて有ませう併し出來ない處を無理に頼むので出來にくい處をするの勘辨だア然ゞやア有ませんの　安「無理な事ハ聽かれませんヨ　お前が仲に這入ッては尙更勘辨は出來ぬでハないか　花「ハア私が這入つて何故ネ　安「花車重吉と云ふ有名の角力取が這入ッては勘辨成ん是が七十八十よある水鼻を半分クッ缶して腰の曲ッた水呑百姓が年に免じて何卒甚忍して下されと頭を下げれバ堪忍する事も出來●やうが立派の角力取天下に顔を賣る者に安田一角が勘辨したと有バ力士ゑ畏れて勘辨〳〵たと云ハれてハ今井田流の表札に關はるから猶更勘辨ハ出來んゝらナア　花「夫ハ因り升ネー夫〳〵やア物に角が立ち升先生私は天下の力士でも何でもないワまア長袖の身の上で皆さんの贔負を受あげれば成ん裸体でお前さんの贔負を受あげれば成ん裸体でお前さん●取まは〳〵一つで以ッてから大勢樣の前に出てマア勝も負るも時の運次第で轉〳〵砂の中へ轉がッて着物を投ッて賢ひ勝たとか負たとか云ふ處が愛嬌ぢやア然う云て見れば皆さんの御贔負を受あけれバ成ん貴方が勘辨して下されバッレ花車彼奴ハ愛嬌者ぢやア生先が勘辨出來ない處を花車を贔負成バこそ勘辨したと云へば夫て私ハ生先のお陰て又賣出し升然うぢやア御坐いませんの勘辨してお呉んあさい　安「堪忍ハ出來ぬ　花「出來ぬてハ因り升　安「イヤ勘辨出來ぬ武士に二言ないワ

「其様な事云ふて對手が武士か劍術家ぬれば兎も角も高が女の事だからョー大概よ
しろョ 安田「大概にしろョとい何だ花「是い言損あッた……是は角力取は斯う云ふ口の利
やうで迂濶云ッた勘辨しろョー 安「勘辨ーろョとい何だ花「ホイまた言損なッた 安「勘辨
ろョとい何だ手前も大各高家の前に出て御盃を頂く力士でい無いか挨拶の仕様を存せぬ
事いない大概にしろの勘辨しろよノと云ふ言様が有か、猶更勘辨ならん無禮至極不埒な奴
だ」と側に有飲み冷しの大盃を把てボント放ると花車の顔から肩へ掛てピッシリ埃た
らけの酒を浴ました 花「先生お前さん酒を打掛たネおやァ何有ても勘辨出來ないと極めた
か、夫でい仕方がないが先生 私も花車との間とか肩書のある力士の端くれ、人に頼まれ
、中に這入ッて勘辨ならんハァ然で御坐い升かと指を嚙へて引込む事い出來ぬ私い馬鹿
だ智恵が足りぬへから挨拶の仕様を知らぬ何卒斯うセイと敎へて下せいお前の云ふ通り行
ませう、ネー何うあとお顏を立様カラ斯うしろと敎へて下さへ 安「是い面白い予の顏を立
る主意を立てるあれば勘辨致す不禮を働らいたお住と云ふ女い不屆至極たカラ彼の婦人を
惣次郎カラ貰ひ切ッて予に引渡ッて下さい道場に連て參ッて存寄り通りにする 花「夫い出て
來ない彼は御存知の水衝道の麹屋の女中で高い給金で抱へて置く女た今日一日羽生村の名
主様が借て來たんだ夫を不禮した勘辨出來ないと云ッて道場へ連れて行く、ハイと云ッて
證れぬ、私にしてモ然うです道場へ引カレ、ど煮て喰ふか燒て喰ふか天窓から鹽をつけて
喰レルカ知れぬへものを、夫ハ出來ぬ出來ぬ相談夫ちやァ仕様がねへわ 安「夫じゃァ何
故主意を立ると云ッたお前い力士唯たの男とい違ふ一旦言ッた事を反古にする事いない武
士に二言いない刀に掛ても女を貰ひませう 花「是い仕様がネエ、ぢやァマァ、お前さんが
劍術家ダカラ刀に掛てモ貰えふと云だら私い角力取だから力に掛ても遣る事ハ出來ぬと
極めた、夫より外い出來ませんわ、と云ふと一角モ額に青筋を張て中と睨き出せ[illegible]
お飯を喫に這入ッた人達も驚ろきましたが中にい角力好で江戸の[illegible]
客「何うたモウ歸らうぢやァネーか頑固な武士た彼の畜生[illegible]
來るたッて深しい親類でもねへが場所中關取が出るから來て居[illegible]
ナァ體格が出來て愛嬌相樸た一寸手取で……大概角力取が出れ[illegible]ものたが彼奴め
酒を打掛やァがッて酷い事しやァがる 客「相手の武士い三人た[illegible]ト起て暴れると
根太が拔るョ 客「斯う仕様ぢやァなねへカ折を然う云ても[illegible]から殘して往ッて
も無駄たあら此生鮭と玉子燒抔ァ持て行う、抔と横着な奴[illegible]紙を布て徐と着を
包み始めた 花「ぢやァ先生斯うしませう此處の家でゴタ[illegible]か此家へ迷惑かけて外
に客が有から怪我でもさーては成ません戸外に出て廣と[illegible]の田甫[illegible]遠[illegible]させ
う私も男た逃げ隱れもしません 安「面白い出ろと云ので三人ッ[illegible]た 客「喧嘩ダァ〳〵
、と他の客えバラ〳〵逃げ出したが代を拂ッて行者は一人もないョ横着者い刺身皿を懷中

に隠して持ッて行く者もあり中には科理番の處へ駈込んで生鮭を三本も持ッて逃出す者も
あり宇治の里でハ驚ろきましたが安田一角ハ二人の助けを頼みとして袴ハ股立ちを取ッて
長いのを引拔ぎ振翳したから二人ハ武士も義理で長いのを引扳三人の武士か長い閃ックの
●を持ッテ立並んで居るから近邊の者ハ驚ろきまーた惣次郎は猶更心配で御坐い升から惣「
闘取お前に怪我をさせては親方に濟まぬから 花「宜ヨ親方も何もないお前さん彼地へ行て
下せヘヨ己れが引受たからハ世間へ顔出しが出來ませんから退く事ハ出來ない何卒事あく
過る積りで、お前さんハ心配を云ねへて……宜ヨお住さんを伴て構ハず往ッて下さい……
……太助さんも行ッて下さい旦那樣が茲ハ居てハ惡いから歸ッて下さへ、惣次郎ハ歸れたッ
て歸られませんし此儘にハされず恐さを怖し何うしやうかとオド〳〵して居ると花車ハス
ーと羽織と單物を脱ましたが角力取の喧嘩は大抵裸体のもので花車は衣服を脱と下にハ取
り廻ーをゞめて居る、ウーンと腹を搖り上ると腹の大きさハ斯樣に成升飴細工の狸みた樣
で取廻しの處へ銀拵らへの胴金の刀を帶云皂地の手拭ひで向鉢巻を云て飛下りるとズーン
と地響きがする、腕抔は松れ樹の樣で腹を立たから力ハ滿て居るズーと飛出すと見物人ハ
「ワアー闘取氣丈云ろ。と云ふ安田一角ハ袴の股立を取ッて 安「サア來い。と長いのを振
上げて居る此の中へ素裸て花車重吉が飛込むと云ゐところ一寸一ト息吐きまして

引續きまして角力と劍客者の喧嘩で角力と云ふ者ハ愛嬌を持ました者で御坐いまして只
今では闘けた世の中で御坐い升カラ見識を取りませんで闘取衆が藝妓の中へ這入て甚丸を
踊り或ひは鏑聲で端唄をやる抔と開けましたが舊昔には天下の力士と云ふ名がなり御大名
の抱へて有升から段と承たまハッて見升ると菅原家カラ系圖を引て正數もので幕の内と稱
へるは御大名が御軍陣の時角力取を引率て入シつて旗持にしたと言ふ事で御坐います旗持
まハ力が要升ので力士が出升る者で御見附抔の幕の内にハ角力取が五人位ゐづゝ勤めて居
り升其幕の内に居たカラ幕の内と言ふお辨當を喫つて居るのが小結と言ふ、然う言ふ譯で
モ有升ましが見た處ハ見上る樣で胸毛が有て膏藥の痕抔が有て怖ラシい樣で有升が愛嬌の
有モので御坐い升一寸起て踊りますと里い身体で輕く甚丸抔を踊り升と姉さん達ハ、寄麗
ちやアないカ可愛ちやアないカ踊る姿が好い事あれで角力を取ゐいと宜い事、杯と天では
●角力デモ何デモ有ません演劇デモ稲川秋津島杯と言ふと上等俳優が致云升極く古昔二段目
三段目位ゐに立派な角力が有ました、が花車抔ハ西の方二段目の槌カ末カラ二三枚目に仕り
ました其頃愛嬌角力デ贔負モ有升角力上手デ御坐い升カラ評判が宜い今に幕の内ヨ登ると
言ふ噂が有まして花車重吉は誠ヨ正直男殊にハ羽生村の名主の家に三年も奉公して角力ヨ
成ましてからハ大して惣次郎も贔負にゝて幼年時分からの馴染で兄弟分の約束をして酒を
飲合た事も有升から恩報しと云ふので割て中へ這入ましたが劍客者は重ね厚の新刀を引拔

て三人が大生郷の鳥居前の所へピラックのを提て出さトたから大概な者い驚ろいて逃げる位ゐて有升が逃げなとはいたしませんズーと出て大い手をついて斯う拳を握り詰升ると刀瘤と言ふのが腕一ぱいに満ら升見物い今角力と剣客者との喧嘩か有ると云ふのて近村の者まて喧嘩を見よ參る田甫い處畦道に立て伸上つて見て居る 花「先生此處い天神前で私い お前さんと喧嘩する事い斯う成たのらい私い引に引かれぬからお前さん方三人に蹴られた其の時い是非か無事ゞやか御朱印付の天神様社内で喧嘩ーてもふ前きんも立派な先生私も角力の末坐事譯知らぬ奴ちや天神様ぬ社内を穢した・物を知らぬと云はれていお互にひ恥ちや、ネー死恥かき度ぬへ(のら鳥居の外へ出なせへ、是は理の當然て 安田「ウン宜敵能く覺悟をて鳥居外へ參らう、と三人出たのら見物い段〻跡へ退る扳身でい何樣な人ても退る豆藏が水を撒のとゞ違ふ怖かないからハラ〳〵と人が退き升 見物「何うだ本當ょ力士てエ者い感心ちやァねへ只た一人に二人蹴りやァがつて大概に彼奴勘辨しやァかるか宜い何だシト謝言ーたら恥ちやァ有めへし畜生・・・・・闘取鎧丈やつて己ァお前の角力を見よ來たのてお前が嘩喧に負ると江戸へ歸れぬへ戯言ぢやァねへ剣術者を踏殺せ 安「何た 見物「危険た・・・・氣丈やつて呉れ 花「逃げも隠れもしねへ長崎へ逃げ様と仙臺へ逃げ様と花車重吉逐電ゞ出來ぬのら卑怯な事はしねへが玆てお前さんに切られて死ゞもう湯も茶も飲ません喧嘩い緩くら出來升から一服やる間ゞ暫時待て 安「ナニ、これ喧嘩する端ょ一服吸ボと何た愚弄するな 花「心配有ません末期の煙草た死たら呑ませんワ一服やりませう・・・・・・・誰の火を貸してお呉んなさへ、見物の中から煙草の火を與かふ奴がある、パクリ〳〵暗下りに呑で居る 花「まァ緩くり行りませうエ先生逃げ隠れいせぬせ、とパクリ〳〵と吸つて居る見物え 見物「氣が長へちやァねへか嘩喧の中て煙草を呑んて沈着て居る苛エぢやァねへか 見物「苛へ許りてねへ己れの考がへぢやァ闘取い怜悧たから對手い剣術者ひで危険から怪我ァしても詰らねへ闘取が手間取て居るうち報恩寺村場所へ人を遣ッたろうと思ふ若え然うたと二拾人も角力取が押て來れば踏潰して仕舞ふ然うたらうョ 花「サァ先生嘩喧致〻升が私も一本帶して居るから剣術い知らぬなからも切合を致すが私が鞘を拂つてからお前さん方斬てお出なせへ 安「尤も左樣て卑怯いしないサァ出ろ 花「ヘエ出升マァ私も此近邊で成長た者ぢやァか此の大生郷の天神樣の鳥居と云つたら大きな者ぢやァ見上てコレマァ私が抱へても一抱へある鳥居、此鳥居も今日が見納め〻やァ、と鳥居を抱へて花大きな鳥居ぢやァないか、と金剛力を出して一振すると恐ろしい力、鳥居は笠木と一文字が斐にドンと落た剣術遣ひが一刀を振上て居る頭の處へ眞一文字に倒れ落たから驚ろきましたの驚ろきませんのと膽を拉てパッと跡へ退る見物いワイ〳〵云ふ其勢ひに驚ろき何の位ゐの力かと安田い迚も敵はぬと思つて白刀を持てバラ〳〵逃げると彌次馬に農業を仕掛て居た百姓衆が各こ鋤鍬を持て 百姓「撲殺して仕舞へ、とわイ〳〵騒ぐから三人の剣客者は雲霞と

林を潛ッて逃げやゝした

第五十九席

花車「ハ……逃げやアがつた弱へ奴だ……サア案ずはね面私が送つて行ませう、と脱た衣服を着て煙草入を提げ惣次郎を送つて自分ハ報恩寺村の塲所へ歸つた角力ハ五日の間首尾能く興行て歸る時ハ花車「鳥居の笠着を落ちたから旦那さま鳥居を上て下さらんでハ困ると言ふのて惣次郎ハ金を出して鳥居を以前の通りおしまゝた其の鳥居ハ只今でハ木あれとも花車ハ奉納めました石の鳥居ハ天神山に今に有ます、塲所を仕舞て花車ハ江戸へ歸らんければ成んから歸つて仕舞た後ハ惣次郎ゝ怖くッて他へハ出られません安田一角ハ喧嘩の遺恨兼人の中て恥辱を晒たから惣次郎ハ助けて置クぬ、抔と嚇しに人ハ逢ふと饒舌から怖くつて惣次郎ハ頗と外出を致しません力に思ふ花車か居ないから村の者も心配ゑて居ります餘り家に許り蟄ゑて居り升から母モ心配して惣次郎が深く言ひ換した女故間違ひや出來其女の身上は何うカと聞くに元武士の娘で親父モろ共浪人して水街道へ來て親の石塔料の爲め奉公ゑて居ると聞き其頃ハ武士を尊ぶから母ハ感心して然う言ふ者なれハ金を出して當人が氣ハ適たあラ何うせ嫁を貰ハんでハ成んから貰ひ度、と水街道の麹屋へ話してお住を金で身受して家へ連れて來てやゝづ動靜を見ると柔和デ標致と言ひ誠ハ母へも能く事へ升故母の氣にも適て村方のものを聘デ取極をして内祝言丈を濟まして内儀ハ翌年になり升

と恰ど此の眞桑瓜時分下總瓜と言て彼地ハ早く出來升惣次郎の瓜畑を通り掛つた人ハ山倉富五郎と言ふ座光寺源三郎の用人役デ有て放蕩無頼にして親にハ勘當され其中座光寺源三郎の家ハ潰き常陸の國ハ知己ガ有カラ金ハ無心ハ行たガ當ハ外れ少しでも金が有バ素より廻りの帶をゞて暑くて照り付から頭へ置手拭をして時と流れ川の冷たい水で冷して載せ日除に手を出せば手が熱くなり腕組みをすれバ腕が熱ゑ仕樣がおくぶらり〳〵と參りました

富「アゝ進退玆に谷まッたなァ何うも世の中に何が辛苦と云ッて腹の空る位ゐ辛苦事はないが何うも鳥目が無ッて食へないと猶更空るネーア、天草の戰爭でも兵粮責では敵はぬから高松の水責と雖ども彼も兵粮責天草でも駒本根八兵衛鷲塚忠右衛門天草玄札杯と云ふ勇士ゞ居ても兵糧責ハは叶ハぬアゝ大きな聲ををると腹へ響ける……太層眞桑瓜が成て居るナァ眞桑瓜ハ腹の空た時の凌ぎになる腹に溜る物だが迂濶取る處を人に見られゝバ野暴しの刑で生埋にするか川へ簀巻ハとて投り込れるか知れんから一個採切て食事も出來ぬが大層旧ッて熟して居るけれども眞桑瓜を默ッて持て行くハ宜しくないと云ふが一寸此處で食ふ位ゐの事ハ何も野暴ゑでもないのら宜のらう一個採切て食ハふか、〻怖と四方を見ると瓜番小屋に人も居ない樣だからマァ好塩梅と腹が空て堪らぬから眞桑瓜を食しましたが庖丁がないから皮ごゝ喫り空腹たから續けて五個許り喫べ次で往けバ宜敷ハに先へ行て腹が

林を潜って逃げ去した

第五十九席

花車「ハ……逃げやアがつた弱へ奴だ……サア案ドはね返私が送つて行ませう、と脱た衣服を着て煙草入を提げ惣次郎を送つて自分ハ報恩寺村の塰所へ歸つた角力ハ五日の間首尾能く興行て歸る時ハ花車鳥居の笠着を落えたから旦那さま鳥居を上て下さらんでハ困ると言ふので惣次郎ハ金を出えて鳥居を以前の通りゐしまゝた其の鳥居ハ只今でハ木あれとも花車れ奉納めした石の鳥居ハ天神山に今に有ます、塰所を仕舞て花車ハ江戸へ歸らんければ成んから歸つて仕舞た後ハ惣次郎ハ怖くッて他へハ出られません安田一角ハ喧嘩の遺恨衆人の中で恥辱を晒たから惣次郎ハ助けて置クぬ、抔と嚇しに人ハ逢ふと饒舌から怖くつて惣次郎ハ頓と外出を致しません力に思ふ花車が居ないから村の者も心配えて居ります餘り家に許り塾えて居り升から母モ心配して惣次郎が深く言ひ摸〜た女故間違ひ出來其女の身上は何うかと聞くに元武士の娘で親父モろ共浪人して水街道へ來て親の石塔料の爲め奉公えて居ると聞き其頃ハ武士を尊ぶから母ハ感心して然う言ふ者なれハ金を出して當人が氣ハ適たあラ何うせ嫁を貰ハんでハ成んから貰ひ度、と水街道の麹屋へ話してお住を金で身受して家へ連れて來てゆづ動靜を見ると柔和デ標致と言ひ誠ハ母へも能く事へ升故母の氣にも適て村方のものを聘デ取極をして内祝言丈を濟ましして内儀ハ翌年になり升

と恰ど此の眞桑瓜時分下總瓜と言て彼地ハ早く出來升惣次郎の瓜畑を通り掛つた人ハ山倉富五郎と言ふ座光寺源三郎の用人役デ有て放蕩無類にして親にハ勘當され其中座光寺源三郎の家ハ潰を常陸の國ハ知己が有カラ金の無心ハ行だが當ハ外れ少しでも金が有ば素より娼妓でも買ふと云ふ質一文無で腹が空て怪しい衣服を着て小短いのを帶して眞の出た二重廻りの帶をゞて暑くて照り付から頭へ置手拭をして時と流れ川の冷たい水で冷して戴せ日除に手を出せば手が熱くなり腕組みをすれば腕が熱え仕樣があくぶらり〳〵と參りました

富「アヽ進退茲に谷まッたなア何うも世の中に何が辛苦と云ッて腹の空る位ゐ辛苦事はないが何うも鳥目が無ッて食へないと猶更空るネーアヽ天草の戰爭でも兵粮責では敵はぬから高松の水責と雖ども彼も兵粮責天草でも駒本根八兵衛驚塚忠右衛門天草玄札杯と云ふ勇士ゞ居ても兵糧責ハは叶ハぬアヽ大きな聲ををると腹へ響ける……太層眞桑瓜が成て居るナア眞桑瓜ハ腹の空た時の凌ぎになる腹に溜る物だが迂濶取る處を人に見られ、ば野暴しの刑で生埋にするか川へ簀巻ヨトて投り込れるか知れんから一個採切て食事も出來ぬが大層成ッて熟して居るけれども眞桑瓜を默ッて持て行くハ宜しくないと云ふが一寸此處で食ふ位ゐの事ハ何も野暴ゐでもないのら宜このらう一個採切て食ハふか、〳〵怖と四方を見ると瓜番小屋に人も居ない樣だからマア好塩梅と腹が空て堪らぬから眞桑瓜を食しましたが庖丁がないから皮ごゝ喫り空腹たから續けて五個許り喫べ先で往けば宜敷ゐに先へ行て腹が

空てゝ成んから二個三個思意に持て行らと右袂へ二個左袂へ三個懷中から背中へ突込だり何かして盗んだなり斯う起と向ふの畑の間から百姓がコヨコリと出た時ゝ驚ろきました

百姓「何んだか足下ゝ何んだか 富「ヘエ…誠に何うも嚴敷暑さで お暑い事て 百「此野郎めマア生空遣やアがッて此處を瓜の皮だらけよしやアがつた汝瓜食つたナ 富「何う致しまして腹痛で御坐い升のら押へて少ー腰屈で居りましたが暑氣に中つて居り升ので先から瓜の皮ゝ有升が取ゝ致しませねテ 百「此野郎懷中へ入やあがづて生空つかやあがつて瓜盗んでお暑う御坐います杯と此野郎……ホカリ撲倒し升と 富「ア痛タヽと蹌跟突端ゐ袂や懷中から瓜が出る其内に又二三人百姓が出て來て忽地に山倉ゝ名主へ引ゑ間が悪い殊に名主の瓜畑だから瓜釜數、庭へ引かゑ麻繩で縛られ升と廢ば宜いよ名主物次郎ゝ情け深い人たから樣側へ煙草盆を持ち出して參つて 惣「此奴この眞桑瓜を食たのゝ男ヘエ…此野郎で草むしりに出て居り升と瓜畑の中からニヨコリと起ちアがつたのら何ずると云つたら嚴敷いお暑さなんでコギアがつて誰も居やアすめへと思つて、瓜の皮が有から盗んだんべゑと撲と懷中からも袂からも瓜が出たぞ…何處の者この江戸らしい言葉だ 惣「お前が眞桑瓜を盗だかい

第六十席

富「ヘニ〳〵〳〵恥入ました事で手前主名ゝ明〳〵兼升るが迂論と思召すなれゝ主名も申し上升るが手前事は元千百五十石を取ッた天下の旗本の用人役をした山倉富右衛門の悴富五郎と申ス者主家改易よなり常陸に知已がある爲是へ金才覺に參ッて見るに先方は行衛知ず餘儀なく旅費を遣ひ果してより實ゝ食事も致しませんで空腹の餘り悪い事とゝ知りあから二個三個瓜を盗み喫ました處を御咎めで何とも耻入ました事で武士たる者ゞ縄に掛り此上もない耻で何うこの可憐と思召さて御許し下されゝ此後ゝ慎ゑみ升る何うか御情けを以ッて御許しを願ひ度存ます 惣「眞桑瓜を盗んだのらと云つて何も殺しゝしない眞桑瓜と人間とは同一にゝならん殺しはせんか茲で助けても是から何處へ行あさる行處が有升のへ 富「ヘエ〳〵何處と云て當も何もあいれでト云て凄ク江戸表へ立歸る丁簡も御坐いません…空腹の餘り悪と知なから箇樣なる悪事をして恐れ入升 惣「シャア茲で許ーで上げても他へ行て腹が空ると復た盗まなけれゝならん私の村で許しても外でゝ許さぬ今度を質巻にゝて川へ投り込か生埋にするか知れぬのら私が茲で助けても親切が届かんてゝ詰らんお前さんの言葉の容子でゝ武家よ相違ない樣だが私の處は秋口で書物杯が閙が敷ゞ何うだネ許して上升が私の家よ恩報しと思つて半年許り書物の手傳をゝて居て貰ひ度が何うだネ 富「ヘエ……何うも恐れ入ました事て箇樣なる何うも罪を犯ーた者をお助け下さるのみならず半年も置てお養ひ下さるとゝ何とも何うも恐入ました此御恩ゝ死ても忘却は致しません何の樣なる事でも實に寐る眼も寐ずに致しますから何卒お助けを願ひます 惣「宜しい繩を

解け、と解のしまして 惣「お腹が空たらう……サア御膳をお喫り、とサア是のら富五郎か喫たの喫ないのソて山盛にして八杯許り食ふ をする氣ても有升まいが澤山喫まゝた書物を遣らえて見ると帳面位は記け、算盤も遣り調法で辨茶羅の男て百姓を武家言葉で嚇し升から用か足る黒の羽織杯を貰ひ一本帯して居る其うち 富「古い袴が欲い小前の者を制升にい是でおけれも杯と辨チヤラを云ふ惣次郎の顔が有のら富さん〳〵と大事にする段と臀が暖まるに増長して索より好な酒だから何程止めろと云ても外で飲みます・スルと一日の事でスブロク醉て歸ると惣次郎い居りません母い寺參りに往てお住が一人り奥て裁縫をして居る 富「只今歸りまえた 住「ヲヤマア早く御歸りで今日い大層醉て何處へ 富「ヘエ……水街道から戸頃まで……早朝から出まして一寸歸りに水街道の麹屋へ寄りましたら能く來たと云ふので彼の麹屋の主人が一杯と云ふので有物で馳走に成まして大きに遲く成りまえた 住「大層眞赤に醉てジヤア旦那樣へお歸りい有升まい阿母樣は寺參りに 富「左樣で御老体に成升と何うも御墓參りより外樂みいあいと見えて毎日入らつしやい升が恐入ますまた旦那樣の御容子てエナネー誠にド……何うも恐入ます エ……貴女い お家で柔和やかに裁縫を被成て被爲入い何うも恐入ますネード……何うも富五郎何うも頂きました 住「大層眞赤に成て些と ふ寐みな 富「中〻寐度ない……一服頂戴、阿母樣は御寺參りまた和尚さんと長話し和尚樣はべラ〳〵有難さうに云ひ升ネ……だが貴女が御裁縫姿の柔和やのなるい實に恐入升ネ

住「少しお寐みヨ 富「ヘエ〳〵寐度ないので……貴女い段と承まいると然るへき處の御高澤山ふ取遊ばした御武家の嬢樣だが御運惡く水街道へ被爲入まえて御親父樣が死去に成て餘儀なく斯う云ふ處へ入らしッて其内彼云ふ不規則な稼業の中ゝ居て貴女が正しく私は武士の娘だがと云ふ行狀を當家の主人が整然と見上て是こそ女房と云ふ譯で此方へ被爲入たのだが貴女だッてもマア 私の考がへが間違たか知れんか武士たる者の娘が何も生涯と云ふ譯でハなし此家は眞の腰掛て・詰らんと云ッてエ濟ませんがけれとも貴女生涯此家に居る思召は有升まい手前夫を心得て居るが拙者も止を得ず此處ゝ居る致し方がないから半年も助ろ來年迄居ろヨ 有難うと御主命で子長く居る氣い有ません貴女も眞の當座の腰掛で被爲入るが口ゝ出せんでも心中に在るネ内祝言は濟でも別に貴女の弘もなし弘を被成譯もない貴女も故郷懷しう御坐いませう故郷忘〻難し御府内で生れた者ハネエ然うでハ御坐いませんかネ 隅 夫はお前江戸で生れた者は江戸の結構は知ッて居るから江戸は見度のを懷しいネ 富「有難い其お言葉で 私い皆悉安心して仕舞ど夫がなけれい詰らんで・・ネエ武士の娘・其そこが武士の娘・手前ども小祿者だけども此處にへ！ックして居のが世が世おれいと云ふ譯だが……阿母樣はまだ法藏寺樣へ御參りに人しッたので……ですがネー貴女此家に斯う遺ッて腰掛で居るい富五郎心得て居り升故郷は忘じ難し江戸は懷しう御坐いませう 隅「アイヨ懷しいい當然たワネ

第六十一齣

富「ド……何うも有難い夫さへ聞バ私ハ安心致すが誰でも然で私も早く江戸へ行度がマア お住さん私が少し放蕩をして出まして親類も有けれとも私の放樂を行たから私の身上が定まらんてハ世話は出來ぬと云ふので女房でも持ツて斯う云ふ女と夫婦になつたと身の上が定まれバ御家人の株位ハ買ツて呉れる親類も有が詰こん女を連れて行てハ親類てハ得心しませんか是ハ斯う〳〵云ふ武士の娘・斯う云ふ身柄 今は落零て斯う・心底も是と云ふので私か貧女の樣なる方と一緒に行て何すれバ親類とも得心致ス升お前さんの御心底から縹緻ハ好し斯う云ふ人を見立て來る樣に成ル富五郎も心底ハ定まツた然うなれバ力に成て遣らうと云ふのて名主株位ハ買て呉れ升 構ハずズーと 住「何處へ 富「何處て・・・ダが貴女ア腰掛で居る故郷ハ何う云ても懷うしう御坐いませう 隅「何だか分りません一ツ言を言て故郷の懷ゝしい事ハ知れて居り升 富「マア・・・宜しい夫を聞ば宜ス い・・・・・・・一寸〳〵 住「何だヨ 富「イヽジヤア有ませんの二人でズーと 住「否ないヨ其樣な事をして 富「ソレ然う云ふふ方直から二人で夫婦養子に何樣な處へでも可成高の有る處へ行け升お住さん・と何と心得違ひをしたか富五郎無闇にお住の手を採て髮だらけの顔を押付る處へ母が歸ツて來て此体を見て驚きましたから傍にある麗朶を取て突然ボンと撲た 富「是ハ痛い 母「呆れかへッた奴だ 隅「能くふ歸りで御坐いまして 母「今歸ツて來たゝが彼野郎巫山戯廻ヨやアがッて富五郎茲へ出ろ 富「ヘエ是ハ恐入りました何うも些ともお歸りを知らんで前後忘却致し何うも何とも誠ヨ何うモ何で御打擲ですか薩張分りません 母「今見てエまば何ざお住ヨアノ擧動ハ何だエー否がる者を無理ふ抱り付て髮ざらけの面を擦ヨ付てお住を何うし樣と云ふざお住は何ざへ惣二郎の女房と云ふ事を知らぞヨ居るか汝知て居るか返答ふで 富「何も私前後忘却致し醉て居りましてハッと云ふとお住さんで恐入りました・・・・・・無暗ヨ御打擲で血が出ます 母「頭ア打碎いても搆ハねへだ彼恩を忘れたか此夏の取付に瓜畑へ這入て瓜イ盜んで生埋ヨされる處を家の惣二郎が情け深へから助けて行處もねへ者ヨ羽織イ着せたり袴ア穿して脇へ出ても富さん〳〵と云もれるハ誰がお蔭か皆惣二郎が情け深へからだ夫を惣二郎の女房ヨ對して調戯て縋付いてマア何とも呆れて物ウ云ハれねへ義理も恩も知らねへ幾許醉ばらッたッて親の腹へ乘る者ア無ハ呆れた酒ハ飲なヨ好くねへ酒癖だから廢せと云ふヨ聽かねへで醉ぱらッては歸ッて來やアがつて只た今逐出すから出ろエ・・・可畏へお前の樣な者ア間違を出かし升斯んな奴は只た今出て行け 富「御腹立樣でハ何ぞそがお住樣ヨ只今の樣な事をしたハ富五郎本心でしたと思召しての御立腹なれば御尤もで御坐い升 母「尤もと思ふなら出て行け 富「私ハ大變醉ては居り升が富五郎も武士ぞゲス御當家の旦那樣ヨ助けられヨ事ハ忘却致しませんアヽ有難い事でアヽ寶卷ヨして 二百一 刑へ投込まれる處を助けられ斯の如く面倒を見て下すつて江戸へ歸る時ハ是〳〵すると被仰

つて實に有難い事で江戸へ行ても御當家の御恩報じ御家の爲になる樣心得て居り升 母「然う心得て居るなれば何故お住よ彼云ふ擧動をする 富「其處を申し升其處が旦那樣の御爲を思ふ處旦那樣ハ世間見やその方江戸へも餘り入らしつた事もない殊よハ老母樣は其通り田舍氣質の結搆な方惣吉樣ハ子供衆で仔細あいがお住樣も結搆お方で御坐い升が前ゝ承たよれれも水街道の麹屋で客の相手に出て方經あつて御當家へ被爲入たがお住樣の前で申して濟ませんが若しお住樣が不實意な浮氣心でも有てハ惣二郎樣の御爲よも成ぬと思つて如何ふ云ふ御心底か一寸只今氣を引た處何うもお住樣の御心底是よハ實に恐入りました 富五郎安心しまーとが處を何うも薪で以つてポンと頭を何うも情けない思召しと思ふ 母「彼云ふ遁辭を吐きやアがる氣ィ引て見た抔と猶更置事て出來ねへから出て行け 住「阿母樣お腹立で御坐いませう、御氣性さから……富さんお前は酒が惡いヨお酒さへ愼しめば宜しい旦那樣の御耳よ入れない樣よするから 富「エーもう飲ませんとも 母「マアお前彼方へ引込て私が勘辨出來ぬ本當なればお住が先へ立て退出すと云ふが當然だが斯う云ふ柔和氣な氣性だから勘辨と云ふお住の心根エ聞けば一度ハ許そゞ今度彼樣な擧動エそれば直ぐ退出すから然う思へ 富「恐入りました、と是から弘鼠〳〵部屋へ這入ると見ると頭よ血が染みました 富「お住は萬更でもねへ了簡を有のよアゝ太へ婆アだ、ナニ自分が太い癖よ何卒してお住を手よ入れ樣と思ふうち風と思ひ出して胸へ浮んだのは噂よ聞べ去年の秋大生郷の天

神前で安田一角と花車重吉の喧嘩の起因とれ住から宜ち彼奴を力よ頼んでと是れからべうの怪しい羽織を着てチョコ〳〵横曾根村へ來て安田一角の玄關へ掛り 富「お頼み申す〳〵

第六十二席

門弟「ドゥーレ……何方ら 富「手前ち隣村に居る山倉富五郎と申そ浪士で先生御在宅なれば面會致し度態ゝ參ましました……是ハ此方樣へほんの御土產で 門「少ゝお扣へなさい……先生 安田「ハイ 門「近村の山倉富五郎と申す者が面會致ち度と是ハ土產で 安「山倉とハ知らぬが此方へ御通し申せ…… 門「此方へお通り被成て…… 富「成程是は結搆なお住居で成程是ハ御導場でゲスナ宜うがすナ御導場の向ふが恰と是から畑の見える處が是ハ何うもまた違ひ升すナ 安「サア〳〵是へ何卒是ハ〳〵 富「エー山倉富五郎と申す跡忽者此後とも御別懇よ 安「拙者が安田一角と申す至つて不骨者此後ともエー只今は御土產を有難う 富「イヽエ詰らん物でほんの寸志で御笑納下さい大きよ冷氣よ成ましたが日中ハ餘程お暑い樣で 安「左樣で今日ハまた些とお暑い樣で能く被爲出で……エー何か御用を 富「ハイ少ゝ內ゝ申し上度事が有て……彼人ハ御門弟を 安「ハイ 富「少々お遠ざけを願ひ升 安「ハイ……應治 御內談が有て他聞を憚かると仰しやる事だから彼方へ行つて居エー用が有ば呼から 慶治「ヘエ左樣で 富「エ……もうお搆ひなく先生お幾歳でげス 安「手前ですかもう往けませ

ん何で、四十一歳で富へエお若うゲスヲ御氣力が御惜ざらら御若く見る頭髪の光澤も好し立派お惜い先生だ當地ゑ置くのは惜い江戸へ入らつしやれば諸侯方が抱へます立派お身の上 安「何の御用か承たまはり度い 富「手前打明けたお話しを致しまそが只今でハ羽生村の名主惣二郎方の危介ゑ成て居る者ぞ御坐るが惣次郎の只今女房と云ふ譯ぞないヤア安同様のお住と申す婦人彼ハお案内の水街道の麹屋ゑ奉公致た酌取女彼の住なるものゑ先生思召か有たのでゲスナ前ゑ惚れく彼成入さのてゲスナ貴方 安「コレハ初めてお出で他人の女房ゑ惚れて居る抔とイヤ挨拶の仕様がない麹屋ゑ居た時分ゑハ最負ゑした女だから纏頭も遣ッて隨分引張て見た事も有のサ 富「恐入ッたヲ夫が然う云へぬもので恐入ました其處ゞ大先生でエーゑらひ 安「何しゑお出被成た安田一角を喇叭被成にお出被成さか初めてお出て左様なる事を仰しやる事ゞ有升か 富「御立腹では何も、中く左様な譯ぞハない手前劍道の師とお頼み申し師弟の契約を結度心得で罷ヲ出したので實ハ彼れお住と申そハ同家ゑ居るから段くソレヤア江戸子同士で打明けた話しをするとお前さん此處ゑ長く居る氣ハ有ない此處ハ腰掛だらう故郷忘じ難からう、私と一緒ゑ江戸へと云ふと妾も實ハ江戸へ行度い殊ゑ江戸ゑハ可成の親類もあり假令名主でも百姓の家へ縁付たと云はれては親類の聞にも惡い然うなまむと云つて御新造と云ふ譯でハなしへエ〳〵云つて姑の機嫌も取らあければならんから實ハ江戸へ行度と云ふから然うなれば何故一角先生の處へ行かぬ先方ハ

何でも大先生弟子衆も出這人名主杯ハ皆弟子だから彼處へ行つて御新造ゑなれば江戸へ行つても今井田流の大先生彼處の御新造ゑなれむ結構だゑ何故行ぬと云ふと夫ゑは種々義理も有て親父れ借金も名主惣次郎が金を出して呉さ恩も有から先生の處へ行かれもしないと云ふから夫ゑら先生が斯うと云つたらお前行氣が有かと云つたら妾は行度が先生ゑは種〻綾が有から行れないと云ふから然うなれば私ゞ行て話し私も江戸へ歸る土産ゑ劍道を覺えて歸り度い良い師匠を頼まうと思つて居た處だと云ふのて然うなまばと頼まれて參つたのて先生彼を御新造ゑなさハ何うでゲス 安「お歸んあさハ何だお前ハコレ汝ハ何だ惣次郎方の危介ゑ成て居る者なれば惣次郎ゞ何かして安田を馬鹿にして遣れと云ふので來さお初めて逢て他人の女房を貰へ抔とハイ願ひ升と誰か云ふ殊ゑ惣次郎ゑハ去年の秋聊かの間違ひで互ひゑ遺恨もあヲ私も恨みに思つて居る其敵同士の處へ來て女房に世話をーませう抔とハイ願ひ升と誰が云ふ白痴め歸れ〳〵 富「成程是て至極御尤も何うも御氣分ゑ障るべき事を申ーさがヤア 安「騷々敷歸れつたら歸れ 富「ヤア〳〵重々御尤も是ゑハ一つの譯がある宜うがすか手前が打明た話しを致ーませう手前も武士で二言はなハ手前は本所北割下水で千百五十石を取つさ座光寺源三郎の用人山倉富右衛門の悴富五郎、主人ハ女太夫を奥方ゑした馬鹿ですらら家て改易仕方なし手前ハ常陸ゑ知己が有から參さゞ風としさ縁で惣次郎方の危介、處が惣次郎人遣ひを知らす名主と云ふを權ゑかッさ酷い取扱かひをすゑて如

何よも心外で手前ハ浪人でも土民抔よへエッダする事ハない殘念よ心得て居るが打明話を致そが江戸よ親類ども、有身の上江戸へ歸るよも何か土産ダなろう實は今迄蕩樂をして親類でも採用ませんから貴方の内弟子よ成てお側て劍道を教へて頂いて免許目錄を貰ッて歸ると親類でも今迄放蕩をしても田舍へ行ッて是々云ふ先生の弟子よ成てと書付を持ッて歸れハ夫が價値よ成て何處へでも養子よ行かれる處が御門人にと云つても月々の物を差上る事も出來ません身の上で御坐い升が夫を承知で貴方の弟子に取て下さるなれハ私ハ爺子人れ目錄替りよ御意よ適さお住を御新造よ長熨斗を付て持ッて來ませう

第六十三席

安田「是ハ面白いら惣次郎と云ふ主のある者を如何して持つて來られ升富」惣次郎ダ有つても往けませんが惣次郎を一ト刀よ斬ッて下さい 安「默れ馬鹿を云ふな、歸れ〳〵汝ハ惣次郎と同意して手前の氣を引きよ來たナ……ウーン歸れ〳〵 富「是れハ成程、至極御尤もですがマア 安「騷々敷ハ行け〳〵 富「ヂャア有体よ申ス升、正直なお話しを致し升が貴方の遺恨ある角力取の花車重吉が來て法恩寺村の場所が始まるので去年の禮と云ふれで明晩よ成り升と惣次郎が金を三十両遣ると、宜うがやか用を仕舞のハ日の暮方まで掛りませう帳合抔を致し升からナ、用が終ッて飲を食ても何うしても夜の六ッ過に成升其處で三拾兩持ッて出掛る富五郎がお供でゲス、ズーと河原へ出て夫から弘行寺の松ヶ林の處へ出て黑門

の處までは長い道で御坐い升ろら其處へ出て來ましたら貴方も顏を包んで芒蠟の影よ隱れて居て手前が合圖よ提灯を消と突端に貴方が出てズプリと遣り惣次郎を殺すと金ダ三拾兩有ろら持ッて宅へ歸ア搆ハず寢て入つしやい……マアサお聞なさい手前ハ面部へ疵を付て歸つて、今狼藉者が十四五人出て旦那も切合つて私も切合つれが多勢よ無勢敵ぬ早く百姓をと云ふので大勢來て見ると貴方も宅へ歸つて寢て居る時分ざから分らぬテー、氣の毒なと云つて死骸を引取り野邊送アをして仕舞つてから、宜うがすが其後ハ旦那樣ダ入つしやアませんぞハ私が居ても濟ません殊ふハ彼ア云ふ處へお供をして旦那が彼樣なれば猶更何も思ひ出して泣くばかりで御坐い升から江戸表へと云ふ惣次郎が死ねばお住さんも旦那樣が居なければ此家ふ居ても餘計者ざろら妾も江戸へ歸ると云ふ江戸へ行なれハ一緒よと云ふのでお住を連れて來てズーと貴方の處へ長熨斗を付で差上る工風富五郎の才覺惚れた女を御新造よーて金を三拾兩只取れると云ふ、是迄種を明して是れでも疑念よ思召すかエー何うでゲス 安「成程是ハ面白い夫に相違ないか 富」相違有もないも身上を明して斯くお話しを致て是を何も疑念てエ事はない、宜しい手前も武士で金打致し升……今日ト往けません木刀を帶して來さから今日ト金打は出來ませんが外よ何樣なる證據でも致し升 安」ヂャア明晩酉刻と云ふのか 富「手前供を致ー升彼處ハ日中も人ト通りませんから酉刻を打て參りフッと提灯を消すのが合圖 安「宜しい相違なければ、と約束して歸りましさ、安田

一角ハ馬鹿でもない奴なれども御住よ心底惚れて居るから全たく然う云ふ了簡で連れて來るのではないかと思ひ是から胸ふ包んで翌日仕度をして早くから家を出て方を廻つて夜よ入つて弘行寺の裏手林芒き疊へ蹲居て待つて居る事とハ知りません此方ハ富五郎が住を手に入るよ惣次郎が邪魔に成升が惣次郎ハ劍術も心得て居り升から自分ふ殺す事が出來ぬから一角を欺して惣次郎を殺させて後お住を連出して女房よ仕様と云ふ惡計で御坐い升實よ惡い奴も有もので御坐い升富五郎ハ書物が分りませんから眼を通してと惣次郎へ帳面を見せ故意と手間取ゝら遲くなり升是から夜食を喫て支度をして提灯を照て出かけ様とそる何か虫が知らせるかして母親もお住も遣ゝと度なハ 住「何だか遲いから、明日先方から參りませから今日もお止め被成お 惣「ナアニ直く歸るゝら 住「然うで御坐い升かゝ富五郎お前一緒よ何うか氣を付てお呉よ 富「エヘ大丈夫何樣お事が有ても旦那樣よお怪我をさせる樣な事と御坐いません手前も劍道を心得て居り升ゝら、と空を遣つて惣次郎の供をして出掛ましよゝ笠阿彌陀を横よ見て林の處へ出て參り升と左右と芒疊で見ませんが左りの方の土手向ふと絹川の流れドウ〳〵とそるボツリ〳〵と雨が顔よ掛ッて來る 惣「富五郎降て來ゝ樣だ 富「大した事も有ません……恐入ましたが一寸小便を致し升から 惣「小便をそるおれも提灯ハ持て居て遣る……コレ〳〵何處へ行く堤灯を持て行ッてハ困る、と言ふうち富五郎とフット提灯を吹消しました 惣「提灯が消えてと眞暗で往かぬノウ 富「今小便致し升から。と云ふ折ゝら安田一角ハ大松の影に忍んで居りゝ玄だゞ提灯が消るを合圖にスックと立て透し見るに眞暗では御坐い升が晃つく長いのを引扱て斯う透して居り升 惣富やオイ富〳〵……何んだか狐鼠〳〵して後ろに居るのは富や〳〵。と云ふ聲を當にして安田一角が振冝る折から向ふの方から來る者が有升が大きな傘を引かついて下駄も途中で借たと見て降中を此處に來合ましたハ花車重吉と云ふ角力取で御坐り升、是からハ芝居なれと無言場で御坐い升

第六十四席

引き續き御聞に入れ升るハ羽生村の名主惣次郎を山倉富五郎が手引を玄て安田一角と申す者に殺させ升是は富五郎が惣次郎の女房お隅に心底惚れて居りましても惣次郎が有ので邪魔に成升から寧そ殺害て自分の手に入をやうと云ふ惡心で御坐り升か田舍よ在て名主を勤める位ゐでハから惣次郎も劍術の免許位ゐ取て居り升富五郎ハ放蕩無頼で屋敷を出る位ゐで少ゝも劍術を知りませんゝら目分で殺す事ハ出來ません、茲で下手でも安田一角と云ふ者ハ劍術の先生で弟子も持て居るから丁度お住に惚れて居るのを幸ひ一角を教唆ッて惣次郎を殺し惣次郎の沒後にお住を無理に口說て江戸へ伴れて行て女房にしやうと云ふ計略を考がへ塩搆で嚇して上手に見ゝるが田舍廻りの劍術使ひだから安田一角が惣次郎より腕が鈍くて若し惣次郎が一角を殺す樣な事になれば此計略は空しく成と云ふので惣次郎が常よ

帶ゐて出ます脇差の鞘を拂ッて其中へ松脂を詰めて止めを致して置きました實に悪い奴で御坐い升惣次郎ハ神ならぬ身の左樣な計略を存じませんから富五郎を伴れて彼の脇差を帶て家を出て丁度弘行寺の裏林へ掛り升と富五郎が狐鼠〳〵飼ッて行く樣ですから何故かと思ッて後を振り返へる、どたんと出たのは安田一角面部を深く包み端折を高く取ッて重ね厚の新刀を引き抜き力に任せてプスーリ一刀おびせ掛ましだから惣次郎もヨラリと身を轉ぶて脇差の柄ゟ手を掛け抜うとするとと松脂をつぎ込んでから一日たつて居るので粘バッて抜けない、脇差の抜けませんのゟいら立づ處を又た一刀バッサリと骨も切るを位に切り込まれ切られて向ふへ倒れる處を又一刃あぴせだから惣次郎は殘念と心得て脇差の鞘ごと投げ付けまし之一角がッと身を轉すと肩の處をすれと薄の根方へッポンと刀が突立ッたから一角ハ鮮血を拭て鞘ゟ收め懷中へ手を入れて三十兩の金を胴巻くるを盗すんで逃げ樣とすると向ふの方から蛇の目の傘を指〻高足駄を穿て花車重吉と云ふ角力が參りました時に丶一筋道で何處へも避ることが出來ません一角ハ狼狽て跡へ歸らうとすれは村が近い致方があいのらサッサッと側の薄壁の蔭の處へ身を潜め小さくなッて隱をて居ります、此方は富五郎ハバッサリ切ッた音を聞いて直に家へ駈けて行く其道すがら茨か何かで故意と駈蚓膨れの傷を拵へまゝてせッ〳〵と息を切ッて家へ歸り冨「只今歸へりました」と云處が富五郎ばかり歸ッたから喫驚ゑて 住「オヤ富さん御歸りかゝ如何かおしかへ 富「へゝもう騒動が出ませたアノ弘行寺ゟ裏林へ掛ッたら狼藉者が十四五人でゝゝ出まして二人とも懷中の金を出せ身ぐるみ脱いで置いて行けとヤーまえたから驚いて旦那に怪我をさせまい思ひまして松の木を木楯ゟ取りまして不埒至極な奴ゞ旦那を何と心得る羽生村の名主樣でゐるぞ粗匆をすると許さんぞと云ふと大勢で得物〳〵を持て切ッて掛るから手前も大勢ゞ相手ゟ切り結び旦那も刀を拔て切り結びまして二人で大勢を相手にチョン〳〵切結んで居りましたが何分多勢に無勢旦那ゟ怪我がなッてゐならぬと思ッてやッと一方を切り脱けて參りました此の通り顔を傷だらけにして……早く御若衆早く〳〵。と誠しやのにセエ〳〵息を切ッて云ひますのらお隅い驚いて夫れ早く〳〵と云ので村の百姓を賴んで手分をして ドロ〳〵押して參りましたがモウ間に合い致しません、斬ッた奴ハ疾に家へ歸ッて寐て居る時分、百姓衆が大勢行ッて見ると情け無い哉惣二郎ハ血ゟ染ッて倒をて居りますから百姓衆も氣の毒に思ひ死骸を戸板に載せて引き取り此事を代官へ訴へ先づ檢視も濟み致方なゝ野邊送りも内葬の沙汰で法藏寺へ葬りました是程の騒ぎで村の者い出掛て追剝の行衛を詮議致ゐ又四方八方八州の手が回ッたが殺した一角ハ横曾根村ゟ枕を高く寢て居升るので客易に知ません、惣次郎と兄弟分ゟ成た花車重吉と云角力ハ法恩寺村ゟ居て場所を開かうゝ云ふ處ゝ此騒ぎが有からトンと悔にも參りません、のら母も愚痴が出て 母「アゝ家の眞摯が無なれば樂をしたもんか惜さないもの、ゝ愚痴タラ〳〵そうこうすると九月八日ハ三七

日て御坐り升、花車童吉が細長い風呂敷に包だ物を提げて土間の處から這入て參りまして
花「ハイ御免なせい 多「イヤ御出なさへまし 花「誠に大分御無沙汰致しました。多「家でも
マア如何したかッてエねエ一寸知らせるだッたが家がマア忙わしくッて手が廻らないだて
マア一人で歩いてることも出來なへから誠に無沙汰ア致しましたが旦那樣ア殺されたとは貴
方知ッて居るだチ 花「誠にマア何んとも申さう樣は御坐いません知ッては居りまーたが旦
那と私とは別懇の間柄だからが私行て顔を見れば御母樣やお住さんに尙更歎きを增させる
樣な者だから夫故マア知つて居ながら遲くなりました多助さんトンダ事に成りましたチ
多「トンダにも何にも魂消て仕舞てチお神さんはハア年イ取つてるだから愚痴イ云ふだ花
車は内に奉公をーた者で殊には角力になる時前の旦那樣の御丹精もあるとチへ惣次郎とは
兄弟ぢやア無へかソレデ此騷ぎが法恩寺村まで知んチへ譯ア無へ知つて來ないは不實だが
ソレトモ知んなへか江戸へても歸つた事かとお神さんあんたの事をば云つて只だ騷いて居
るだ、どうか行て心が落ち付く樣に氣やすめを云つて下さい泣てばい居るだからチエ 花「
ハイ來たいとは思ひながら少し譯があつて遲く參りまーたマア御免なさへ 多「サア此方へ
御這入り。と云ふので風呂敷包を提ゲたなり奥へ參ります、來てみとる香花は始終絶えま
せぬから其處らが線香臭う御坐います 多「お神さん法恩寺村の關取が參りましだヨ 母「ヤ
ア花車が來たかい……サア此方へ這入て御呉んなせへ 花「ハイお神さん何とも此度は申そ

う樣も御座いません嘸ア御愁傷樣で御坐いませう

第六十五席

母「はい只だ何うもヲ魂消てばい居まそ御前も知て居る通り少さへ時分から親孝行で父親樣アとゝ違ッて道樂もぷたなへこんな堅い人はなへ小前の者にも情を掛けて心切ふするアゝ云ふ人が斯んなハア殺され樣をすると云ふゝ神も佛もないかと村の者が泣いて騒ぐ妾もはア此年に成ッて跡目相續をする大事な悴にハア死別れソレモ疊の上で長煩らひして看病をした上の臨終で無いだから何たる因果かと思エまして子愚痴イ出て泣いてばい居ます夫れにお住ゝ自分の部屋にばい這入ッて泣いて居るから此間もお寺へ行たら法藏寺の和尚樣アゝ因果經と云れ經を讀で聽せて因果と云ふ者アあるだから諦らめねばなんねへテ異見を云はれましたがはアどうも諦らめが付かないで只ドウモ魂消て仕舞ッて何うかマア斯う云ふ事なら父親ッあんの死だ時一緒に死なれりやア死にたかつだと思エます位で 花「ハイ私もヲエ御寺詣りにゝ度〻參ります夫を一人で實ゝ人に知れない樣に參りました是にゝ深い譯のあるとで私が不實で來ないと思ッて定めて腹を立てゝ出なさると知て居なそが少し來てゝ都合の悪い事があッて來ませぬ、御前さん私は今まて泣くことはありません又大きな身体をして泣くのゝ見ッともねへかうめろ〳〵 泣きはしませんけれども外に身寄兄弟もなし重吉手前とゝ兄弟分となッて何んでもお互ひに胸にある事を打ち明けて話を仕樣、力になり合へうと云ッて御呉んなさいました其の御前さん力は思ふ方は別れて實は今度ばかりは力が落ちました、墓場へ行て花を上げて水を手向けるとさよも、どうも愚痴の樣さけをども諦めが付かないでッイハア泣きまそマア何んとも云ひ樣がありません嘸ア御前さんはゝ一と通りでゝあるまい御察し申しそ居りますお住さんも嘸御愁傷でえよう 母「ハイ妾の泣のゝ當り前のとだがアノお住ゝ人にも逢なへで泣くばい居るからサウ泣いてばい居ると身体に障るうら些と氣イ紛らすがえエ幾ら泣いても蘇生譯でおへと云ふけれども只彼處へ蹲んで線香を上げ水を上げちやア泣いてるだ誠にハア困ります 花「ハイお隅さんを一寸茲へ御呼びなそつそ下さい 母「お住や一寸り此處へ〳〵 母「サア此處へ來や待つてるざ 住「關取御人來なさい 花「ハイお住さんマア何んとも申さう樣ゝ有ませんとんだとよなりました嘸ア御力落しで御座いましよう 住「ハイもうヲ毎日御母さんと貴方の噂さむかり致ーまして如何ーてお入來なさいませんか何よか御心持ちでも悪いとがありはしまいかヨモヤ知れない事も噂を致して居りましたが實ふ夢の樣な心持で御坐いまえてオエ夫ゝ貴方とは別段に中ゞ好くッてヲエ旦那が毎も疳癪を起ーてお在なさる時にも關取が御入來なさいますと直に御機嫌が直つて笑ひ顔をなさる斯うやつて關取が來ても旦那樣が御達者で居らしつたら嘸御喜びだと存じまして私は旦邸の笑顔ゞ目に付きます 母「コレ泣かないが宜エさう泣かば病に

聞いるあふと云ふのに聞かナへて彼の樹に泣いてゐ居るから汝が泣くから已がも共に悲
しくなる泣いたつて蘇生べる譯けなへかラ諦めろと云ふだネエ關取 花「へエ御愁傷の處ハ
御尤で御坐いますがお隅さん旦那をハ何者が殺したと云ふ處の手掛は些とハ御坐いませか
隅「モウ關取の處へ早く行き度いと云ふのが御用が有つて二日許り遲くなりましたのら是
から富五郎を供に伴れて關取に御目に掛りに參ると仰しやるから今日ハ大分遲いから明日
に成さつたら好からうと云ても是非今日ハと云つて如何云ふとか大層急いて御出になりま
した處が丁度弘行寺の裏林へ通り掛りますと十四五人の狼藉者が出まして得物〳〵を以て
切り付けましたのら旦那ハ御手利で御坐いますから直ぐ脇差を拔いて何ふと富五郎も元ハ
武士で劍術も存じて居りますから二人で十四五人を相手に切り結んだけれども幾ら旦那が
御手練でも向ふは大勢で御坐いますから仕方なく富五郎が旦那に御怪我をさしてハならぬ
と一ツ切り脫け駈け付けて來ました直ぐと村の若い衆も大勢參りましたけれども其の中
斐もなくモウ間に合ひませんで誠ニ情けないことで御坐います 花「チャ・ア富五郎さんが一緒に
ゝ附て行つて弘行寺の裏林へ掛つた處が十四五人狼藉者が出て取卷いたから旦那も切結び
富五郎も切り合たと云ふ處を誰も見た者ハないので富五郎が歸つて其事を話したのでずネ
隅「左樣で御坐いまず 花「ウン・富五郎と云ふ人ハ内に居りますの 隅「御母さん今日ハ富
五郎ハ何處かへ使ひに參りましたの 母「今何まで使ひに遣つたハ・何處まで行たかのう又
水街道の方へ廻つたか知んあヘジキ憤曾根まで遣たが子 花「御新造さん留守か危ソンナヲ
話を致すがアイ富五郎と云ふ奴いべチャ苦茶世辭を云ふ口前の好い人だネ實ハ私はネ人
には云ハないが旦那の殺された許りの處へ通り掛つた處が丁度廿五日で眞暗らだ私がズン
〳〵行くと向ふから頭巾を被ぶつた奴が來やアがる樣子だのらパテ斯んお林ハ胡亂な奴が
居る、ことに依ツたら盜賊かと思ふたから油斷せずよ嚇して見ると其奴が脇道へ曲ツて向
ふへ狐鼠〳〵這入て行くから何でも之れハ怪〳〵いと思ふて急いで來ると私の下駄で蹴付け
たのハ脇差ゞやハテ是ハ腰物ゞやが如何ーて此處に在るかと思ふて見ると向ふからワイ
〳〵と御百姓が來まして高聲上げてアハ〳〵情けないモウ少し早くのつたら斯んお事にハならぬ
無慘なことをした情けないことをしたと云からコイツ仕舞たソンナラ頭巾を被ツた奴が旦那
を殺したと忘ツて其事を皆の中で話を仕樣かと思ツたが旦那と私と深い中のことハ知ツて居
るし若し角觝が加勢をすると思ツて遠く逃げて仕舞ハれたら手掛りハないから是ハ知らぬ
積りで家へ歸ツたが宜いと思ふて其脇差を提げて歸つてからを何好へも出ず外の者にも默
ツてろ知らぬ積りで處のと云付けて來ずに居ましたが今日ハ斯うして脇差を持て來なした
女、あれやマア、どうも不思議おこんだ殺された處へ通り掛つて脇差イ拾ッだッて其切ッ
た奴ハどんお奴だかネ 花「お住さんそれハネ此脇差ハ如何ーたのか知れないが一寸り拔け
ない私が力でも一寸り拔けない何でも鞘が何か附てると見えて粘ば〳〵してるのらひつ

ついで抜ないが之ハ旦那の不斷差す腰物で私を能く知ッて居ります　母「これやマアどうも御前が知ッてるのが手に這入のは不思議だネエ

第六十六席

隅「お母様モウ少ス闘取か早のッたら助かりましたものを　花車「此通り抜ない、、抜けないから腰物を投り付けたのを盗賊が置いて行ッたか其處は分らんか今富五郎が私も切り合ひ旦那も切合ッたか相手が大勢で適ハんと云ふのて駈付て來て知らしたと云ふのは夫れは何ふも私と胡亂ナよと思ふ、縱令相手が多かラうが少かラうが旦那様が危ないのを一人措いて逃げて來ると云ふ譯はあい　チエ然うヂャ無か大切な主人と思へばドコ迄も助けるにハ側に居なけれもなラぬソレニ措て來るとハ怖いのラ逃げたとしか思へない旦那が腰物を拔いて切り合たと云ふが拔けやしない……チエ何うしても拔ケない刀を拔て切合ッたと云ふ道理が無いカラ何うも富五郎と云ふ奴が怪しい……さと云ふ譯ハお隅さん去年の秋大生郷の天神前で喧嘩を仕掛けた男がお隅さんが麹屋ふ居た時公お前さんに惚れて居て串戯を云つた奴がある處がお隅さんハ堅いカラ云ふ事を聞かんで跳付けたのを遺恨ふ思ふて居ると云ふことを知て居ることに依つたラ安田一角が旦那を切て逃げやアしナいのと考へた……就てハ山倉富五郎と云ふ野郎ハ口前は好い男だが心に情のナいし慾强つた男だカラ事ふ依つたラ一角に御出で〳〵をされて鼻藥を貰ふて一角の方に付いて彼男が手引をして殺させやアせんカと思ふ、ソレ此通り拔けぬのを拔いて切合つたと云ふのガ第一訝しいぢやナいカ

母「おれやマア其處等にハ氣ガ付のんで只マア魂消てばい居ました、ほんにそうカもしんネナ。其の頭巾冠つたのはドンナ格好だつきやア花「其れは暗だカラ確リ分らんガ一角ぢや無いカと私の心に浮んだ……こうしてお呉んナさい私ハ默つて歸るガ富五郎が歸ッたら今日花車が悔みに來て種こ取込んた事ゲあつて遲くなッた、就てハ他人へ二百兩許り貸したがとう掛合ッても取れないから何うかーて取らうと中へ人を入をたが何分取れないが若し富五郎さんが間へ這入ッたら向ふの奴も可畏いから返すだらう、若し御前の腕がら二百兩取れたら半分ハ禮に遣るが何うか催促の掛合ヨ行ッて呉れまいゥと花車が賴んだが行ッて遣らんかと云へは慾張ッて居るから屹度遺ッて來るに違ひない法思寺村の私の處へ來たら富五郎さん〳〵こ云て富五郎を側に寄せ腕を押へてサア白狀しろ一角に賴まれて鼻藥を貰つて惣次郎さんを殺したと云へ、何だ〳〵云ハなけれア背骨を毆ち飯を吐かせるぞ白狀すれハ性命ハ助けて遣ると云ふたら痛いから白狀するよ違ひない實ハ是れ〳〵〳〵〳〵でなると饒舌たら旨もんだ、然したら富五郎ハクリ〳〵坊主にーて助けても好し物置へ投り込んでも好いが彌こ一角と決ッたらお隅さんハ蚊細女お毋さんハ年を取つて居り惣吉さんはまだ子供だから私が先きへ行きます、一角の處へ行つてサテ先生大生郷の天神前でトング不調法を致しまシたがドウカ堪忍〳〵てお呉んなさいト只管謝る、其うすれハ斬ること

は出て來ぬのらウたカリ近付る近付たら兩方の腕を押へて動かさぬサア手前か物次郎を殺ス
たとい富五郎か白狀した譬を取るから覺悟をしろと腕を押へた處へお前さんが來て小刀
十 でも錐でも構はぬからツプ〳〵突ッついて一角を殺すが好い如何ぢや 隅「本統に有難いと
と無旦那樣が草葉の蔭で御喜びで御坐いませう、關取私い殺されても好いから旦那樣の譬
を取つて…… 母「何分にも宜しく願ェます 花「餘り譬き〳〵と云はないか好い私い先さへ
歸りますから、と腰物を元の如く包んで歸りました 母「富や大層歸りが遲かつたネ 富「ナニ歸り掛けに法藏寺樣
五郎富「ヘエ只今歸りました 母「富や大層歸りが遲かつたネ 富「ナニ歸り掛けに法藏寺樣
へ回いりまして幸ひ能い花がありまーたから御花を手向けましたか御墓に向ひまゑてナア
實に殘念で御坐いまして何だか此間まで富〳〵と御仰つた御方かマア何うも石ね下へお這
入なすつたかと存じましたら胸が痛くありまして嫌な心持で又家へ歸ッて貴方方のお顏を
見ると胸が製ける樣な心持、佛間に向ッて御回向致ゑますると落涙するそのうちで誠にいや
何んとも申さう樣はありません 母「マア能く心に掛けて汝が墓參りするッて、嘸ぞ草葉の
陰で喜んで居るべエ 富「何も別に御恩返ゑの仕方がありませんからお墓參りでもするより
外仕方がありません佛樣には御念佛や花を手向ける位で御恩返しにい成ません夫より外
よ仕方が有ません〳〵ェ 隅「あの富さん先刻花車關が悔みに參まゑたヨ 富「オヤ〳〵〳〵左
樣で御坐りましたか……〳〵ェ成程如何あそッたか御存じ無いのかと思ひましたか 母「ナニ

知ッてたてや、知ッてたけれども早く來て顏を見せたら深へ馴染の中に思エ出して歡さか
增して母樣が泣く〳〵ェ夫れに種と用が有ッて來れへて居たが惡く思ッて呉れるあッて大い
身体アして泣ただ、富「さうでげせう兄弟の義を約束ーた方で御坐いますから嘸御愁傷で
げせう御察し申します 母「就てネエあの關取が他へ金エ二百兩貸した處が向ふの男がずり
い男で返さなへで誠に困るから何うこの富さんを頼んで掛合て貰ッてへ富さんの口前で二百
兩取れたら百兩禮をするてエ云ふた、何うだい歸ッた計りて草臥て居るだらうが行ッて遣
ッて呉んろヨ 富「ヘエ成程關取が用立つた處が向ふの物が返さんのてずかナニ直ぐ取て上
げませう雜作もありません……百兩……百兩……なアに金なんぞ御禮に戴のぬても御懇意
の間でげすから直ぐに行て參ります と慶せば好いのよ黑い羽織を着て一本帶てヒョコ〳〵
遣つて來まゑたのが天命 富「ハイ御免あさい關取の御宅へ此方へげすか賴ます〳〵 弟子「
オーイ此、だい花「コレ〳〵一寸此處へ來い富五郎と云ふ人が來たら奥へ通ゑて己が段、
掛合ひになるのたデ切迫詰ッて彼如が逃げ出すかも知れあいから逃けたらは表に二人も待
つて、逃やがつたら生捕つて逃がしていなぬ曲ぞエー初めへ柔和お顏をゝて掛合ふかラ・・
弟子「逃げたら襟首を押へて 花「コー〳〵そんなに大きな聲を……此方へお這入なさいと云

第六十七席

弟子「此方へ御這入ンナせい 富「御免を蒙ります 花「サア富さん此方へ、取次も何も無に

づか〳〵上つていいぢやナいゝサア此方へ來て下さい 富「エー其後ハ存外御無沙汰をエー毎つも御壯健で益〻御出精で蔭ナガラ大悅致ます關取ハ大層評判が好うげすこの場所が始まりまーだら是非一度は見物致さうと心得て居ます處たが御案内の通りサンザンの取り込でつイ一寸の見物も出來ません併し御評判ハ高い者で御坐ります昨年から見ると大変た事で御浦山ゑう實に關取ハ身体も出來て入ッしやるし殊には角力が巧手て愛嬌がありて實に自力のある處の關取だこのら今に日ゝ下開山横綱の許しを取るのハアノ關取だこのりだと云ッて居ます 花「餘許な世辭ハ癪ゑて下せれ私ハ餘計な世辭も大嫌ひだから 富「イヤ世辭ハ申ゑません之れは譬への通り人情て好なるものゑ一べん顔を見た者にハ知らぬ人でも勝たせ度いと思ふのが人間の情ぢげせう況て旦那とハ兄弟分で勘うやつて近〻拜顔を得ますこのら場所中はどうか關取が御勝になる樣にと神信心をして居ますよ 花「ソレは有り難い縱令虛言デも日の下開山横綱と云て貰へバ何とおく心嬉しいやア…御茶を上ろよ…サア此方へ富「關取さぞ御愁傷で 花「ヤア御互ひのとて嘸ぞ御前さんも御力落しで御坐いませう 富「イや此度は實に弱りまして只モウとをも富五郎は兩親に別れた樣な心持ちが致します ナア花「然うで御坐いませう私も實は片腕もがれた樣だと云ひませうか 富「然うてげせう私も實に溺りましたネ 花「付て富さん御前さんが共ゑ行つたのだとネエ 富「左樣 花「何んな男デ御坐いまとへ切つた男ハ 富「夫ハモウ何んとも殘念千萬…弘行寺の裏林へ掛ると面部を包んデ長い物をぶち込んだ男が十四五人デズット取り卷いて旦那が金を三十兩持て居るのを知つて出せ身ぐるみ脫いて置てけと云ふから旦那に怪我をさせまいと思つて、旦那を何と心得る旦那は羽生村の名主樣だぞ若ゑ無禮をすれば引縛つて引から然う心得ろと云ふとナニーとイキナリ竹鎗をもつて突いて來るかゑ私も刀を拔いて竹鎗を切つて落し杉の木を小脇に取ッてチヨン〳〵〳〵〳〵暫く大勢を相手に切合ひましたズルと旦那も默ッて居る氣性でないからスラリ引拔いて一生懸命に大勢を相手にチャンノー切合ましたかゑ刀の尖先きから火が出ました眞に火花を散すとハ此事でせうけれども多勢に無勢と云ふ譬へ の通りで迎も協ハぬのら旦那に怪我が有ッてはならぬと危ふい處を切拔れて駈込んで知らせたからソラ早くと云ので大勢の若い衆がドッと來て見ましさが間に合ひません實に殘念でどうも 花「御前をん供をしたから……無殘念だッたらうチエ 富「實にどうも此上ない殘念で 花「ソコデ何んでをかイ向ふは十四五人で、其内一人か二人捕へると能かッた チ 富「處か向ふが大勢でげすから此方が劍術を知ッて居ても大勢で刃物を持て切付るから敵ひません 花「ヂャア旦那が刀を拔いて切合ッた處を御前さんハ見ただらうチエ 富「ソレア見ましたとも旦那ハれ手利でげすかゑチヨン〳〵〳〵〳〵切合ました 花「夫に相違ないチエ 富「相違も何もありません現在私が見て居ッたから……花「ウン然うかへ富さんモッと側へ御出なさい、今日ハ一杯飲みませう 富「ソレハ誠に有難いとで時に何か御賴みがあると云ふ

ことでげすが早速取立ませう……ナニ雑作もないことで 花「其れに付て種と話しがあるのだ
が」つと側へ 富「ヂヤア御免を蒙って 花「偖て富さん人と長く交際ふにゐ嘘を吐いてゐ往
るのおいねへ 富「ソレハ誠に其通り信が無くていけませぬネエ 花「今お前は云つたのハ皆
嘘と考へて居る・旦那様が脇差 抜いてチヨン〳〵切り合ひお前も切結んだとそんな出鱈
目の事を云はずゐ正直なことを云ッてしまひねへ 富「ナ何んだこれハ恐れ入ッたネどうも怪
しからんことをドウ云ふ譯で・ナ何んで 花「ヤイ夫よりも正直に慾に目が眩んで一角に
頼まれて悪人の惣次郎を私が手引で殺させましたと云ッ仕舞ねへ 富「之は怪からん怪しか
らん事があるものだネ闘取外の事とハ違ひます私は一角と云ふ者ハ存りませぬ知りも云な
い奴ゑ縦令どの様な慾があッても・頼まれて旦那様を殺させたらうと云ふ御疑念ハ何等の
証據を取て左様なことを仰しやると闘取で無けれハ捨置けぬ一言・手前も元ハ武士で御坐る何
様に左様な事を仰せられるか闘取一承はりたいナ 花「嘘つくなイ正直ゑ云て仕舞ひナ
手前が鼻薬を貰ッて一角に頼まれて旦那を引き出したと云て仕舞へバ生命許ハ助けてやる
相手ハ一角だから敵を打たせる積りだが何處迄も隠せバ據ろなくお前の脊骨を殴ぎて飯
を吐かしても云ハせようならん當之れハどうも怪しからん闘取の力で打れりやア飯も吐き
ませうが・ドうも云ふ訳で、怪しからん、ナ、何を證據ゑ 花「そんなら見せてやらう……
も之ハ其時旦那が帯して行ッた脇差だらう 花 [illegible] して出た事ハ聞いて来たのだ、サどうだ

左様どうだて之れを 花「是ゑ手前か刃を抜いてチヨン〳〵切合ッたと云ふ跡て丁度其側を
通り掛つて此の刃を捨ふたがちつとも抜けない此抜けない脇差をドウ云て抜いて切合つた
か夫れを聽かう 富「夫れアヽ私が轉倒いたーた 花「何が轉倒ーた 富「ソレハ私ハ大勢を
相手に切結んで居り夜陰でげすから能く分りませぬが全く鞘の光りを見て抜身と心得ました
たかも知れませぬが私が手引をして……是ハ怪からん事でげすどうも左様な御疑念を蒙り
ましてハ殘念ゐ心得ます 花「ソラ〳〵手前の云ふとハ皆ゐ間違つて居らア鞘の光りを見て
抜身て切合つたと思つたと云ふが鞘でも切れバ鞘に疵が無けれアならねエ一芒尖から火花
を散したと云ふが鞘でも切合つてどうして火花が出るイ 富「ヂヤア全く轉倒致したのでげ
す全く向ふ同士チヨン〳〵切合つて火花が出たのでげせう、大勢の暗闇で向ふ同士……ド
うも左様な手引をして殺ーたと云ふ御疑念ハ手前少しも覺ゑが御坐いません 花「ナニ云
はおけりやア脊骨を殴して飯と吐せても云はせるそ…… 富「アヽ痛い〳〵傷う御坐ります
アヽ痛い腕が折れまもア痛い 花「サ云つて仕舞へ云ハおければ殴もそ 富「アヽ傷う御坐り
ますも 花「ヤイ能く考へて見ろ實ハ大恩に濟みませぬの旦那は私が手引きをして殺をせまし
た其申し譯の爲めに私ハ坊主ゑなつて「加の追善供養をいたしますと云へバお神さんに命
乞ひをーして生命丈けハ助けて遣るから一角が殺したと殺したと云つて仕舞へヨ 富「云つて
仕舞ゑと仰しやつても……アヽ傷い傷う御坐います……だから私ハ申しますがネ……ア痛

い是ハドウも恐れ入つたネ……ア、傷たい腕が折れまセア、申ます〳〵〳〵申しますから
お放し下さい、サウ手をグつと關取の力で押へらるると骨が折れて仕舞ひますから……ア
ヽ痛いドウモ情けないトンダ災難でげす無實の罪と云ふ事ハ致し方が無いナア……關取館
く御考へください私ハ恥を御話し致しますよ、昨年夏の取つ付きでけしたが瓜畑を通り掛
りまして眞桑瓜を盗んで食ひまして既に縛られて生埋になる處を旦那樣が通り掛つて助け
て家に置いて下さる御蔭で以て黒い羽織を着て村でも富さん〳〵と云れるのハ全く旦那の
御恩でげす其御恩のある旦那を惡心ある者の爲に手引をして殺させると云ふ樣なとハドノ
樣なことがあつても覺ハ御坐りませぬが……ア、痛タヽヽア、傷う御坐ります腕が折れ
て仕舞ます 花「ナニ痛いと腕を折うと脊骨を折らうと乃公の料見だ乃公が兄弟分になつた
旦那を殺した奴を搜〳〵て敵を討にやならぬ手前一人に擦られないから云はなけれァ殺ーて
仕舞ふソレトモ殺させたと云へバ助けて遣るが云ハないク此野郎。と松の木の樣な拳を振
り上て打たうと致ました時にハ實に驚に捕つた小鳥の樣な者で逃げるも退くも出來ませ
ん此時ハ富五郎がどう云譯を致ますか鳥渡一息きつきまして

第六十八席

富五郎が花車に取て押へられましたハ天命で己れが惡計で惣次郎の差料の脇差へ松脂を注
き込で置きながら其脇差を抜いて惣次郎がチヨン〳〵切合つたと云ふ處から事が顯へれて

富五郎ハ何と云ても遁れ難う御坐います殊ふ相手は角力取り富五郎の片手を取つて逆に押
へて拳を振上られると時ふハドウにもコウにも遁途が有りませぬ表の玄關には二人の弟子が
張番をして居て若し逃げ出せば頸を取つて押へ樣と待て居りますから此時ハ富五郎が眞青
になつて寧そ白狀しようかと胸に思ひましたが其處ハ固より惡才ふ長れた奴 富「關取御疑
念の種重〳〵御尤もモウ斯うなれば包まず申します申ますから放し下さい 花「申ますと言
つて仕舞へば夫で好い 富「言つて仕舞ます是迄の事を不殘御話し致します致しますが關取
サウ手を押へて居ては傷くつて〳〵饒舌ることが出來ません斯うなつた以上は遁も隱れも致
しませぬ有体に申すから其手を放して下さいあゝ傷ハ 花「言つて仕舞へば好いサア殘ラず
言つて仕舞へ。と押へた手を放しますと側に大きな火鉢がありましてかん〳〵と火が起つ
て居りまを夫れふ掛つて居る大藥鑵を取ッて 富「申上ますると。言ひなが
ラからパッと灰神樂が上りまして眞暗になりましたなれとも角力取等ハ
かいたなり立上りも致しません 花「何をするぞ。と言ふ內ふ富五郎ハ
の強い男で表へ遁れを弟子がガンパッて居るから直ふ取て押へら
口の方から駈出し飲けを踏んで逃げたの逃げないの一生懸命て
げましたが羽生村へハ逃て行かれませぬから直に安田一角の
……先生〳〵 安「なんだ、サア此方へ 富「ハ……ア水を一杯頂戴

一寸如何したんだ喧嘩でもしたか」富「イイエどうも喧嘩
百飯を吐せるテ貰にドウモ愕きました」安「誰れか飯を吐
く此處まで逃げたがモウ此處にも居られぬので直に私は歩
致度い」安「如何したかサウ騒でいけがないは」富「ドウモ先生へ
話を仕ますると相手い角力取ですから一角も不氣味で御坐いました
ない私が殺したと云ふことを云ひいしない」富「何を……夫ハ云ひませぬ足
を致しと廉がありますから縱令骨骨をドヤされて骨が折れても夫れは云い
てこんな苦い目を致したから可愛ろうと思ッて二三十金ください直に私い逃ます
何んだ何んにも可畏いとはない」富「可愛いよとい無いと仰しやるが足下知らない
ウモ彼男の力は無法な力で只握られさいかりでを斯んなに痣になるのだもの」安「ヤヤ
公に路金を遣るから逃げるが好い」富「足下も旱く……直ぐ跡から遣ッて來ますよ」安「遣ッ
て來ても云ひさへせんければ宜しい」富「理不盡ふ……」安「幾ち理不盡ても白狀せぬあに蹴
ん込んでドウコウと云ふ譯にいかぬ」富「無法に打ちますヨ」安「ナニ打れはせぬ仔細ない
富「仔細ないと仰しやるが私の跡を追駈て來て富五郎い居るか」慇懃ッさらうイエ慇懃は
ぬ」居ないと言へばヤヤア戸棚に居ませうと言ので捜しませう」そうで無いにしても表で
暴れて家を搖震ると家が潰れるでせう男の力い大もさ者だから、ヤアと云ふと家に地震が

搖て打潰されて仕舞ひます何にしても家に居ると面倒だから逃げて下さいエー先生」安「チ
ヤア路金を遣るから先へ逃げな」富「逃るなら一緒よ逃げたいものです」安「一緒に逃てい人
の目に立つて宜くない乃公が手紙を一本付けるからそを持て常陸の大方村と云ふ處に私の
弟子があるから其處へ行て隱れて居れば知れる譯は無いから温りが冷めたら又出て來い私
は一足跡から……ナニ暴れても仔細ない逢ひ度いと云へば餘義ない用事が出來て上總へ行
つたとか江戸へ行つたとか出鱈目を云つて居れば取り附く島が無いから仕方が無い貴公
は元へ行きな」富「ヂヤア路金を頂戴私いすぐ行ます」安「サウ急がずよ、と落付いて手紙一
本書いて路錢を附けて遣ると富五郎は其手紙を持つて人に知れぬ樣よ姿を隱し間道〳〵と
とう〳〵逃げをはせて常陸へ參りました安田一角も引續いて逃る花車重吉は花「已れ逃や
アがつたの、と直よ後を追かけましたけれども羽生村では此方へは來ないと云うち手
怪しいと諸方を尋ねたが何分手掛がありません一角の樣子を聞くと是は私用があつて上總
迄出たと云ふのでトント手掛りが無い風を食つて二人とも逃てしまッたからモウ歸る氣遣
ひないか安田一角の家い其儘になッて弟子が一人留守番に殘ッて居る如何云ふ譯か分ら
ぬが何でも怪しいから取て押へんければならぬが其れまい先第一富五郎をドウカして押へ
なければならぬと心得花「殘念なことをしましたコレ〳〵〳〵で押へた奴を逃られま
したと云ふとお住も母も殘念がつて歎きますけれども致方がない翌月の十月の壁を開くと

花車い江戸へ參らあけれどならぬから花車重吉が暇乞に來て　花「私ハコレ〳〵で江戸へ參りますが何事てあつても手紙さへ下さをバ直に出て來て力に成つて上ますから心丈夫に思つてお出なさい。と二人に云ひ聞かして花車重吉ハ江戸へ歸りました跡方ハ惣吉と云ふ經つて十歳の小兒とお住よ母親と多助と云ふ菩來此家よ居ハ番頭樣の者バこのりゞ何と無く心細い十一月の三日の事で空ハ雪催ゑで曇りまして筑波下しの大風が吹き立て身を裂れるほど寒う御坐います　母「アヽ寒いてエ年ィ取ると風が身に染るだそこを締てくんろよ何んだか今年に成つて一時よ年ィ取た樣な心待がずるだ酷く寒いだのう多助やぴつたり其處を締てくんろよ　多「ナニあんたそんなよ年ィ取た〳〵と云はなへが宜い若エ者でも寒むいだなんだかハア雪ィ降るばいと思ふ樣よ空ア曇つて參ました母　其處を締つて呉んのよ……お住は何處へか行たか　住ハイ。と部屋から着物を着換へ亂れた髪を撫付けて小包を待て參りまーだから　母「此マア寒いのよ何處へか行くかイ　隅「ハイ改めて御願ひがどざり升

第六十九席

隅「不思議な御緣で水街道から此方へ緣付て參りました處が旦那樣もアヽ云ふ譯てお死去にありました、旦那がお在ならお側で御用を達して縫合表向きの賄めハ無くとも妾しも今迄ハ女房の心持ちで働らいて居りましたけれども斯樣なつて旦那の無い後は餘計者で却ツて御厄介になる許りゞ御坐いますヽ江戸にハ大小を帶す者親類でも御坐いますからドウカ江戸へ參り度いと思ひまして妾しもべん〳〵と斯うやつても居られません今の内ならドウカ親類が里になつて緣付く口も出來ませうと思ひまして妾しハ江戸へ歸りますのらドウカ親子の緣を切ツて旦那ハ居なくつても貴方の手で離緣に成つたと云ふ證據を戴きませぬと親類へも話ゑが出來ませぬから御面倒でも鳥渡ハ書きなすつて誠に長こお世話さまなアとゑて　母「夫アはア因りますな今お前に行かれて仕舞ふと心細エバかりでなく跡が仕樣が無へだ惣吉ハ年ィ行かあへで惣次郎の無へ後はお前が何にも彼もして呉れたのら任して置いて己ァまア家内の勝手も知んなくなつた位だネ何うのマア其樣なとヲ云ずにドウカお前が居て呉れなへバ因りますから　隅「有難う存じますけれどもドウも居れませぬ居たつて仕方がありませんものはんの餘計者よなりましたからドウカ御面倒でも……今日直ぐと歸ります水街道の麹屋ゑ話しをして歸りますのら　母「そりやアはア間違た譯ぢやア無へかお前ハ今迄マア外の女と違つて信實ゑ者で己ア家へ緣付ても惣次郎を大切にして姑へも孝行盡し小前の者よも思ハれる位で流石御士エさんの娘だけ違つたもンだ婆樣ア家ハ好い嫁ェ貰らたつて村の者が誰も褒めねエ者はなへ惣次郎が無へ後も僅かハア夫婦になつたバかりでも亭主と思ニハ讐ィ打たなへみなンなへて流石士エの娘ハ違つた者だと村の者も魂消てゐんとマア感心な心掛けだつて涙ア流して噂アするだ今に富五郎や安田一角の行衛ニ關取が探してドンナ事をしても草ア分けて探し出して讐ィ打たせるつて是迄丹精したものをゐ

前がフッと行ッて仕舞へバ跡ハ老人と小供で仕様が無へだ、チイ固るからどをか居てくんなよ 隅「嫌やですネエ江戸で生れた者が斯んな處ヨ這入ッで、實に夫婦の情で居ましたけれもど斯うなッて見ると寂しくッて居られませぬもの田舍と云ッても宿場と違ッて本統に寂しくッて居られませんからネエどうか直に違ッて下さいな此處に居たッて仕方が有りません江戸へ行けバ親類は武士て御坐いまずから相當な處へ縁付けて貰います妾も未だサウ程る年でも御坐いマせぬから何時迄も便ことしては居られマせぬお前さんハドウセ先へ行く人、惣吉さんと兄弟と云つた處が元を云へバ赤の他人で御坐いマずからネエ考へて見ると行末の身が案ぢられマすから 母「チャアどをなッても子供や半寄が難儀イ爲つても構わなへで置いて行くと云ふかい、今迄讎イ討つと云つたぢやアなへかッレに今應イ討なへで縁切になつて行くとア訝しかんべい讎イ討と云つた廉が無へと云もンぢやア無へか 隅「初りい讎を討たらと思ひマしたけれども誰が讎だか分らぬぢやア有ませんか能く〳〵考へて見マすと富五郎を捕へて白狀さして彌ゝ一角が殺したと決つたら討たうと云ふのだが屹度富五郎一角と云ふとも分らずソレも關取グ附いて居れど好う御坐いマセが關取も居ずシア見れバ讎が分ッても女の細腕でも敵に返り討ちになりマすかラネエ又夫れ程何にも此方樣に義理はありマせん漸く嫁付いて半年位のことで命を捨てゝ讎を討と云ふ程の深い夫婦の間柄でもありマせんのラ返り討にでもナッてい馬鹿〳〵しう御坐いマすかラ讎討はお止にして江戸へ歸りマス 母「魂消たナアマア夫ぢやナ何だア今迄讎イ討つと云つたとア水街道の麹屋でお客ヨ世辭を云ふ樣ヨ心ヨモナへ出鱈マへを云ッたのだナ、世辭だナ 隅「イヽエ……世辭でハナい關取を賴みヨして大丈夫と思ッて居マしたが關取モ居ナけれバ妾ハ嫌だモのソンナ返り討ヨナるのハ詰りませぬかラチエ 母「呆れたよマア何んと魂消たナア汝がうんな心と知ルナへで惣次郎が大ヨ金ヱ使つて家イ連れて來て眞實ナ女を思つて魅されたのが、悔しいだサウいふ畜生の樣ナ心ナラタッタ今出て行けやい縁切狀を書て呉れるかラ隅「出て行かナくつて、當り前だアチ 多「お住さんマア待てお呉んナさへ……お神さん貴方人が善いかラ直き腹ア立つがお住さんはソンナ人でナへ私しが知てるかラ……サテお住さん此處ナア母樣ア江戸チ見たことも無し大生の八幡へモ行つたことア無いと云ふ田舍堅氣の母樣だかラ一ヶ氣ヨ障るとアあるだラうか實は斯う云ふ事があつて氣色が惡いとかアヽ云ふ事を云はれてはナラぬと云ふ事があるナラ私がヨ話イしてお呉んナせへマア旦那がアヽナつてかラハ力ヨ思ふのハ御前さんの外ヨ誰も無いのだ惣吉さんだつて彼の通り眞實の姉さんか母樣アの樣ヨ思つて組つて居るし讎の行衛ハ八州へも賴んでエたかラ今ヨ關取が出て來れバ手分ヱして富五郎を押へて敵いたラ大概讎ハ一角ヨ違ヱねへと思つてる位だかラ機嫌の惡い事が有るナラ私ヨサウ云つてどうか機嫌直してくださへチエお住さん

住「何を云ふのだチエお前ハ何も氣の揉むことハ無いやチ御母さんモ呆れて出て行けと云

ふかヲ離縁狀を貰つてお呉んなさい妾い仇打い出來マセン仕方ナしよ仇を打つと云つたので實い義理があるかラサ能々考へて見れば馬鹿氣て居る夫程深い夫婦でモありマセぬかラチエ 多「夫れヂヤアお住さン本統よ旦那の讐イ打つてエ考へモ無へ惣吉サンモ御母樣モ措いて行と云ふのかア 住「左樣サ 多「魂消たチエ本統かア 住「慮よ斯ンあとが云へるモのか今日出て行かうと云のだヨ 多「呆れたナアりンだラ已エ云ふが 住「何を云ふの〳〵

第七十席

多「旦那が麹屋へ遊ひよ行ッた時酌よ出て標致い好し人柄よ見えるが何處の者だと云ふと元とい由ある士の娘で之れ〳〵で奉公して居ます外の女ア皆枕付で居る中よ妾い堅氣で奉公と仕樣と云ふんだがドウモ辛くつてあらあへて涙ア流して云ふだから旦那が可憐さうだと云ふので金ェ呉れたのが初まりソレカラ旦那が貰ェ切つて呉れべいと云つた時手を合せて誠よサウあれア浮びます助かりますと悅んだぢやアねへか夫れよ又た旦那樣ア切殺されたと云のも早やエ話しが一角と云ふ奴がお前よ惚れて居たのを此方へ嫁付たから其れを意恨よ思つて旦那ア殺したんだシテ見れアお前が殺したも同し事ぢやア無へか其れを辨へおへでお母樣や惣吉さんを置いて出れば義理も何も知ンねへだ狸阿魔め 隅「何だイ狸阿魔とは失禮な事をお云ひで無いそりやア賴みもしましたから恩も義理も有よい違ひ無いけれども夫れだけの勤めをして御祝儀を戴いたので當り前の事だアチ、ソレカラ妾を貰ひ切つて遣がラ來い、諾と云つて來た丈の事だから旦那が殺されたつて讐を討つ程の義理もおいぢやア無いか表向廣めをした女房と云ふでもなし云ばば妾も同樣だかラ旦那が居なけれア歸りますよ 多「此阿魔ドウモ助けられナへ阿魔だ打つぞ出るナラ出ろ 住「ナんだい手を振上て如何する積りだい叶畏い人だね、サ打ナラ打て御覽是程の傷が出來ても水街道の麹屋が打捨つてい置かないよ 多「ナニ麹屋……金を呉れた事アあるけど麹屋が如何した 隅「此間御寺へ行と云つて路銀と借り樣と思つて麹屋へ行て話しをして江戸へ行けバ親類もありますかラ江戸へ行き度いと思ひますが行くよい少し身裝も拵へて行き度いかラマア此處で三年も奉公して行きますかラお願ひ申し升と云つて証文の取極めをして前金も借りて來てあるのだかラ是かラ行つて麹屋で稼ぎ取りをして行かうと思ふのだモウ妾の身体い麹屋の奉公人よ成て居るのだかラ少しでも傷が附けバ麹屋で打捨つておかナいよ願つて出だラ濟むまい、サ、打つナラ打て御覽 多「呆れたアこいつ何も……お神樣此間お寺へ墓參りよ行く振ィして麹屋へ行つて証文ぶつて來たてエ此阿魔之りやア毆ねへ、エー神樣義理も人情も……ア是エ本統よ何も打てねへ阿魔だ 母「やアもう宜ワイ恩も義理も知んなへ樣な畜生と知らずよ惣次郎が騙されて命まで棄る事よおッたなア何ぞの約束だんいいうんナ心おら居て貰らッても駄目だから、さア此處へ來う離縁狀書へたから持たしてやれ 多「さア持てけ此阿魔アこれエ打てねへ男だ 隅「持てかなくッて如何するものか〳〵 お隅い離縁狀を開い

て見まして苦笑ひをして懐中へ入れ 隅「有難いア、之れで爽快した 多「ア快爽した
アがるドウモ悪イ口イ敲きアがるナア此阿魔 住「なんだッエきやア〳〵お言で無い……
長々御厄介様になりましたお寒さの時分ですから隨分御機嫌能う 多「エー悪嗚〳〵言わず
よサつサと早く行かナへかイ 住「行ナくつて何うする者か縁の切れた處よ居ろつても居や
アしナい、と悪口を言ナがラつカ〳〵と臺所へ出て來ますと惣吉ハ經て十歳、田舎育ちで
も名主の息子で御座いますから何處か人品が違ひます可愛がッて呉れたから信實の姉の樣
よ思ッて居りますから前へ廻ッてピッタリ袂よ縋ッて 惣「姉さまア御母ゞが惡るければ已
れが謝罪から居てくんなよ多助があんおこと云ッてもアレハ誰がよも云ふ男だから已れが
謝罪るから姉さん居て呉んなへ困るがらョー 隅「何んだい其方へお出よ五月蠅いからお出
よ袂へ取ッつかまッて仕樣が無いョー其方へお出ッたらお出でョ 多「惣吉ッァん此方へお
出なさへ今まで坊ちやんを可愛がッたなア世辭で可愛がッた、狸阿魔だから側へ行かあい
がエエ 母「惣吉や此處へ來う幾ら繼ッても皆ナ世辭で可愛がッたでエー心よもナい世辭イ
云て汝がを可愛がる振イした、夫でも小供心よ優してされりア信實姉と思ッて坊が謝罪か
らぬて呉んろと云だ其處エらを考たッて中々出て行れる譯の者でアおへ呆た阿魔だ惣吉此
處エ來い 多「此方い御出でおさへ坊ちやん駄目だから 隅「來いと云から彼方へ御出よ今迄
御前を可愛がッたのもチお母さんの云ふ通り據なく兄弟の義理を結んだから御世辭よ可

愛がッたので皆本統に可愛がッたのちやアない上彼方へ御出で行ッて在呉れかないか 多「
面れ坊ッちやんを突き飛ーやアがる惣吉さん御出でなさい……此女……ア、又打てぬへ……さつ
〳〵と行けィ 隅「行かなくつて如何するものか。とお隅ハ土間へ下り庭へ出まして門の板
の下に立つとピューピューと言ふ筑波風しか身に染ます 住「ア、もう覺悟をして思ひ切ッ
て愛想つかしを言なれリャア爲になるんと思ッてアレ迄に言ッて見たけれども何も知らな
い惣吉が私の片袖に縋ッてどうぞ姉さん私が謝罪るから居て御呉れ坊が困ると言はれた時
には實は之れ〳〵と打ち明けて言とふかと思たが惣ひ言へハお母さんや惣吉の爲にならん
と思ッて思ひ切ッて心ふも無い惡言を言ッて出て來たが是迄信實ふ親子の樣ふ妾に目を掛
けてお呉んなすつた姑ふ對して實に濟まない……御母さん其變り屹度旦那樣の讐を今年の
中に搜し出して本望を遂た上て御詫致しますア、 勿体ない口が曲り升御免なすつてくだ
さい。と手を合せ耐へ兼てお住かわつと聲の出るまでふ泣いて居ります 多「未だ立てやア
がる彼處に立て悪言口を利いて居やアがる早く行れ 住「大きな聲をするない手前の樣な土
百姓に用ゝないのだ漸つとサバ〳〵した、と故意と口穢いことを云ッて是から麹屋へ來て
亭主に此話をすると 亭「能く思ひ切ッて云ッた、ヨシ乃公がドコ迄も心得たから心配する
な先づ手拭でも染てすく廣めをするか好いコレ〳〵 [illegible] 拵へてと、言ふので手拭等を
染欠て不殘雲助や馬方よ配ました 亭「今までとは違ッてお住ハ據ない譯が有ッて客を取ら

て見まして苦笑ひをして懐中へ入れ　隅「有難いア、之れで爽快した　多「ア快爽した
アがるドウモ悪イ口イ敲きアがるナア此阿魔　住「なんだチエきやア〳〵お言で無い……
長々御厄介様になりましたお寒さの時分ですから随分御機嫌能う　多「エー愚圖〳〵言ひず
よサつサと早く行かナへかイ　住「行ナくつて何うする者か縁の切れた處よ居ろつても居や
アしナい、と悪口を言ナがラつカ〳〵と臺所へ出て來ますと惣吉ハ經て十歳、田舎育ちで
も名主の息子で御座いますから何處か人品が違ひます可愛がッて呉れたから信實の姉の樣
よ思ッて居りますから前へ廻ッてピッタり袂よ縋ッて　惣「姉さまア御母ア様が悪るければ巳
れが謝罪から居てくんなよ多助があんあこと云ッてもアレハ誰がよも云ふ男だから巳れが
謝罪るから姉さん居て呉んなへ困るからョー　隅「何んだい其方へお出よ五月蠅いからお出
よ袂へ取ッつかまッて仕樣が無いョー其方へお出ッたらお出でョ　多「惣吉ッアん此方へお
出なさへ今まで坊ちやんを可愛がッたなア世辭で可愛がッた、狸阿魔だから側へ行かおい
がエェ　母「惣吉や此處へ來う幾ら繼ッても皆ナ世辭で可愛がッたでエー心よもナい世辭イ
云て汝がを可愛がる振イした、夫でも小供心よ優してされりア信實姉と思ッて坊が謝罪か
らぬて呉んろと云だ其處エらを考たッて中々出て行れる譯の者でアおへ呆た阿魔だ惣吉此
處エ來い　多「此方い御出でおさへ坊ちやん駄目だから　隅「來いと云から彼方へ御出よ今迄
御前を可愛がッたのもチお母さんの云ふ通り　據なく兄弟の義理を結んだから御世辭よ可

愛がッたので皆本統に可愛がッたのちやアない　彼方へ御出で行ッてれ呉れかないか　多「
面れ坊ッちやんを突き飛ーやアがる惣吉さん御出でなさい……此女……ア、又打てねへ……さつ
〳〵と行ケイ　隅「行かなくつて如何するものか。とお隅ハ土間へ下り庭へ出まして門の板
の下に立つとビユービユーと言ふ筑波風しか身に染ます　住「ア、もう覺悟をして思ひ切ッ
て愛想つかしを言なれリャア爲になるんと思ッてアレ迄に言ッて見たけれども何も知らな
い惣吉が私の片袖に縋ッてどうぞ姉さん私が謝罪るから居て御呉れ坊が困ると言はれた時
には實は之れ〳〵と打ち明けて言てふかと思たが怒ひ言へハお母さんや惣吉の爲にならん
と思ッて思ひ切ッて心よも無い悪言を言ッて出て來たが是迄信實ふ親子の樣ふ妾に目を掛
けてお呉んなすつた姑ふ對して實に濟まない……御母さん其變り屹度旦那樣の讐を今年の
中に捜し出して本望を遂た上て御詫致しますア、　勿体ない口が曲り升御免なすつてくだ
さい。と手を合せ耐へ兼てお住かわつと聲の出るまでふ泣いて居ります　多「未だ立てやア
がる彼處に立て悪言口を利いて居やアがる早く行れ　住「大きな聲をするない手前の樣な土
百姓に用てないのだ漸つとサバ〳〵した、と故意と口穢いことを云ッて是から麹屋へ來て
亭主に此話をすると　亭「能く思ひ切ッて云ッた、ヨシ乃公がドコ迄も心得たから心配する
な先づ手拭でも染てすく廣めをするか好いコレ〳〵〳〵〳〵拵へてと、言ふので手拭等を
染欠て不殘雲助や馬方ハ配ました　亭「今までとは違ッてお住ハ據ない譯が有ッて客を取ラ

おくつちやアならん皆なと同ドに枕付を出るかラ方こへ觸れて呉れ。ど言ふと此評判がパッとして今迄でも堅い奉公人で殊ょ名主の女房よりもなつた者が枕付で出る金さへ出せば自由になると言ふのて大層客があります して近在の名主や太盡がセッセとお住れ處へ遊びに來ますけれども中こお隅ハ枕を交しませんお隅の評判が大變にナりますると常陸に居る富五郎が此事を聞きまして 富しめた金で自由にナる枕附きで出れば望みハ十分だ。と大命ないこ云ひナがら富五郎が浮ことお隅の處へ遊興に參ると云ふ之れから仇打にナりまするが一寸一息

第七十一席

お住ハ霜月の八日から廣めを致しまして客を取る樣にナりまえたナれどもお住ハ眞心な者で御坐いますから能いやうよ切り脫けてハ客と一つ寢をする樣ナことハ致しません面よりも標致ハ好し樣子ハ能し其上世辭がありまするので大ーて客が御坐ります丁度十二月十六日チラ〳〵雪の降る日に田倉富五郎が遣ッて參りましたが客が多いので何時まて待てもお住が來ません其内に追こと夜が更けて來ますがお住は外の客で來ることが出來ませぬから代りの女が時こ來てハ酌をして參り其間にハ手酌で飲りまえたから餘程酒氣の廻つて居る處へ隔ての襖を明けて這入つた人の扮裝ハヂャガラつポイ編の小袖にてマア其頃ハ御召縮緬が相場で、頭髮は達磨返しに一寸した玉の附いた簪を挿し薔薇班の班のきれた櫛を横の

方へ斜て挿して居り襟ハは濃り白粉を附け顏は薄化粧の處へ酒の相手でホンノリと櫻色よなつて居ります帶がシダラクよなりましたやら白縮緬の湯卷ダサラ〳〵見ゐると云ふ前日とはスッパリ違ッた扮裝で 住「富さん 富「イヤ之れはどうも、どうも是ハ 住「妾しやアチ富さんぢや無いかと思つて內ゝ見世で斯う〳〵云ふ人ぢやア無いかと云ふと然うだと云ふから早く來度いと思ふけれども長つ尻のお客でチエ今やつと脫けて來たれ本統よ能く來たチ 富「之れハどうも甚どどうも御無沙汰を、實は其の不處の災難で御疑念を蒙むりました夫故お宅へ參ることも出來なに斯んお詰らぬ事ハ無いと存じて、存じながら御無沙汰を……只今迄重ゝ御恩よありましと貴婦が御離緣になつて此方へ入つしやつた事を聞いて尋ねて參りましたどうも妙でげすチエー御樣子がズーと相違ひました チ 住「御前さんも知ッてる通ェべん〳〵とアヽやッて居たッても先きの見當がないしろうんならばと云ッて生涯樂よ暮せると云ッた處がアンナ百姓家で何にも見る處も聞く事も無し只一生樂よ暮すと言ふばりぢやア仕樣が無いから江戸へ行うと思つて、江戸よハ親類が有て大小を帶を身の上だから些ども早く頼んで身を固め度と思つて離緣を頼むと不人情者だつて腹を立つて狐阿魔だの狸阿魔だのと言ふから忌ゝしいから强情ふ無理無体よ緣切狀を取つて出て來ましたノ、江戸へ行くよも小遣が無いもんだから斯んな眞似をして身裝も拵へたェ金の少しも持つて行き度いと思つて遂よ斯んな處へ落ちたから笑ッてお呉んなさい 富「笑ふ處ろ誠ふと

うモ、ナニ必ず私は買ひに來さと言ふ譯でハありませんカラ決して御立腹下ぎるな、ソンナ失敬の次第ではナいが如何言ふ譯で羽生村ゑ御出遊ばしさカと存て御樣子を伺ハふと思つて參ッた處が數獻傾れて大酩酊 住「マア是カラ二人で樂ゝと一杯飲うぢや無いか、早く來て久し振りで昔ゑ話しを仕たいと思ッても長ッ尻のれ客で滅多に歸らぬからいろ〳〵心配してやッと御客を外して來たの、マア喜しいこと大層お前若くなッたことねエ 富「恐入ます貴婦の御樣子が變ッたにハ驚きましたねエどうも前とハズッカリ違ました絲エ 住「オ御酌致しませう 富「之れはどうも、マア一寸一杯…左樣てすか 住「妾しハ太きな物でなくつちやア酔てないから大きなものでホット酔つて胸を晴し度いノ、イヤな客の機嫌氣褄を取つてイヤお氣分だのらチエ…富さん今夜は世話をやかせますよ 富「大きな物で、エーー湯呑で上りませか御酒は些とも飲らおかはたんですか血に交ハれは赤くなるとか、妙でげすナア、御酌を致しませう…之ハ妙だどうも大きな物でぐうと上れるのハ妙でげすナ、是は恐入ハました ナ 住「妾しは酔つて富さんお我儘な事を言ふけれども富さん聞いて御呉れナ 富「ンーお住さん必ず御疑念は御晴らしなすつて……惣次郎さんを私が手引して殺させたと言ふので花車の闘取が私の背骨をぞヤして飯を吐せると言ふかゝ私ハ驚いてアノ腕前では迚も叶はぬのら一生懸命逃げたんだがアノ位苦しいことハありませぬ夫故御無沙汰に成つて……貴婦が枕附きで客をお取りになると言ふ事を聞いて今日口を掛けたのハ相濟ま

ぬが實ハ如何云ふ譯かと存ぜて只御樣子を伺ひ度いと云ふので參つた丈けで……… 隅「マアそんな事は好いぢやア無いか今夜妾しは酔ふヨ 富「御相手をいたしませう 隅「御相手も何もいるものカ。と大きな湯呑に一杯受けて息も吐かずにぐつと飲んで 隅「サア富さん 富「私ゞモウ數獻……エ御酌でげすか置注ぎには驚きました子……夫丈は妙なものでげすナ、貴婦お酒は元から上りまーたか 住「ナニ旦那の側に居る時分にて謹んで飲まなかッたんだか此家へ來てから戴だく樣にありまゑた 富「エヘ有難うモウ……お住さんどうカ御疑念なーチ之れ丈けはどうか、私ハ詰まらん災難で私が何ほ何ても一角は知らないが奴逢ッた事も無い奴に何で此の如くナ御疑念が掛るか私も元は大小を帶した者此儘には拾置けぬと餘程爭ひまたか闘取が無暗に打つと云ふかゝアノ力で打だれては堪らぬから逃げると云ふ譯で實に手前詰ゝぬ災難でげして…… 住「好いじや無いの妾に何も心配はいりアしないや子、羽生に居る時分にハ悔しい讐打をすると言ふかゝ私も行れて然う言つたけれどもモウ彼處を出て仕舞やア何ふも義理は無いから妾に心配は入ゝ無いか只聞き度いのハ富さん忘もしない羽生に居る時お前が酔つて歸つたことかあつたらう其時御前が旦那の居ない所で妾の手を摑まへて江戸へ伴れて行つて女房にして遣ゝう、ウンと言へは乃公が身の立ッ樣ゝするか江戸へ一緒ゝ行ッて呉れぬかと言ッて呉れの事かあッた子へあれハ本統の心かゝ出て言ッたのか妾か名主の女房にナンてたのゝ御世詞に言ッとのあ聞度い子エ

富「これハ恐れ入りました是れアどうも御返答ヨ差支へる……是ア恐入たチ……富五郎困まりましたチ……おや〳〵又充溢ヨなッた貴婦そゞから置き注ぎはいけません……餘程酔ッて居るからモウ御免なさい……あれハお隅さん貴婦が恩人の内實ヨなッて居るから食客の身として酔たまぎれで女房ヨなれ……江戸へ伴れて行かふと云ッたのハ實ヨ濟まない……濟まないが心ヨ無いとハ云れん樣な者で富五郎深く貴婦を胸ヨ思ッて居るから酔つた紛れヨ口ヨ出たのでどうも實ヨ御無禮を致しましたドウカ平ヨ御免を……住「謝罪なくつても宜いちやアないか眞實ヨお前が心ヨ思つて呉れると云へゞ嘘ヨも嬉しいよ富さん私もチ何時までもこんな身体をして居たく無い……江戸へ知れてハ外聞が悪いからチェ江戸へ……行くつたて親類ハ絶えて音信が無いヱ眞實の兄弟もないから何だか心細くッて……夫ヨハ男でなけれバカヨならぬが……斯いふ汚れた身体ヨ成たから今更いけない……いけないけれども御前がチェ私の樣な者でも伴て行ッて女房ヨすると言ッてお呉れなら私も親類へ行ッて此人も元いコレ〳〵の御士で御座いましたが運が悪くッて斯う云ふ譯ヨなッたからと言ッて頼むヨも二人ながら武士の家ヨ生れた者だから親類へも話しが仕好い……よう富さん眞實ヨお前妾が斯う言ふ處へ這入ッたカらいけあいカへ……前ヨ言ッたことハ虚かへ 富「コリヤア何んとも恐れ入たチ……旨いことを御仰るな……ア又充溢ヨ成たサウ注いちやアいけあい……ニー、眞

實ふ夫ナ事をする氣遣ひは無いテ、何か御疑念の處ハ、私は困るヨ、トウモ理不盡に私を疑ッて脅骨を打擊と言ふのら驚いて、分疏する間ハ無いから逃げたのだが神掛れて富五郎ソンナ事は無いので 住「ソンナ心配と無いぢやアないかナンダテーエお前、妾が斯んな身の上ふ成て居ても譬とか何とか言ッて騒ぐと思つてるのかへ、妾ハ表向き廣めをした譯でも無し、譬を打つと言ふ程な深い夫婦でも無い夫程何にも義理はないと思ふから悪言な言て出たのたもの……富「ろれア義理ハありませうが私は貴婦がアンナ愚痴婆の機嫌を能く取ッてお在なさると思ッて居ました、貴婦が此れを出るのハ本道でけそ、御尤もでげすチエ 住「ざからサお前が不好なら仕方がないけれども眞實ならお前の爲にドンナ苦勞をしてもイヤナ客を取ッてモ張合があると思ッて居るのサ、夫れには判人の無いとイカナイカラお前が判人ふなつて、さうして妾が稼いだのをお前に預けるから妾を江戸へ伴れて行て御呉れな 富「眞實でそか 住「アラ眞實だッて妾が嘘を言ふ者かね悪らしいヨ 富「アヽ、傷い捻ッてハいれるあい、サウ言ふ……又充溢になつて仕舞たいけあいチエ……ざかお住さん眞實に御疑念は御晴らしくださいな 富五郎迷惑至極だてねエ 住「どうも五月蠅ヨ、未だドコまで疑るのたねろんなに疑るなら證據を出して見せやうじやあいか

村から取つて來た離縁狀と是はお客に貰つた三十兩あるのさよ御前か眞實女房に持て呉れる氣ナら此お金と離縁狀を預けるか御前も確しカナ證據を見せて御呉れヨ 富さん 富「眞實ですか、眞實ナら私だッて親類もあるのらお前さんと二人で行ッて話をすれハ即諾ネ ハ、それア小さくも御家人ハ株位ハ買ッて呉れるだらう。お隅さん眞實ナラ生涯。嘘はつかないチエ 隅「マア嬉しいじやアないカ富さん眞實かい 富「それア眞實住「有難いネエ。チャア證據を見せてお呉れナ富「別に證據はない隅「だから悪ラしいヨ 富「悪らをいつて、有れば出すけれとも無イものチャア外ふ仕方が無いから斯う仕樣。サウ話が決れハ此夜に永く奉公さして置きたくないからね。どこまても金の才覺をして早く江戸へ行かう富五郎混人ハして居てモ百や二百の金を直に出來るから住「サウ。そんあに入らないが路銀と土產位ハ買ッて行きたいチエ 富「斯う仕樣 隅「だッて急にお前に苦勞させてハ濟まないのら此處で妾が二年も稼いでのら…… 富「ナニ宜い。宜いのら斯う仕樣、一角を騙して百兩取らう 隅「オヤ一角さんは何處に居るノ 富「ソ……マア宜いや……お住さん眞實に御疑念の虚い……隅「又そんなことを。眞實にお前は悪らドいヨ。チャアお前ハ一角と共謀で殺したい事があるから。妾がどこまでも譬きと狙ッて居ると疑ぐるのだらう。そんあ疑りがなつて妾を女房ふ仕樣と云ふのは餘程分らあい可畏い人だね、モウ廢しませう。讐付迄見せて生涯身を任かして力にならうと思ふ人がさう疑ぐッてハ御金も書付も渡されあいから廢しにしませう 富「さう云ふ譯でハないが決して疑ぐる譯でハ無いがネ 住「だのらサ、疑ぐる心が無ければ一角さんハ何處に居ると云ッたッて好いぢや無いか、どうーて騙ふて金を取るの

かッレを御言ひよ　富「ンー夫れン一角かお前ま惚れて居るのだのら……　住「さうかい　富「前から惚てる・夫だのら　一角の處へ行ッて御前が斯う〳〵で御坐いますから貴方御新造にしてお遣なさい、就てン内證に百兩借金がありまをから之を拂つて遣れゞ直ま此處へ來られる譯だ出して下さいと云へゞ是非金を出す、イ、ェ出るに極つて居るのだのら出したら借金を拂つてお前と二人で……ヲェ……江戸へ行かう、こいつが宜いぢやあいの　住「どうも嬉しいとネェ……一角さんン何處に居るノ　富「ンーそれ……　住「訝〳〵いネェ、もウ夫婦になッてお前ン亭主だョ添ッて仕舞ッて今夜　一晩でも枕を交せゞ大事な生涯身を任せる亭主だもの前の亭主の譬と云ッて刃が向られますか私も武士の娘・決して嘘をつきませぬ

第七十三席

富「是ァ驚いた……流石ン武士の御息女喜しいナ……又充盈になッて仕舞ッた……之れア有難いそれぢやァ云をふネェ、實は私ン……お前に心底惚れて居たが惣次郎が有ては仕樣がない邪魔よなると云ッても富五郎の手ま合ィない所が幸ひ安田一角がお前ま惚れて居るのら一角を敎唆ッて弘行寺の裏林で殺させて置いて顏に傷を拵へて家へ駈込んだがァノ通り花車が感付きやァグッて打つと云ふから此方ン殺されては堪らぬから逃げて仕舞た全たく一角が殺〳〵は殺したんだが實ン私が敎唆ッて遣らしたのだ　隅「私もさう思つてたけれど

もネ羽生に居る時ま義理だから譬と云ッて居たけれども斯う出て仕舞へゞ義理も鐵爪も無い他人だァねァンナ窮屈な處に居るのンイヤだと思ッて出たんだが富さん斯うあるのン深い緣だねへ何しても夫婦になる深い約束だョ　富「之は妙なもんだネ不思議なもので羽生村に居る時から私が眞に惚れゝゞこそ色こお策を去て惣次郎を討せたのも皆ナ御前故だネェ　住「一角さんは何處に居るの　富「一昨日の晩三人で來て前の家ン策で賣らして仕舞ッたから・笠阿彌陀堂の横手に交遊庵と云ふ庵室がありませう二間室があッて庭も些となり林の中で人に知れないからと云ふので其處を借りて居て今夜私に樣子を見に來いと云ふので私が來ただから・斯う〳〵と云へバェーと云ふので百兩出を・ナニ大夫丈だ其れで借金を片付けて行ッて仕舞やァ彼奴は何とも云へない人を殺したとを知ッて居るから何とも云へやァしないから姻に卷かれて仕舞はァ、追掛やうと云ッても彼奴江戸へ出られる奴で無いから大丈夫　住「サウ眞實ま喜しいネェ深底お前の了簡が知れたよ　富「是程お前を思ッてるのま其れを疑ぐると言ふとンない誠に詰らぬこと……住「此處で寢るといけないから彼方へ御出でよ彼方に床が取つてあるから、サ此お金と書付を　富「ャァそんなもの……　住「茲とすとンけないから御出しと。金と書付を引たくつて無暗に手を引いて細廊下の處を連れて行くと六疊許の小間がありまを去て其處ま床がチャンと敷いてある　住「サお寢と言ッちふ嫌、ァラ俯伏しちやいけないから仰向けにお成り、と仰向に寢ゝし枕をさして　住「サ

寒いのら夜具を富「ア、有難い……こりゃ人ッて寐なヨ 住「今寐るが寒いから掻巻を富「好いヨ ……雪は如何したへ 住「ナニ雪ハ降ッて居るヨ夫婦の固めよ雪が降るのも縁が深いとク言ふことがあるネエ 富「ンーそれア深雪と言ふけだ 住「富さん私は言ふ事があるヨ 富「ドウ 住「アラ顔を見られると恥かしいから被つてお居でヨ。とお隅ハ掻巻を富五郎の目の上まで被せて其上へ乗りました 隅「妾は馬乗りよ乗るは 富「何をするのた息が出ないくつて若しい。何をする切ないよ 隅「眞實に富さん不思義な縁だネ。と言ながら隠さてあつた匕首を抜いて 隅「惣次郎を殺したとハ感付いて居たけともお前が手引て一角の隠れ家まで……斯う言ふ事よなると言ふのは神佛のお引合せだネ 富「實に神の結ぶ縁だネエ 住「斯う言ふとが有うと思つて私ハ此上ない辛い思ひをして恩ある姑や義理ある弟に愛相を言つて出たのも全たくお前を引寄せる爲め・亭主の讐罰當りの富五郎覺悟しろ亭主の讐と、富五郎の咽喉へ突込む 富「ウーン。と言ふのを突込んだあり呑口を明ける樣よグッグッと抉ると天命とハ言ひながら富五郎ハバタ〳〵言しみまして其儘ウーンと呼吸ハ絶えました樣子・お住はホッと息を吐き合口の鮮血を掛つて鞘に納め 隅「南無阿彌陀佛〳〵〳〵。と念佛を唱へ惣次郎の戒名を唱へて回向を致しますお住ハ沈着いた女て直に硯箱を取出し事細かよ二通の書置きを認めて壹通ハ花車一通ハ羽生村の惣吉親子の者へ・實ハ旦那の仇を撃度許りで心よりも無い愛相盡を申して家を出て麹屋へ參つて恥かしい身の上になりました幸ひに富五郎が來てコレ〳〵の訳と殘らず自分の口から申して一角の隠家もコレ〳〵と知れましたのら女なからも富五郎は首尾能く打留たから今夜直ぐに一角の隠家へ踏込んで恨みを晴し本望を遂げる積り、なれども女の細腕若し返り打ちに成る樣なとが有つたならバ惣吉が成人の上闘取に助太刀を頼んで旦那と私の恨を晴らして下さい讐は一角に相違ない事ハ富五郎の白狀で定りました。と言闘取と母親の方へ二通の書置きを殘して傍に掛つて居る湯沸しの湯を呑ム懐中へ匕首を隠して庭の方の雨戸を明げると雪ハ小降になッた樣でもフッ〳〵と吹つ掛る中を跣足で駈出して交遊庵と云ふ一角の隠家へ踏込みまするとと云ふお住讐打の御話しば次回に

第七十四席

中し續きまする累夕淵のお話しで。お住が交遊庵と言ふ庵室よ隠れて居る一角の處へ斬り込みまするとと言ふ。婦女あがらもお住と一生懸命で御坐りまして、雪の降る中を傘も無しに手拭を冠りまして跣足で駈けて參ッて、笠阿彌陀堂から右よ切れると左右ハ雑木山で御坐ります。此山の間を段〳〵と瓜先上りに登つて參りまする處へ門の入口ハ處に交遊庵の三字を題しました額が掛つて居ります、門ハ締りハ嚴重に成つて居りまするなれども家へハ近う御坐ります、何處の外から這入口は無からうかと横手に廻つて見ても外に入口は無い樣子、暫く門の處に立つて内の

様子を窺つて居ると、丁度一角が寐酒を始めて貞藏と言ふ内弟子を相手にグビ〳〵
まーたから門弟も大分酩酊致して居りまする樣子 隅「御免なさいまし。御免なさいまし。
一寸此彼を明けて。下さいまし。アノ先生い此方に居らつゝやいますかと云ふと戸締りい
嚴重にーてあり。近いと言つても門から家までい餘程隔つて居りますが雪の夜で肅然と、
ーで居るから遙に聞える女の聲 安「貞藏〳〵誰の門を叩いて居る樣子ぢや 貞「イヤ大ぶ雪
が降て參りまゝた私し先刻臺所をあけたらアつと吹込ました 何して中こ餘程ゞ雪に成ま
したから此夜中殊に雪中に誰も參る筈え御坐いませぬ 安「デモ、ソレ門を叩く樣子ぢや、
貞「イ、エ大丈夫 安「イヤ左樣で無……ソレぞれ。みろアノ通り。ソレ叩くだらう 貞「〜
エ成程エー、見て參りませう、エー少〳〵御免遊〳〵て、大層酊致しました、跟蹌致して歩け
ませぬ、エー少と……ナニ誰だい 誰か門を叩くがい、誰だい隅「ハイあの安田一角先生は
此方に居らつしやいますの 貞「安田と、安田先生と言ふことを知つて來たのい誰だい 隅
「ハイ私い麹屋の隅で御坐い升が一寸先生よお目よ掛り度と存じましてワザ〳〵雪の降る中
を參りましたが、一寸此處をお明け遊ゝて下さいませんか 貞「ア、少と扣へて居あ。と蹌
跟ーながら一角の前へ來て 貞「ヘエ先生 安「來たのい誰だ 貞「麹屋のお隅が先生にお目に
掛ッてお話し申度い事が有て雪の降る中を態と參ッたと云ひます 安「住が來たか、ハテ迂
濶明けるお、エー彼れい此一角を兼て贔屓と附狙ふことい風説にも聞いて居たが全く左樣と

見えゝ、迂濶明けて、角觝取などを伴てヅカ〳〵這入られては困るから能く氣を附けろ、
エー全く一人が、一人なら入たとても好いが……貞「コレ、お住。何かへ、お前誰か同伴が
有ますかい。大勢伴れてお出かい。角觝取い來まーたのか 住「イイエ私一人で御坐いま
す。一寸此處を明て下さいませんか。お前さん貞藏さんぢやア有りませんか 貞「ナニ貞藏
乃公の名を知ッてるな。ウン成程知ッてる譯だ。私ゞ水街道へ先生のお供よ往ッたことが有
るから。……今明けるヨ……妙なもんだナア。オー好い梅盥にコレ雪が降つて來た。大層
積ッたナア。オーオーつ。足の甲までヅカ〳〵踏み込む樣だ……待ちな今明けるぞ。待ち
な門が貫つて締が嚴重にして有るゝら。ヤ。そラ……オヤ一人で傘なさのい 住「ハイ少し
は降つて居りましたゝ氣が急きまゝたから跣足で參りました 貞「オー〳〵私いやつと此處
まで雪を渉つて來たのだが。能く夜中よ渡しの舟が出たねエ 住「ハイアノ船頭は馴染で御
坐い升ゝら。賴んで渡ーて貰つて漸のことで參りました 貞「ソレいゝらいサア此方へ……
先生タッタ一人で渡しを渡つて跣足で參ッたと言ふので 安「うれい思ひ掛ない……ナニ傘
なしで。ソレハ〳〵。雪中と言ひ何うも夜中と言ひ、一人でエライのう、誠にドウモノサ
ア此方へ 住「先生誠に暫くお目に掛りません 安「イヤ誠にコレハ、ンー乃公は無沙汰を
ゝて居ります、暫く常陸へ參つた處が彼方で些と門弟も出來たから、近郷の名主庄屋ナど
へ出稽古を致して久しく彼方に居てい今度又此方へ來た處が、先に住つた家い人に讓つた

から、マア家の出來なまで當期此庵室に居る積りで、ダが手前能く尋ねて來たねエ　住「誠に何うも御無沙汰を致ませして　安「此夜中雪の降る中を踏分けて如何ゑて來た

第七十五席

住「アノ今日富五郎が來まゑてね、何か先生に頼まれた事ゲあると言つて妾の處へ容に成て來まして、お酒に醉つて何だか種こな事を言ひますの、けれども其樣子がサッパリ分りませんから、其事に付て先生よお目に掛らなければ樣子が分りませんから　安「シレは何うも、富五郎が行つたかい、定藏、富五郎が往つたつて……　貞「だから私が先生に申上て置きました、彼奴は誠にア、言ふ處バかり遊びに參るのが好でげす、全体道樂者でけすからなア、彼奴餘程婦人好でげすヨ　安「デ、富五郎が往ッて何う言ふ話し振の……マアー杯飲め　住「有難う御坐います、マアお酌を　安「イヤ一杯飲め　住「左樣で御坐いますか、貞藏さん、お酌を恐れ入ります　貞「イヤ久ー振りでお酌をする……私の名を心得て居るのら妙でげすナ、久しい前に一度先生のお供を致しましたか、其時逢つた一度で私の名まで覺えて居ると言ふのは、商賣柄い又別なものでげす、お住さん相變らず美麗しう御坐いますナ　安「コレお住、手前名主の手を切つて麹屋の稼ぎ女よ成つたとの枕附きて出るとが云ふ噂が有つたか嘘だらうナ　住「イーエ虚でハ御坐いません、誠にお恥かしう御坐いますけれとも便いとア、遣つても居られませんから、種こ考へまーた處が江戸にハ親類も有升から何卒江戸へ參り度と思ひまして、故郷が懐かゑいまこ無理よ離縁を取つて出まーたが手振り繃笠、　姑が腹を立つて追出す位で御坐いますゥら何一つも呉れませぬ、夫故、少ゑい身裝も拵へたり江戸へ行くには土産でも持つて行かあけれバありませぬ、夫には普通の奉公では埒が明きませんからイヤ〳〵　おから先生お恥かしい事に成ました　安「オヽ左樣ノ、ヂやア自ら稼いで苦しみ、　金を貯てナニかい身裝を拵へて江戸へ行かうと云ふ譯か、何も能く離縁が出たのう　隅「それが向ふで出さないのを此方から強情に取ましたので……先生誠よ久し振で御坐イますねへ　安「ウン……それハ妙だナア　亭「是ハ先生妙でげすナ、貴公の方でお呼び遊バさぬのにお隅さんが此雪の降る中を尋ねて來るなんて……自然に何うも貴公の……實よ感服でげすナア安「ナニさう云ふ譯でも無ゥらう、何か是には事故がなつて來たんだらう・ナニクい富五郎ゲ何う云ふ事を云ッたい　隅「ハイ　富さんの言ふにハ便こと斯んなわ卑イ奉公をするよりも一角先生の御新造にならないかと言ひますから馬鹿なことをお言ひで無い、一旦名主の家へ縁付いたのだから廣めハ云ないでも今ンど行けバ再縁をする譯ぢやア無いか・夫れだから先生は決て御新造になさる譯ハ無い　亥に　すると、仰しやれバ二まだ云もの事だけれども・　御新造よと言ふれは訳しイぢやア無いかと言ふと・イ・ニ全く百五十三　む前さへ好いければ先生は御新造にナさる思召しゲあるのたがら、お前がタッテ　頼みたと思ふから骨を折つて好い樣ま執成すから料見を決ろと言ひますから・それは誠に思ひ掛

ない有難いこと、妾の樣な者を先生が縱令へ妾にでもなすつて下さるなら妾い[illegible]
譯で便こと斯んな處に居たく無いから屹度執成してお呉れかと云ふさお酒が始まつて・ス
ルト彼の人の癖で直に醉つて仕舞つて、マア馬鹿〳〵しいぢやアありませんこの先生に取持
つ代りゝ乃公の云ふ事を聞けと言つて口說始めたんで御坐いますヨ 安「コレア怪からん奴
だ、如何だい亭主「でげすから 彼れは先生いけませぬ、先生は彼奴を御贔負よなをイま
すが全体宜く無イ 奴で、サウ言ふ料見違ひナ奴でげすからナア・一体先生が餘り贔負にな
さり過ると思つて居ましたが、どうも御新造に取持たうと言ふ者・言はゞ仲人が一旦自分
の言ふ事を聞かして夫のら縁付げると、ソンナ事がありませうか・たから彼奴はモウお置
きなさらん方が好い・お爲に成ませぬからナア、彼男が來てから私共は彼男に使れる樣
ナ譯で、先生モウ彼男いお廢し遊ばした方が宜う御坐い升ヨ 安「お隅・夫から如何したイ
隅「それで「私が馬鹿な事をお云ひてないと云ふとゝそんな詰らんことを云はんでも好いぢ
やア無いかと云ひますから、好いぢやア無いかつてお前さんの云ふ事を聞いた上で先生の
處へ妾に行けるか行ないか考へて御覽、富さん醉ふにも程がある串戲は大概におしよと云
つて居りましたら、仕舞にを甚く醉つて來まして短いのを拔いて云ふ事を聞かあければ是
だと嚇し始めましたから私も胡然として大概よをしなさいお前い腕づくで强淫をする積
りの、馬鹿な事をする可畏い人だイヤだよと言つて行かうとするとサウハ遣らぬと私の
裙を押へて離さない處へお兼さんやお力さんが出て參りまして取押へ拍子よお兼さんが指
に怪我をするやら 金どんも親指に怪我をしまして漸くの事で宥めて刃物を抉取ッたんで
御坐いますが、全く先生の處から來たのなら明日の朝先生が入ッしやるであらう・其上當
人も酒が酷めるたらうふからマア縛ッて置くが好いと言ふので縛ッて置きました

第七十六席

安「是ア何うも怪しからん、白刃を振ッて威嚇すなぞとは・ニー定藏 定「何うも怪しから
ん彼奴はいけません・ 彼奴一体さう云ふ質の奴でげす・何うも怪しからん拔刀で口說な
んで貴ゝ詰ん譯けでげすナア・たから先生モウ彼奴いお廢しなずつて家に置ぬ方が宜し
ゐい何もサウ云ふ・・・ 安「お隅貴樣ナニか主人に話しをして來たか 隅「ハイ何とも言ひ
ませんけをどもお力さんに賴んで置きまして・何しろ先生の御樣子を聞かなけをゞ分らな
い・誠に恥かしいことで御座い升けれども先生の處へ行ッて御樣子を聞いて・サウシテ先
生に宥めて戴き度いと思ッて出て參りました 安「左樣か・雪の夜ではあるし・是から行く
と言ッても大變ダが・アンナ馬鹿にからかいないが好いヨ 住「ナニもう翌朝でも好う御坐
いますけれども・妾い是このら一人で歸るのい辛くッて・參る時い一生懸命で來ましたが・
歸るとなると可畏くッていけませんがドウかお邪魔樣でも今夜一晩泊めて下さる譯にいい
きますまいか 安「ソれい好い・泊ッて往くなら・・・マア貞藏 貞「是い生先御恐悦でげす

なア・お隅さんの方から泊ッて好いかと云ふのハ、是ァ自然のお授かりでげすナ　安「詰らん疑念を受けてトンダ災難と思ッたが、此方お授りな事があるものの・のうお隅・だゞ貴様には何うも分らぬことが一つある・と云ふのハ惣次郎の女房に成ッて何う云ふ間違ひかハ知らんけれども・安田一角が惣次郎を殺害致ッたと云ふので・私を夫の讐と猾ッて花車重吉を頼んで何處迄も討たんけれバならぬと云ッて、一頻り私を狙ッて居ると云ふ事を慥に人を以て聞いた・サウ云ふ手前が心で居たものが又た此處に來て一角の女房に成らうとは些と受取れぬぢや無い・ノウ貞藏　隅「イヽヱ・ねエ貞藏さん考へて御覽羽生村に居るうちは義理だから讐を討とか何とか云ふたけども・ナニ其ねエ元と妾が麹屋に奉公をして居て・アノ時分枕付ではありませんが彼の名主に受出されて行ッて、妾・同樣・表向の廣めをした譯でも無し、ホンの半年か一年亭主よした丈で御坐ゝ升のら、母親の前や村の人や角紙取の前で義理を立ッて讐を討つと云ひハ云ひましたが、能く考へてみた處が貴郎が急度殺したと云ふことが分りもしない、斯んな的も無いのに讐を討つと云ッたッても仕方がない譯だから、寧そ讐討と云ふ事ハ廢めて仕舞はう・それにしてハ何時までも便ことしても居られませんから・思ひ切ッて暇を貰ッて出たので御坐いますから・モウ今に成れば些とも其樣な心は有りやァ仕ません・ネエ貞藏さん　定「成程是ァ眞實でげせう・先生ハ人を殺す樣な方で無いし　只お前さんの執心が有ッた處から角紙取と喧嘩、あれァ一体角撲の方がいけないヨ・變ふ力が有ッてねエ・ア

レ丈ハ先生ひどく不粋になりますナ　安「詰らん疑念を受けてトンダ災難と思ッたが・此方に居ては面倒だから暫く常陸へ行ッて居たんだが・・・手前全くか　隅「眞實で御坐い升のら疑りを晴して・一獻戴きませう　安「手前飲るか　隅「ハイ・何だか寒くッていけません跣足で雪の中を駈けて來たもんですから足が氷の樣に成ッて居ますもの　安「ウーン中と飲めるの樣に成ッたのう　隅「動をして居て仕方あーに相手をするので上りませたよ　安「フン妙だのう定藏・定「コレはく　お住さん貴婦御酒を飲りませかお酌を致しませう　住「ハイ有難う御坐います。と大杯に受けたのをグッイと飲んで　隅「貴郎何だか眞面目でいけないから妾がお酌を致しませう。と横目でジッと一角の顔を見ながら酌をする、一角は固より惚れて居る女が酌をして呉れるから快く大杯で二三杯傾けると・下地の有ッた處で御坐りますからグッスリ酔が廻ッて來ます・定藏も大變酩酊致しまして　定「私モウ大層戴きました・お住さん私ハ御免を蒙りまして・長く斯う云ふ處ゝ居るべきものでありませんから・左樣なら先生御機嫌能う　隅「マァお待ちなさいヨ　先生がお酔なすつたから・・・・オヤ〳〵次の方に床が取つてありますねエ　定「イヽヱ　私　床を取つて置いて・先生がグーつと召上つて仕舞うと直に御寢と云ふ都合よして置きました・エー誠に有難う　隅「ヂャア先生一寸定藏さんを罪かして來ますから、御床の中に居てネエ・寐て仕舞つていいけませんヨ　安「ナニ定藏あとい寐て置けヨ　隅「イヽヱさうで有りません、ヒョつとして貴郎が妾の樣な者でも呼

んで下さいますと・調ひて下からと云ってアこ云ふ人よ胡麻を摺られると堪りませんから、ネエ安「ナニ心配せんでも好い・チャア乃公・此處にナニ寐やアせんヨ・オー酔つた・定藏住が送つて遣るとヨ定「イヤ・是は恐を入ります、ヂャア、先生御機嫌能う・お住さん能う御坐い升 住「イヽ・能くあいロ、ソラ〳〵危ない・何處へ・彼方が御臺所かへ。と蹌跟る定藏の手を取って臺所の折廻つた處の杉戸を明けると三疊の部屋が御坐ります 住「サ定藏さん此處かへ・オヤ〳〵お床が伸へてあるの 定「イ・エ私の床は參つてから敷つはあしでイのも揚たことを無いから・メつと遣ると斯う潜り込むので・ヘエ有難う 住「恐ろしい堅さうあ夜具ですねエ 定「エーナニ薄つぺらでげすが此上へ蒲團を掛けます・寒けれア富五郎つが有升から其れを掛けても好いので・ヘエ有難う 住「サア仰向よふ成り能く掛けて上るから 定「是は恐れ入りますヘエ恐れ入ります・御新造に掛て戴いて勿体至極も無い 住「サ掛けますヨ・寒いから額までスつカリ掛げますヨ・さう見たり何かすると間が悪いワネ・サ襟の處を 定「アヽ有難う 住「何も重たいねエ 定「ヘ・エ有難う暖かでげす 住「何だク寒さうだこと・何が重い物を裾の方に押つ付ると暖かいから」と云ふので臺所を捜すと醤油樽があ・丁度昨日取つたばかりの重い奴を提げて來て裾の方よ載せ・澤菴石と石の七輪ナ小夜具の袖よ載せると直「アヽ有難う大層暖かで・些と重たい位でげす」と云ッたが是い成程重たい譯・石の七輪や澤菴石や醤油樽が載ッて居りますから・當人い押付られる樣あ心

地定「ヘエ有難う暖かでげす。と云ッたきりグー〳〵と好い心持に寢付きました

第七十七 寐

お住いソット奥の樣子を見ると一角が蹌跟ながら四疊半の床の上に横に成ッた樣子で御坐い升から、ソット中仕切の襖を鎖て臺所の杉戸をぴめ男部屋の杉戸を靜よ鎖つて懷中ものら出して扱いたのい當五郎を殺害して鮮血に染ッたなりの匕首此定藏があつてい警討ちの妨をする一人だから先づ定藏から殺害やうと云ふので仰向に寐て居る定藏の口の處へドソト腰を掛けあから力任せに咽喉を突きまりたから定「ワーつ。と云たが搔巻と蒲團が掛つて居り升のら苦む聲が口籠つて外へ漏ませぬ、一刻り到ると足をバタ〳〵〳〵と遣つたきり定藏い呼吸が絶ました、お住いホつと息を吐て搔巻の袖で匕首の鮮血を拭つて鞘に納め、ソつト杉戸を明て臺所へ來て柄杓で水をグつと呑みハッハッと云ふ息づかひ、モウ是で二人の人を殺しました・おれども夫の仇を討たうと云ふ一心で御坐りますから・顔色の變つたのを見せまいと一角の寢床へッつト來て顔を横に致まして 住「先生〳〵モウお寢みなすつたの・ 安「ウーン定藏い寐たが 住「ハイ能く寐ました・大層酔ましてねエ 安「酔ても好いからあんな奴に搆ふナ・寐ろヨ 住「寐ろつて夜具が有ません妾い食客で御坐い升ら此處よ坐つて居ますヨ 安「そんあ詰らぬ遠慮よい及ぢぬ・全く疑念が晴れて乃公の女房に成る氣なら・眞實可愛いと思ふから手前よ樂をさして眞實を盡すぞ 住「誠に有難いと・

勿体ない。どもそんなら此掻巻の袖の方から少し計り這入まえて　安「イヤ少し計りで無くつてたんぬ　入れ　佳「それぢやァ御免なさいまし」と夜着の袖をはねて・懐中から出した匕首を蒲団の　よ挿んで・足を踏んで鞘を掰ひながら　住「ぢやァ御免遊ばせ横よなりますから　安「サア通入れと・一角が夜着の袖を自ら揚る處を　住「亭主の讐。と死者狂ひに突掛ふ　お話し二つに別れまして麹屋でハ更に斯様な事ハ存じません・曉方に成つてお住が居ない處から家中捜しても居ない・六疊の小間が血だらけよ成つて居るから挨拶をハねると富五郎が非業な死に様・傍の處に書置が二通あつて之にお住が名が書て有から・亭主は驚きまして直に之を開いて讀で見ると・富五郎の白狀よ依つて夫の讐ハ一角と定まり・女おがらも富五郎ハ容易く仕止たから直よ一角の隠れ家廓遊庵へ踏込んで・首尾よく往けバ立歸つて參りますが・女の細腕・若し返り討に成ましたときは羽生村へ話しをして此書置を遣り又關取へもお便り成すつて惣吉成人の後ち關取を頼んで旦那と妾の讐を討して下さい・證據は富五郎の白狀よ依つて手引をした者ば富五郎[illegible]た・それ故よ今曉廓遊庵に忍び入り升・永とお世話様に成りましたお住[illegible]の體まで書殘して有からそれッと云ふので麹屋の亭主ば大勢の人を頼んで[illegible]廓遊庵に參つたのハ丁度夜の曉方・參つて見ると戸が半ハ明て居り升・何事か分りません座敷には酒肴が散かつて居り・四疊半の部屋に來て見ると情けない哉お住は返り討よ逢て非業な死に様　主「ア・氣の毒なこと可憐さうに・デモ女一人で往のハ實に不覺で有ッたモウ今更何も仕方が無が一角は、と云ふと一角ば此處を遁れて行衛知れず、二疊の部屋を明て見ると澤庵石だの醤油樽だの七輪の載て有る夜具の下に死ぬ居る若が一人御坐り升から、是から直に麹屋から惣吉證據が有て讐討を仕様と思つて返り撃に成つたと云ふことを訴なり、直にお住の書置を羽生村へ持せて遣りまーた時には、母も惣吉も多助も「ア、左様とば知ずよ犬畜生の様な恩知ずの女と惡んだハ惡かつた、ア、云ふ愛想盡しを云つたのも全く讐が討たいばつかりでお住が家を出たので有つたか、可憐さうなことをーたがお住が心配して命を棄てたばかりに讐は一角と定まり・先づ富五郎ハ討留たが一角の爲めよ返り撃に成つて死んだと云へば惡いは一角早く討度と思ひまするが何しろ年を取た母と子供の惣吉ばかりで御坐い升から關取を頼でと、モ名主役も勤まりませんかラ作右衛門と云ふ人ば名主役を預けて置き・花車重吉が上總の東金の角力に往たと云ふことを聞きましたかラ、直に其方に行うと云ふ沙で旅立の支度を致し、永く羽生村の名主を致して居りましたのラ金ハ隨分御坐り升、之を胴巻に入れたり襦袢の襟に縫附たり種とに致して旅の用意を致ス升、其内に荷拵へが出來ると之を作右衛門の藏へ運んで預げると云ふ譯で、只今迄名主を勤めて盛んで有つたのがバッタリ火の消た様で御坐り升

母「多助ヤ　多「ヘエ　母「作右衛門が處へ行ッて來たかい　多「ヘエ行ッて參りました、藏の方にや預かる者が有から心配しなへが好エ、何時でも歸ッたら直くに出すばいて、藏の下は濕るから濕なへ高エ處に上て置ばいと云てねエ、作右衛門どんも舊來の訓染で、はァ何うか留め度と思ふが、讐を討に行くてエのだから留められねへッて名殘イ惜がつてるでがんす、村の者もねへ皆御恩に成つたゞから渡口まで送り度と云ってますが、貴嬢さう云ふから年イ取つた者ァ來ないて好へと云つて置ましたが、私或は戸頭まで送り度と思つて支度ウしました　母「汝も送らなへて好いから若エ者を留めて呉んろよ、汝が送ると若エ者も義理だから戸頭まで送りばいと云つて來るた、さうすりやァ送られると送られる程名殘イ惜いから、汝も送らなへでも好いヨ　多「だけンともはァー村の者は兎も角も私はコレ十四歳の時から御厄介に成つて居りまして、お前さんのお蔭でコレ種々覺エタリ、此頃ちやァはァ手紙の一本位エ書ける樣に成ッたのァ前の旦那の御厄介でがんすから、お家が斯う成ッて遠い處へ行てエあッたら私も附て行なイばなんねへが、婆樣ァ擂梅が悪う御坐ベまして見棄ちやァなんなへと云ぬから、貴嬢のお心エ任して送りは仕ねへか責て戸頭まで送り度エと思ッて居ります、塚前の彌右衛門どんは死んだか如何か知んねへが、通り道から少し這入ばかりだから一寸り塚前へも寄だが好い　母「ろれも如何するかも知んなへが汝は送らなへが好いヨ　多「でも戸頭まで送るばいと思ッて居り升　母「送らんで好いと云ふに何故さうだのなァ・・汝ァ死んだ爺樣の時分から隨分世話も燒したが家の用も能働いたから・何ぞ呉度エと思けれども何にも無へだ・是ァ惣次郎が居る時分より觀音不觀音に着た紋附だ・外も是から己ァ家が無なれば一人前の百姓よ成だから・觀音不觀音よやァ斯う云ふ物も入るから此紋附イ一つ呉れゞいと云ふ譯だヨ・夫から金も澤山呉れ度エが妙に金が七兩あるだ・是ァ少し譯があッて已が手許にあるだから是ヲ汝が呉れゞい・此紋縞ァ餘り良くなへか丹精して綿イかけて織した細縞で・チョク〳〵阿彌陀樣へ詣りユ往ッたり寺參りに着て往ッた若物だから・是ヲ汝がに呉れるから仕立直して時と出して着るが好ニ三日でも旅と云ふ譯が有るが子供ヲ伴れて年寄が讐討に行たから一角の行衛が知んなへゞ何時歸つて來るか知ンなへ・長エ旅で死なへとも云はれなへ・是ァ已が紀念物だから已が無へ後も時〻之ヲ着て已が上逢ふ心持で永く着て呉メろ・ロ　多「ハイ私戸頭まで送るばいと思つたよ・何うも碁品いりません・紀念物・・・紀念物なんて心細エことと云ふずにノ貴樣も惣吉つあんも達者で歸ッてモウ一度各主役を惣吉つァんが勤めなへゞ私の顏が立ませんからドウカ達者で歸ッてお呉ンなさへヨ・惣吉つァん今迄とァ違ふから母樣に世話ァ燒せねエ樣よ母樣ァ大事にしナへゞナんねへヨ・惣吉つァんイーカへ今までの樣ナダク云ちやァナりませんヨ・イヽカへ・・・何うか私も戸頭まで母「送らんで好エと云ふに・汝が送るてエゞ皆若エ者も送りたがるカラ・・・誰カ來たヂやナへい　作「ヘエ御免多「ヤァ作右衛門どんが母「

ア、方此へ御這入りナさへ、作「誠に何うも、魂消て、何う云ふ譯で急に立つことにあッたか
村の者も何うか留め度と云かヲ、馬鹿ア云ふナ留められるもンカ、今度ア見物遊山でな
へ驛討に行くだと云ふと、成程それぢやア留られねへがマア名殘イ惜いッてね、若エ者ハ
皆思にあッてるだから心配ぶッて居り升、留守中へ役あア立たあいがお歸りまでア慣に、
皆物ハ皆藏へ入れて置ましたが、何うかマア早く歸ッてお出なさる樣に願エ度もンで 母「
ハイお前方も蓄い聊染でがんしたけンども今度が別段になり升、ハイ有難う御坐へ升……
多助や誰か若エ者が大勢來たッ 多「ヤア兼のサア此方へ這入れ、オ、太七郎此方へ 太「ハ
イ有難う……誠よまア何うも明日立つだッて・魂消て來たでがんす、何うもコレ名殘イ惜
くッて滾日まで送るど云ふ者が澤山御坐へ升 母「アレヤマア送らあへでも好エロ、用が多
へよ 太「おに用ハ無へだから皆送り度と思エまえて・名殘イ惜いか寒い時分だから大事に
してねエ 母「ハイ有難う・又既ひの餅い呉たッて氣の毒なのう、何うか婆樣ア大事にして
太「へエ婆アも何うかお目に掛り度と云て居り升 母「……オー誰だいサア此方へ這入り
甲「へエ誠よハアコレ魂消まして、何うかマア留め度と云つたら留めていなんナへつて叱
かれた、隨分道中を大事に 九「へエ御免 母「誠だい九「九 八郎で、誠に何うも薩張り心得
ませんて、急にお立だと云ふとッて御名殘イ惜う御坐へ升 母「……オヤ〳〵上の婆樣・貴
婆出て來あへて好エにロ 婆「ハイ御免おさへ・誠にマア何うも只お名殘イ惜いから・何う

ア碌に見えない眼だが一寸りお顏を見てエと思ッてお暇乞に參りました、明日立つだッて
、何だかアッケなへよッとッて、私の嫁なんざア泣へてゐい居るだ、隨分大事にあへ 母「
ハイ有難う御座へ舛、お前も隨分大事にして、毎も丈夫で能くねエ…… 乙「へエ誠に何う
もお力落しでがんす 丙「オイ〳〵何だッてお力落しあんて云ふンだ 乙「デモ飛だ事だと言
ふぢやア無へか 丙「馬鹿言へ、驛討にれ出なさルのふれ力落しと云奴があるか 乙「へエ誠
にうれハアれ目出度へとッて 丙「コレ〳〵れ目出度でなへ 乙「何んでも好いぢやア無へ
か。と云ふ騷ぎで村中餅を搗ましたり蕎麥を打ッたり致して一同出立を祝そると云ふ惣吉
驛討に出立の處は一寸一息

第七十九席

偖て時ハ寛政十一年十二月十四日の朝早く起きふして旅仕度を致し升なれども三代も續き
ました名主役縱令小村でも村方を離れて知らぬ他國へ參りますものは、快く無いもので
殊には年を取りました惣右衛門の未亡人が十歳になる惣吉と云ふ子供の手を曳て驛討の旅
立でありますから村方一同も止めるとも出來ず餘波を惜んで居ります皆小前の者ーがソロ
〳〵と大勢川端まで送ッて參りまそ 母「サア作右衛門さん是れて別れませうヨ何處まで送
ッても同じこッたから是で 作「ダけンども船へ乘るまで送り申度と皆コウ云ッて居る 母「
ダれンども即ッて船に私乘て皆が土手の處ゐいかいてと皆が立て居ると私快くねへ名

殘惜くつて皆が昨宵かゝ止めゞれるのてチ誠ふ立度御座へませんヨ何卒お前が差圖して歸してた呉なさいましヨ　作「ハイ夫ぢやアまア皆な是れにて私別れとしませうヨ……エー送れば送られる程ゞ新造ハ心持ちイ惡いてエからヨウ　村方の者　左樣ならまア隨分お大事に　村方の者「左樣なら御大事に早くお歸りなさいましヨ　作「何卒私早くお歸りを私待申ますヨ　母「をアよ多助とうしたもンだ汝其所に立つて居るから皆な立て居べエヂヤア糸へか汝かゞ先き歸ろと言ふふ　多「已れ丈は戸頭まで送る　母「送らねへでも宜エてエに多「送ら糸へでも宜エたつて村の者と已れとハ違ふ已れは貴媼十四の時から側に居るので何所まで送つても村の者ハ兎や角言ふ氣遣ねへから送り申ますヨ　母「ア、言ふ馬鹿野郎だもの汝が送ると言へば皆が送ると言ふから汝歸れてエに昨宵云ッたと分らねエか　多「へエ……チヤアお別れ申ます……チヤア御機嫌よく行ておいでなせへ……惣吉樣道中て阿母樣に世話やかしてハ往けませんヨ今までハ草臥れば多助が脊負て上たがモウ脊負て上る者ハねへよエ、氣の毒でも貴方歩行て參りゝなへばならんだ永旅だから我儘して阿母樣に心配かけてはなりませんヨ大事ふ行ッておいでなせへまーヨ　惣「ウーン……大丈夫だヨ多助も丈夫で　多「此樣別れの辛いとア今迄ねへヂ　母「別れイ辛エたッてお死ぬヂヤアなし關坂がに逢ッて讐イ討て目出度歸ッて來たゝエ、チヤア糸へか　多「それまア樂しみにするだが貴媼昨宵も人間は老少不定だなんて云はれると心持よくねへからヂ

母「是れで別れませうヨ　多「左樣なら氣イ付てネ初めから餘りたんと歩行かねへようにしてネエー早く泊る樣よしなければなンねへ寒い時分だから遲く立て早く宿へ着かなけンば往けませんぞ……アゝ押ねへでもエゝ危險いだ前ハ川ヂヤアねへか此處へ打箱ッだらどうする……何卒大事に行て來てお呉んなせへまヨ　惣「ヨ、……ナニ笑ふだ餘波イ惜いから蹴のけるにナンだ馬鹿野郎情合のねへ奴だ笑やアがッて……アレまア肥料桶荷擔出しやアがッた桶ヲかたせ……アこ桶ヲ下して挨拶して居るが……アゝ兼だ新田の兼だ御厄介に成ッた男だからナアあの男も……惣吉樣幼少だけンども怜悧だから矢張餘汲イ惜がッて昨宵も坊は行のは厭だけンとも阿母樣が行から詮方ねへ行だッて得心ゑたが後を振返り〳〵行く……見ろヨ……アゝ誰か大エ馬ア引出ゑやアがッて馬ハ蔭で見ねなくおッた……馬を田の畦へ押付けろヤ……アレまア大エ庚申塚が建たな彼れア昔しからある石だがあんなもの建たけりやアいゝに庚申塚が有て見えやアしねへ庚申塚取除せ　村方の者「そんなことが出來ヨかへ。と伸上り〳〵見送ッて暇を吉る者はドロ〳〵歸へる此方等は跡よ心が引されるこゝら振許り〳〵漸〳〵のことで船渡を越して水街道こゝら戸頭へさして行き升、すると其翌年にありまして花車重吉と云ふ關取ハ行逆ひよありましたとで毎年春に成ると年始に參り升が惣次郎れ墓詣をしたいと出て來ましたが取急ぎ水街道の麹屋へも寄らず直に菩提所へ參ゞまして和尚樣に逢ふと是迄〳〵と云ひッイ話も長く成りまいたが墓場に香花を澤山ゐけ

て花車「アッお隅様情けないとこふなつた蓋を打あれば私は一ト言話をして呉れればお前さんにこんな難儀もさせないよ今云ふは愚痴だが。ダガ能くお前が死で呉れた許りて譬と安田一角と云ふとが分りましたから惣吉様よ助太刀して屹度花車がお前さんの恨を晴し升ァ、いれ違ひよなり上總の東金へ行きなすつたか嘸情けないとたが私はこれのら跡追かけてお目よ掛り何處よ隠れ住ふとも草を分ても引摺り出して屹度撃を打たせ升から。と活て居る者よ物を云ふ樣に分らぬとを繰返し、大きよ遲またと歸らうとするとバラ〳〵降出して來て外よ行く處もないから水術道の麹屋へ行からうとそるとと和尚樣と、和尚「少ち破まては居るかこれをさして、穿惡からうがこの下駄をと云ふので、下駄と傘を借りてこれから近道を杉山れ間の處ら濕れを通ッて田を廻ッてコウ東れ方へ付いて行くと大きな庚申墳が建て在て後にて赤松がコウ四五本ありまして前にて沼か有り其の邊りよ枯れ蘆か生へて居り升、ズート見渡せ許りの田畑、淋敷い處へバラ〳〵降ッかけて來る中をノソリ〳〵やッて來ると突然よ茂林からバラ〳〵と出て武士が皆面部を包み端折を高くして小長い大小を落し差しよ去てッカ〳〵と來て物をも云てそ花車の片方の手を一人が押へる一人は前から胸倉を押へた一人は背後から羽翼責よ組付うとしたが闘取て下駄を穿て居て大きな姿で下駄穿だから羽翼責處でいない漸く腰の處へ小さい武士が組付きました

第八十席

花車い惚りしたか左の手に傘を持て居り右の手い明て居りあかしたが押へ付られ困りまッた花車「ナンだい何をなさる 武士「我こい涙人者で食方に困る、天下の力士と見かけて御願み申が路用を拜借〳〵たい 花「路用たッてあんた私いお前さん角力取で金も何も有いしないが、困り升ョそんなとして金持と見たい眼違で金もなまもない角力取だョ 武「金がおけれバ氣の毒だが帶して居る胴金から煙草入から身ぐるみ脱で行て貰ひ度い 花「そんなと云て困り升ョ身幅の廣いこんな着物を持て行たッて役よ立いしません煙草入だッてこんな大きな物持て行たッて提られやァせん賣たッて錢にもならぬよ困り升ョ然ウ胴突てい困るョ〳〵。と云ひながら段と花車い後へ下ると後の見上る樣な庚申塚の處へコウ寄りかゝり前の奴い二人で一人い右の腕を押へ一人い胸倉を取て押へる後の奴い苦い庚申塚と闘取の間よ挾まれ。後ろの武士「モット前よと云ても同類の名を云ふとカ出來ない此の二人ハ安田一角の廻〳〵者花車を素裸體にして あぶり殺しよ致す樣にすれば是れ丈の手富を遣 と云ふとに疾より頼まれて居る處出會て恰ど幸ひイ、正月を仕樣と云ふ强慾非道の武士二人漸と取押たが花車い怜俐ものだから此奴等い惡くしたら廻し者だらうと思ひ 花「まアそんなに押へられてい困り升ネ……待なさい上げ升ョ達てと云へは上げ升ョ〳〵 武「見ぬと云へバ許さぬ涙人の身の上切取强盜い武士は習ひ云ひ出してい跡へ引ぬのらお氣の毒から切り刻んでもお前の物い殘らず剝ぐせ盡れぬとと諦めて出しな、裸體いお前の商賣だ

裸體で行のんなんでもないワ花「だから上るけれども待なさいヨ。と左の手に持て居た傘をポンと投出し前のら胸倉を取て押へて居る一人の帯を押へて 花「お前さんさう胸倉を押ゑて居てハ私ハ着物を脱ぐことが出來ぬから胸倉を緩めて、裸體に成り升ヨ私も災難ぢやア寒くはあいのら私ヨ裸體に成れてエベ成り升から胸倉を押へて居てハ脱ませんから緩めて。前の奴ハ迂濶殺める處を見て 花「ナニをなさる。と云ひながら 一人の奴ハ帯を取てポンと投ると庚申塚を飛び越して後の沼の中へポかンと薄氷の張た處泥の中へ這入たすると右の手を押へた奴ハ驚きバラ〳〵逃げ出した 花「惡い奴ぢやあんな村境の處へ出やアがッて追剝をしやアがッて惡い奴ぢやこんだ此邊アウロ〳〵しやアがると打殺すゾ……イヤ後に誰れか居やアがるナ此男組付て居やアがッたか 武「誠ヨ何うも恐入た 花「誠にも糞もいらんこれ手前の樣な男が出ると村の者が難儀するから此彼爲なンか 武「爲る處でハ御坐ら如誠に何うも 花「惡いとするナ是からハ爲あいか何うだ此野郎。と押付ると 武「ウーン。と息が止ッた 花「野郎死にやアがッたがくたばッたの野郎死だカ……アノ死よやアがッた馬鹿な男だと捻り倒すと部陌の御話したが鼻血が出ました 花「みッともねへ面たナア此男も投込で遣れ。と襟髪を取て沼へ投り込み傘を持てノソリ〳〵氷街道の鍋屋へ歸ると云ふ角力取と云ふ者ハ强膽なもので扨お話ハ二つに分れて此方等ハ惣吉の手[illegible]漸このとて宿屋へ着ましたなれども心配を致しました揚句で母親がギリ〳〵癇が起りまして寸

白の樣で宿屋を頼んでも近邊に良い醫師も御坐いませんから思ふ樣に癒りませんマア全快までハと云ふので逗留致して居りました其内ハ追こと病氣も癒る容子なれども時こキヤ〳〵痛み固い物ハ食れませんのらお粥を拵へてとれを食ひ其うち年も果て正月となり恰ど元日ゼ元日ハ霜て居てハ年の始め緣喜が悪いと田舍の人ハ緣喜を祝ッたもれで身体が悪いくせヨ耐念して惣吉の手を引て出立致し小金原へ掛り塚前村の知己の處へ寄ッて病氣の間だ厄介に成らうど小金の原から三里許り參ると大きな觀音堂が御坐い升が爽ガバラ〳〵降出して來て子供に婆樣で道ハ捗取ませんトップリ日ハ暮るすると頻に痛く成りました 惣吉「母樣また痛いかへ 母「ア、痛いア、……アノ御醫師樣から貰ッたお樂ハ小せへ手包の中へ入れて置たが彼處ニ上て置たが該品汝持て來たか 惣「該品已れ置て來た 母「困るナ「子供だア母樣擂梅惡いだのら藥大事だのらてエ考へもおへで惣だッて己れモウ宜いてエおらよかんべエと思ッて何も持て來なかッた 母「困ッたナアア〻痛い〳〵 惣 母樣雪降て來た樣だのら此處に居ると冷てへから此の觀音樣の御堂ヨ這入て些と己れおッぺさう 母「さうだナア押て呉れ 惣「アイ…… 母「ヨシ大ゲへ觀音樣のお堂だ……南無大慈大悲の觀世音菩薩樣少こ此處を拜借しまして此處で少し養生致し升……さア 惣吉「力一エペ押ヨ 惣「母樣此處ナ處かへ 母「モッどもッち 惣「もッと擂梅が惡く成ると困るヨウ氣丈してヨウ、多助爺ヤアを連て來ると宜かッた。と可愛らしい紅葉の樣な手を出して母の看病

をして此處を押と云はれて押ても力が足りません母「アヽ痛い〳〵さう撫てゐ駄目たから拳固で力一ぺエおつぺせヨげんこつてよアヽ痛い〳〵

第八十一席

女「何だか大層うゐる聲が聞えるが……貴方かへ　母「へエ旅の者で御坐へ升が道中で盥梅が惡くゐりましてネ快くゐへうち歩行て來ましたから原中エ掛ッて寸白が起ッて痛う御坐へ升から觀音樣の御堂をお借りやゐまえた　女「夫れハお困りだらうお待ち……どれ〳〵此方へ這入ゐさい。と觀音堂の木連格子を明ると疊が四疊敷て御坐い升其奥ハ板の間ま成ッて居り升年齢五十八九にも成りませう色白の肥満ッた尼樣鼠木綿の無地の衣を着て尼「さア此方へお這入さア〳〵擦ッて上ませう可憐さうに此子が小さい手で押ても擦ッても利ハしない……チヽ酷く差込で來る樣た　母「有難う御坐へ升痛くッて堪られへでネ宿屋へ一寸泊りましたゞ癒られへて尼「コウ苦むに子供を連て何處まで……ナニ塚前まで是から三里許りで近くハない……薬ハお持かへ　母「ハイ薬ハ有ッたが惣吉がに云付て置たら慌てて包の中へ入て貰たのを道て參りまして　尼「薬が無くッてハ困ッたもの斯う云ふ時ハ苦い物で無けれゞ往けゐいダラスケが宜いが……今此の先にネーあの榎の出て居る家が有る彼處から左の方へ搆はゞ曲ッて行と來が五六軒有る其處の前に丸太が立て家根の上に葭簀が掛ッて居て其處に招牌か出て有ッたヨ癪だの寸白疝氣抔ハ利く何とか云ふ丸薬で黒丸子の樣ゐもので苦い薬でダラスケみたいゐものゞ癪ハ能く利くヨ……お前ネー知れまいかネー行て買て來ゐい安い薬たが利く薬たが　先刻通ッた時復があッて一寸休む處が有て掛茶屋でハゐいが　なれから曲ッて一町許り行と四五軒家が有るが何うか行て買て來て　私が行て上げ度が手が放さをゐいから　惣吉「有難う　尼「茲にお錢が有るから是を持て行ておいで心配せずに　惣「ヂャア母樣私が薬買て來るから　母「能くお聞ヤて早く行て來うヨ　惣「ハイ御出家樣お願エヤ升ヨ　尼「アイヨ心配せずハ行ておいて可哀想ハ年もいかゐに旅たからヲロ〳〵ゑて涙浮で　イヽかへ知れたかへ先刻通ッた　四五町先の榎から左に曲るのたよ　惣「アイ。とヲロ〳〵しゐから惣吉ハ年ハ十歳たが親孝心で發明ゐ性質急いで降中を四五町先を見當ゑして參りました、先刻通りました處ハ覺えて居りまして榎の所から曲ると成程四五軒家が有る其處へ來て　惣「此邊に癩に利く薬でダラスケと云ふ樣ゐ薬ハ何處て賣て居り升か。と聞と　男「此邊に薬を賣る處ハない小金まで行なけれゞない　惣「小金と云ふのハ　男「小金迄ハ子供で是からハ迎も行られゐい其うちハ暗く成ッて原中て犬でも出をゞ何うする、早くお歸り。と云ハれ心細いから惣吉は歸ッて觀音堂へ駈上ッて見ると情けゐいのお母親ハ咽喉を二タ卷程丸ぐけて絞られて虚空を摑んで死で居る背負た物も亦母が特て居た多分の金も引浚ッて彼の尼が逃ました　惣「アヽ阿母樣何うゑて絞殺されたかネー。と頸ハ縛り付けて有る丸ぐけを慄へゐがら解いて居る處へ通り掛

ッた者い藤心村の觀音寺の和尚道心とヤさして年經てい居り升が村方でい用ひられる和尚
樣隣村に法事が有ッて男を壹人連て歸りがけ、和尚「急がんデャア往かん」男「何んだのヒ
イ〳〵と云ふ聲が聞える樣に思ふだ」和「ヒイ〳〵と」男「恐怖へと思ッて、此處ハネ化物が
出る處だからチー」和「化氣おぞい出やせん」男「けきども原中でヒイ〳〵と云ふ聲が訝しの
んべェ」和「何も出やアしおい」男「あれ戯言ヂャアねへ段〳〵……アレ〳〵」和「彼れハ觀音
樣の御堂だ彼處に人が居るのでハないか……暗くッて見えハせん提灯出しお、と提灯
を引たくッて和尚樣が來て見ると縊り殺された母に縋り付て泣て居る」和「何う云ふ譯か、
と聞と泣て許り居て頓と分りません漸くだまして聞と是れ〳〵と云ふ」和「飛だとだ・と直
に共の男を走らして村方へ知らせ升と百姓が二三人來て死體と共に惣吉を縣心村の觀音寺
へ連て來て段と聞と便る處も無い實に哀れの身の上で有升ゝら」和「誠に因緣の惡いので親
の菩提の爲め私が丹精して遣るから讐を討つ抔と云ふとは思ひぬが宜い私の弟子ゑ成つて
母親や兄さんの爲に追善共養を吊ふが宜い、と此和尚が丹精して漸く弟子となり頭髮を剃
とほら惣吉が宗觀と名を替へて觀音寺に居る處ゝら討らすも讐の樣子が知れると云ふお長
いお話し一寸一息吐さまーて

第八十二席

孫一席申上げ升久敷休み居りました累ノ淵のお咄を私しも昨冬ふり咽喉加答兒でサッパリ

音聲か出ませんから寄席を休む樣ナ譯で、あれとも此程は大分咽喉加答兒の樣い宜う御坐
い升がまた冒寒き冒寒聲に成りまして、冒寒聲と咽喉加答兒とが掛持を致して居り升ると
いふ譯でも御坐りませんが何時までもお咄を致さすゑも居られませんから此程い漸く少
く宜敷う御坐い升から申殘りの處を一席御聞に入れ升さて、お咄が二箇に分れまして恰と時
は享和の二年七月廿一日の事で御坐い升る下總の松戸の近傍に戸ケ崎村と申す處が御坐い
ますして其處に小僧辨天と云が有升るが如何いふ譯て小僧辨天と申升か敢て辨天さまが矮小
と云ふ譯でもあ〳〵辨天さまが使ひゑ往く譯でもあいが小僧辨天と申ます、境内い樹木が繁
茂致しまふてとんと掃除抔を致した事いおく破れ切れた辨天堂の樣い朽て間ゝら草ゞ生て
居り堂の傍側にい落葉で埋沈た古井が有り洗手鉢の屋根ハ破壞れて向ふの方に飛んで居り
升石塚い苔の花が咲て横ッ倒しゑ成て居り升る程の處其少ゑ手前ゑ葭簀張が有て、住居で
い有ません店の端にい獸蕗子の箱が有り升中ゑいお市微塵棒達摩ゑ玉兎に狸の糞抔と云ふ
汚穢い菓子に鹽煎餅が有升るが田舍のい鹽を入れ升るから見た處でい色が白くて美味さう
だが矢張褐色黑い燒方が美味い樣です田舍の鹽煎餅い薄片で輕くてペラ〳〵して居り升る
、大ナ煎餅壺に一抔這入て居り升ゝ、それから鳥でも追ふ爲めか澁團扇が縋下り風を受け
てフラ〳〵扇ッて居升る是い蠅餘で有ると申す事で袖なしを着た姿ァさまが塵埃除けの爲
めに頭へ手拭を巻き附け壬寅の下を焚き附けて居り升る、破れた葭簀の衝立が立て有り、

看板を視ると御休所養 染 酒と書いで有升るのでいかさま一膳飯位ハ賣るので御坐ハ升る丁度其日の申刻過り大陽はもう西へ傾いた頃此茶見世へ來て休んで居る武士ハ廻し合羽を着て柄袋の掛ッた大小を帶し半股引の少し破れたを穿いて目倉編の山なしの脚半よ丁寧に刺繍た紺足袋切緒の草鞋を穿き身邊に振り分け荷置き背の雪卸しの三度笠を深く冠り煙草をパクリ〳〵呑んで居り升ると門口から這入て參りました馬丁ハ馬を軒の傍へ繫いで這入て來ながら馬「婆アさまお茶ア一碗くんねエ・今ノお客を一人新高野まで乘て來た婆「和郎さまハ何故もよい機嫌だなう 馬「宜い機嫌だッて・機嫌惡くしたッて錢の儲かる譯でもねエから仕樣がねエのよ・と云ひながら彼の樣子腰を掛けて居たる客人を見て馬「お客さん御免なせへ・尊公那處へお往で御坐エやすネー・もうハー大陽暮を掛ッて來やしたからお泊りは流山この松戸泊りが近くッて宜う御坐エませう川を越してのお泊は御離澁樣だが今夜は何處へお泊りか知りやせんが廉價くやんべエカナ 士「馬は欲しくない 馬「どうせ歸り馬で御坐エやす今ネ新高野までお客ウ二人案内してネ又是から向ふへ往くので御坐エやすが時間が要るから鰐ケ崎の東福寺泊りと云ふのだが・何程でも宜いから廉價く遣るべエおやアねエか 士「馬は欲しくないよ 馬「欲しくねエたッて安價たら宜エおやねエか 士「廉價くッても乘り度ないと云ふに 馬「そんな事を云ずよ忍耐して乘ッてて下せエナ 士「うるさへ乘り度ないから乘らんと云ふのだ 馬「乘り度ねエたッて乘ッてお貰んなせエナ馬にも美味ものを喰して遣りてエサ、立派ナ旦那さまヤ尊公ア安田さまちや有やせんか 士「誰だ 馬「オ、先生かへ誠に久敷面會チー、マア眞實に思エ掛ねエ、横曾根村に住た安田先生だヂ 士「大きナ聲をするナ乃公は少々仔細有て隱れて居る身の上だが突然に姓名を云はれては困る貴樣は誰だ 馬「誰だッて先生同一處に居た作藏で御坐エやすわチ 士「ナニ作藏だとオ、然々 作「エ、誠にお久敷お目に懸りやせんが何時も御壯健て若エねエ最早たしか四十五六に成たかへ 士「汝も何時も若いナ 作「乃公アもう仕樣かねエ尊公實はチ小哥も先刻から見た樣ナ人だと思ッてたか安田一角先生とは氣が附なかッたよ 士「乃公の名を云て呉れるナと云ふに 作「だッて知んねエだから氣イ附かずに云たのだ併しとうも一角先生に似て居ると思ッたよ 安「コレ名を云ふナよ 作「成程よく〳〵視れば先生だ何んでも隱し事は出來ねエチー笠ア冠ッて居るから知れなかッたが安田先生だッた 安「コレ〳〵困るナ名を云ふナと云ふに 作「ッイ迂濶り云ふだがもう云はねエ樣に仕やせう實に思エ掛けねエ尊公現今何處に居るだ 安「少し仔細有て此近邊に身を隱して居るが汝如何して彼地を出て來た 作「仕樣がねエだ乃公ア斯ナむかつ腹を立てる氣象だが積らねエ事で人に惡癖エ附けられたから此處計り日は照らねエと思ッて出て來たのさ 安「汝は慥か森藏の宅に厄介に成て居たぢやアねへか 作「ハイ森藏と云ちやア彼地では少しは賭博打の一類ちやア可い親分だかなんてッてもう年齢イ老て仕舞て親分は忘六して居やすから若エ奴等も多勢お

居やすから若ェ奴等も多勢こと居やすが小哥も厄介に成てると金松と云ふ奴が居て其野郎か破れた碌でもねえ葛籠を持て居て自分の物い牘奥揮でも古手拭でも皆ナ其ッ中に置くだ或時乃公が其葛籠を棚から卸して子明けて見ると財布が這入ッてゝ金が一分二朱と六百有たから出して使用て仕舞ふと其奴が云ふには此葛籠の中へ入れて置いた財布の金が無い汝窃取たらうと云ふから乃公ァ窮取しねいが只無斷て使用たのだと云ふと此泥棒野郎と云ふから小哥が合點しねに、泥棒とは何んだ如何いふ理窟で人の事を泥棒と云ふのだ只汝が金え出して使用た計りて無斷て人の物を出して使用たッで泥棒と云ふ理合が那處に在るかと喧嘩をおッ始めたといふわけさ 安「矢張泥棒の樣だナ

第八十三席

馬「親分の云ふには泥棒に違へねへとッて乃公の頭ァ打擲て汝の樣ナ解らねへものアねへと親分まで共に乃公に泥棒の名を附けただが窃んだちやァねへ只無斷で使用たものを泥棒なんぞと云ふ樣ナ氣の利かねへ親分ちや仕樣がねェと思ッて出奔て仕舞たが仕樣がねへから今ちやァ馬小屋見てへナ家屋を持て斯う遣て馬丁になッて僅かな飲代を取て歩行てるんだが因んの生命を繋いでル計りで仕樣がねへのさ賭博の仲間へ這入ル事も出來ねへから只モウ馬と首引だ馬計り牽いてルから脊骨へないらが起ルかと思ッてルよ 舊交に小遣を少し計りお呉んなさへナ 安「そんなら汝い風來て遊んでルのか 作「遊び人と貰ふ譯でもねへが馬を牽いてゝるのら賭博を打て歩行く事モ出來ねへのさ 安「少し汝に咄しが有るから婆アと姻草でも買に遣て呉れねへか 作「ハァ宜う御坐エやす……婆さま旦那さま姻草買て呉んうと仰しやるから買て來て上げなよ此旦那は上等んでなけりャア氣よ人ルめへ・平凡の仁ではねへ安田一角先生てエ 安「コレ〳〵 作「ハァ宜う御坐にやす、立派ナ先生だから惡い姻草なんぞァ呑まねへから大急ぎで上等物を買て來なせへ……尊公錢有升クべ 安「サこれを 作「サ婆アさま是で買て來て上げな 安「使ひ賃い遣るよ 婆「ハイ畏りました直に往て參り升ル・と婆さんい使賃と云ふ事を聞いて悦んで姻草を買ひに出て參りまシた・跡え兩人對坐で 安「汝馬を牽いてるのが幸むだ乃公い木卸へ上ル五助街道の間道に藤ケ谷と云ふ處の明神山に現今匿れて居ルンだ 作「ヘーアノ巨大な森の有ル明神さまの彼處に匿れて居るのかへ・人の往來モねへ位の處だから定めて不自由だんべえ彼地ェ生街道てえので松戸へ通ン抜けるに餘程近えから夏になると着ァ車に搭載んて少えい人モ通ルがあんだッてあんナ處に居ルんだへ 安「それにハ少し譯が有るのだ乃公モ横曾根に居られンで當地へ出たのだ 馬「何だか名主の惣治郎を先生が斬殺たてえ噂が有ルが・・・エー先生の事だから隨分斬殺り兼ねへ、殺たんべえ此横着モの奴・そんナ噂が評判て居難くなッたもんだから逐電て來たんだろう 安「そんナ事はねへが武士の零落ハ外ェ致し方モ無く美味い酒モ飲めないから何せ永い浮世に短い性命斬り取り強盗ハ武士の習ひだ當時ちャァナ四五人も手下が出來

て生街道に匿れて居て追剝を去て居るのだ 作「エ、追剝を、驚愕ウーン可怖ウーン乃公剝ぐなよ 安「汝なぞを剝いでも仕様がないが汝ハ馬を牽てるんだからたまにハ隨分多分の金子を持てる能い旅人か佐原や潮來邊から出て來るから汝其金の有さうな客と見たら成丈け駄賃を廉くして馬ニ乘せ此處ハ近道で御坐い升と甘く欺騙して生街道へ曳張り込み藤ケ谷の明神山の處まで伴れて來て呉れ、併し薄暮くならなくッちやア仕事が出來ねへから宜い加減に何處かで時を移すか野驚とて歩行バ自然と時が遲れるからさうして伴れて來て呉れまバ多勢で取巻て金を出せと云へバ驚いて仕舞ふ、汝ハ馬を置ッ放してなり吏張てあり逃げて仕舞ねへさうして百兩金が有だら其内一割とか二割とか汝に禮を仕様から乃公の同類まならねへか 作「そんなら禮が二割と云へば百兩有るア二十兩乃公に呉れるのが 安「さうよ 作「甘へナア只馬を牽張て百五十文計りの駄賃を取て酒が二合に青魚の二本も喰へば跡に錢が殘らねへ様ナ事をするより宜いが同類に成て若し發覺た時ハ首を打斬れるのかよ 安「さうよ 作「ウーンそれ丈けだナ、乃公ハもうあをで五十を越してるンだから百兩で二十兩よあるのから斯ナ首ハ打斬られても惜くも無へから行るべエの 安「汝馬を牽いて乃公の匿れ家まで來い、アノ明神山ハ五本杉の中に一本大きな楠が有る其裏の小山が有る處よ少し計り同類を集めて居るンだ 馬「ちやア彼の舊時三峰山のお堂の有た處だ子、能くマア彼樣ナ處に居るねへ 彼處ハ狼や巴蛇が出た處なんだから尤も泥棒よなれど狼や巴蛇を盗怖て居ちやア出來なへか、さうがへ、一角は懐中から金子を取出し作藏に渡しながら 安「是は汝が同類に成た証據の爲め少しだか小遣錢に遣るから取て置け 作「エ有難へ是は五兩だナ今日は真實に思エ掛けねへで五兩二分に成ッた 安「ナゼ 作「不思儀ナ事も有るものだ今日はナ、アノモサノ三藏に逢たよ羽生村の質屋で金かしさ婆アさまが死んだッて其白骨を高野へ納めるてエ來たが今日は廿一日だから新高野山へお參りをするてエので與助を從者に伴れて乃公が光刻東福寺まで送ッてッたが昔し馴染だから二分くれるッて云ッたか有難う御坐エやす實に今日は思エ掛けねへ金儲けが出來た 安「其五兩を取て見るともう同類だから是切り藤ケ谷へ來すに居て若し汝の口から乃公の惡事を訴人しても汝は矢張り同罪だ假令五兩でも貰ッて見れば同類だからさう思へ 作「乃公ハ覺悟を極めて行るからには屹度遣りやすよそれは宜いが尊公直に獨りで往くか馬に乘て往かないが……歩行て往ク、さうか、左樣なら……アヽ其方へ往ッてア損だから其土橋を渡ッて直具にお往でなせへ道イ惡いから氣イ往けて往なさへ、ナア安田先生も僞劍術遣ひだから何うして劍術遣ひてア飲ア喰へねへ、アノ人は舊時から隨分盗賊位遣ッたがも知ンねへ今乃公がに五兩呉たは宜いが是を取て見れば同類に落すと云たが困ッたナ、アヽもう往て仕舞たか立派ナ男だ、婆アさまは何處まで烟草を買エに往たんだらう尤も不要いのだ人拂エの爲めに買エに遣たんだが餘り長エナア、と獨言を云て居る後から 男「オイ作 作「エ、誰だへ乃公を呼ばる

のア誰だ 男「オ乃公だ、久しク逢は絲へのう

第八十四席

作「誰ダ、人が何處ふ居ルのた、と云ひながら方〻見廻し振り反つて見ルと二枚扣の鼓の屏風の蔭に蛇形の單物に紺獻上の帶を神田に結び結城平の半合羽を着傍の方に振分の小包を置き年頃三十計りの男で色はクッキリと白く眼のパッチリとしと鼻梁の通ッた口元の締ッた美い男で其側に居るのは女房と見え二十七八の女で頭髪ハ達磨返しに結び鳴海の單衣に黒繻子の帶を引かけにメめ一杯飲んで居る夫婦連の旅人で 男「作や此方へ這入ンねへ、と云ひながら芳屏風を明れて出て來た男の顔を見て 作「イヤー兄哥か、何した新吉さん珍らしいナア、久振りだ、コレハ何うも珍らしい實に思エ掛けねへ 新「汝 大ナ聲で怒鳴て居たか相變らずだナー 作「オヤお賤さん誠に れ久ー振て御坐エヤした 賤「オヤ作藏さん和郎の噂ハ時〻して居たが相變らず宜い機嫌だ子 作「眞實にお賤さん見違へる樣に成た、少し年増と子旅をしとモンだから色が黑くなッだが思エ思ッた新吉さんとかう〳〵夫婦ふ成て彼地を出奔とのかへ、今マア何處に居るたへ 新「彼地此地と身の置き處のねへ風來人間で仕方がねへが是も皆ナ人に難儀を掛け悪い事をした應報を思つて諦めて居るか何商賣を仕度も資本がないのだ、汝有利ナ仕事を安田と相談して居たが乃公も半口載せねへか 作「汝アノ事を聞いたかコレハア困ッたナア、實は錢が無へで困るから這入る暇似エしたとア、たか餘り這入り度ハ無へンと 新「旨く云てるせ併し三藏ハ何處へ往たんた 作「三藏かへ彼は子婆さなが死んだから其白骨を眞實の紀州の高野へ納めに往ッて詞堂金も澤山持てる樣子ざお累さんもアゝ云ふ死樣をしたのも矢張汝等二人とをした樣ナものだぜ 新「汝是から新高野へ馬と牽て往れあち矢張り歸りは此處を通るだらう 作「鰭ケ崎の方へ廻るのだが此處へ來ても宜い 新「さうう、オイ作 作「エー何んだ 新「一寸耳を貸せ…… 作「フーン、可畏事だナ 新「汝馬を引て光方へ住て三藏を處此まで乘て伴て來たらナニカ急と川ゞ出來たと云て馬を置ッ放して逃て仕舞て呉れねへか併し馬を置て往れちャア三藏と逢て仔事をする邪魔にあるから牽てッて呉れ其代り金を三十兩ャらア 作「エー三十兩、眞實に乃公アお累ゞ死んでらハ互に仇敵同志の樣になつたのた 作「仇敵同志だッて汝が三藏を怨金運か向て來た、チャ金を呉んろへ、して如何云ふ理屈だ 新「三藏とは一旦兄弟とまで成とがふ累ゞ死んでらハ互に仇敵同志の樣になつたのた 作「仇敵同志だッて汝が三藏を怨むのアそもア兄哥些と無理たんべエ、成程お賤さんの前も有るからさう云ふか知ンねへゞ三藏を仇敵と思エば無理ダゞ汝が養子に往ても男振が宜いもンダからお賤さんと見違られ互エふ死ぬの生るのと騒ぎ合ひお累さんを振り捨てお賤さんと斯う云ふ事と成たからお累さんも逆上て顔が彼樣ま腫れ出ーて死涿でしまッたのたから却ッて三藏の方で汝を怨んで居るたろうがナニモ汝の方で三藏を悪み返すと云ふ理由ハ有ンめへぜ 新「汝ハ深い事を知らねへから其樣ナ事を云ふンたが何んでも搏てねへ乃公が三藏と逢て百兩でも二百兩でも

無心を云て見樣と思ふのた 作「三藏どんが汝に金を貸す緣があるかへ 新「貸しても宜い緣故が有るのたよ 作「三十兩呉るなら遣附やせう 新「若與助の野郎が邪魔でもしたら汝打擲て呉なくッちやァいけねへせ 作「與助老爺なんざアヒヨロ〳〵してるのら川の中へ投擲り込で仕舞が夫も矢張金力たが子 新「强請事を云いずゐ遣て呉れ其代り首尾能く遣て利を見た上で汝ふ又禮をーやう 作「ろれぢやァ三藏に貸して呉れと云ても貸さ糸へと云へば禮ハ無エか、困ッたナ、ぢやァ跡の禮の處ハ當にハならねへナ 新「マァ其樣なものだが多分上首尾往に違ねへ、若しグッ〳〵して貸さぬへなんぞゝ云たら三藏與助の二人を毆殺して川の中へ投り込で仕舞ふ積りだ、乃公も安田の提灯持位ハ遣る了簡さ 作「お賤さん新吉さんが彼樣な事を云ふせ 賤「初郎度胸をお据ゑ仕方がおいよ妾も板の間稼ぎ位ハ遣るよ 作「アレマァ彼樣な奇麗ナ顏をして居ながらアンナ事を云ぬのも皆ナ新さんが教へたんだろう乃公はどうせ安田の同類にされたかゐ發覺ば首は打斬れる樣ゐおッてるンだから仕方がねへ、やるべエ……〳〵チヽ娑アが歸ッて來やァがッゐ 新「うれぢやァ汝馬を牽ゐて早く往け 作「ハイそんなら直ゐ馬ァ牽て新高野へ三藏を迎ねエに參りやせうと出て行きましたこれかゐ新吉お賤も茶代を拂ッて其處を立出ました其内もう日はとッぷりと暮れましたがよし簀張も仕舞ひ川端の葦芳の繁茂た中へ新吉お賤ハ身を匿して待て居ると向ふから三藏が作藏の馬に乘て參りましゐ 作「與助さん尊郎もう何歳になるチヘまだ强壯のう長く奉公して るが五十を一二年も越したかへ 作「さうでねへもう六十ゐ近くおつたから滅切年を老て仕舞ッた 作「羽生村の旦那チョックラ下馬てお呉んなせへ 三「おんだ 作「おんでも宜から 三「坂を上つたり下たりするので乃公も餘程草臥たが馬へ乘て少し氣臭を休養たが馬へ乘と又矢張腰が痛いゐう 作「旦那誠ゐ御無心だが私ハチ少し用が有るのを忘れて居たが貸ハ此先へ往て炭俵を六俵積んで來て呉れと頼まれてるンだがどうしても積んで往かねばおんねへ事が有るだ誠ゐお氣の毒だが此處で下馬て下せエナもう此處から先ハ平垣ナ道路だから歩行ても雜作もねへンですが 三「うれぢやァどうでも宜い汝が困るゐら下りて歩行て往う、と云ひおがら馬から下る 作「私ハ少し急ぎ升から御免ゐせへ、と大急ぎで横道の林の蔭へ馬を牽込みました

第八十五席

日はどッぷりと暮れ往來も止りますと戸ケ崎の小僧辨天堂の裏手の草の茂みからゴソ〳〵と葦を分おがら出て來た新吉はものをも云はず突然與助の腰を突きましたから堪りません與助はモンドリを打ッて利根の枝川へドブンと水音高く逆とんぼうを打ッて投げ込まれましたからアッと云ッて三藏が驚いて居る後から新吉が胴金を引拔いて突然ゐ三藏の脇腹へ突込みましたアッと云ッて斃れる處へ乘掛り胸先を刳りましたが一刀や二刃でハ客易ゐ死ねません死物狂ひ一生懸命ゐ三藏ハ起上り新吉の結髮を把ッて曳き倒す其内與助は年こそ

老て居り升るが田舎漢で小力も有るものでは坐い升から川中から這ひ上ッて參りおから短刀のを引き抜き與「此野郎ナニをしやァがる、と斬ッて掛る樣子を見るよりお賤ハ驚き新吉よ怪我をさせまいと思ひ窈と後方から出て參り與助の襟結を把ッて後の方へ曳き倒すとナニをしやァがると云ひながら手よ障ッた石だか土の塊りだか分りませんうれを取ッて突然りお賤の面部を打ちましたお賤は面部から火が出た樣よ思ひ「アー、と云ッて倒れると乘し掛り斬らうとする處へ馬丁の作藏が與助の傍から飛び出して突然り足を上げて與助を蹴ましたから堪りません與助はウンと云て倒れました新吉ハ刀を取直して又た一刀三藏の脇腹をこじりましたから三藏も遂よ其儘氣息が絶えました、すると手早く三藏の懷中へ手を入れ胴卷の金を抜き取ッて死骸を川の中へ投げ込んで仕舞ひ 新「お賤〳〵 賤「アイ、アヨ痛いどうも酷い事をしやァがッた石か何か取ッてイヤと云ふ程妾の面部を打ちやァがッた 新「手出しをするからだ、默ッて見て居れば宜いよ 賤「見て居れば和郎が殺されて仕舞たのだよ與助の野郎が和郎の後方から斬りよかるッたから妾が一生懸命よ手傳ッたのだがもう少しで和郎斬られる樣だッたよ 新「さうか、夢中で居たから些とも知らなかッた 賤「與助をよく蹴倒したおう 作「エナニ乃公だ、林の蔭に匿れて居たが危險へ樣子だから飛び出して來て與助野郎の助骨を蹴折て仕舞た、兄哥無心處ちやねへ突然よ行ッたんだナ 新「汝いもう歸ッたのかと思ッた 作「林の蔭よ匿れて居てどうだかと樣子を見て居たのよ 新「誰か人ハ來やァしねへか汝氣を附けて呉れ 作「大丈夫だ誰も來る氣遣はねへが割合を貰エ度おァ 新「汝ハよく虚言を吐く奴だナ三藏が高野へ納める祠堂金を持ッてると云ふから懷中を探して見たが金おんぞ持ッて居やァしねへ漸く紙入の中に二兩が三兩しか有りやァしねエ 作「串戲ぢやァねへせそんな事が有るもんか 新「たッて汝虚言を吐いたんだ 作「ナニ乃公が虚言おんぞ吐くものか、此の野郎殺して置いて其金を取ッて仕舞ッたに違へねへそんナ事を云ても駄目だ 新「ナニ眞實だよ 作「死骸をどうした 新「川の中へ投り込んで仕舞ッた 作「虚言を云へ、調戯ずに早くよこせよ、調戯るなよ 新「ナニ調戯やァ玄ねへ、と云はれ作藏ハ少し恕氣を含み鈍聲を張上げ 作「和郎の懷中を改めて見やう、乃公たッて手傳ッて、貴婦さんを斬らうとする與助を乃公が蹴殺して罪を造ッて居るンだ、裸体に成ッて見せろヤイ・出せッてへバヤイ・と云ひながら新吉に取縋る 新「遣るよ遣るから待てと云ふに戯けるな、放せ 作「おんだ人を欺騙して、金ヱ出せよう 新「遣るから待て!・ 遣ると云ふに、お靜其柳行李ハ中に少し計り金が這入てるから出して作藏に遣ンな・三藏の懷中には無へンたから澤山は遣れねエ・十兩計り遣らう・と氣体めを云ひながら間隙を覗ッてドンと作藏の腰を突くとドブリと用水へ落ちましたがガバ〳〵と直よ上ッて參り升る處を見てメーンと腦を割附けるとアッと云ッてガバ〳〵と沈みましたが又這ひ上りおから・斬りやァがッたおァ此野郎と云ふ聲がリーンと合附がして川に響きわたした侑ほど這ひ上らうと

する處を又た一刀突きましたの[illegible]頭倒かへりま[illegible]上つて來るのを無暗よ
斬り附ましたから馬刀の作藏は是迄の惡事の報にや遂よ氣息が止つたと見ゑ其儘土手の草
を攫んだなり川の中へのめり込んで仕舞ました 靜「和郎マア恐ろしい苛酷事をするねへ
新「此野郎はお饒舌をする奴たから罪ナ樣たゞ五兩でも八兩でも金を與るのを費へだから
切殺て仕舞たがもう此處にグヅ〳〵しては居られねへ 靜「妾はどうも毆れた處が痛くつて
堪らないよ 新「何んたゝ暗くつて判然分らねへ・と云ひながら透して見ると石たか土塊だ
か分りませんが機みとは云ひながら打れた痣い半面紫色に黑み掛り腫れ上つて居ましたか
ら新吉ゞ戰慄したとヤすは丁度七年跡の七月廿一日の夜お累が乃公を怨み鎌で自殺をした
彼の時に蚊帳の傍へ坐つて乃公の顏を怨めしさうゐ白眼た相貌が實よ此通りの相貌たが今
お靜が思掛ない怪我をして半面變相に成と云ふのゐ飽までお累が乃公の身体に蟲緣つて祟
をなす事でいないかと流石の惡黨も怖氣立ちものをも云はず暫くは茫然と佇立て居りまし
たがお靜い氣が附ぬせんから 靜「和郎早く人の來ないうちに何處かへ往て泊らなくつちや
ア、いけないと云はれ漸ふ心附きこれからお靜の手を取て松戸へ出まして松新ど云ふ旅店
へ泊り翌日雨の降る中を立出て本鄕山を起し塚崎村よかゝり觀音堂よ參詣を致ス不圖お靜
が實の母に出逢ひ升る御咄しゞ一息つきまして

第八十六席

中續きました新吉お賤は實に佛說ゞ中升る因緣で・夫程の惡人でゐ御坐いませんでゝたが
する事爲す事に皆惡念が起り人ゞ害す樣ナ事も度ゞに成升る却說二人は松戸へ泊り翌廿二
日の朝出立たらと致し升ると秋の空の變り易く朝からドンドと拔ける程降り升から出立事
が出來ませんでグヅ〳〵して晴れ間を待て居る中に丁度午刻過に成つて雨が霽りましたの
ら晝飯を喫て其處を出立ましたおれども本街道を通るのゐ疵持脛で御坐い升るから却つて
人通りのおい處が宜いと云ふので是から本鄕山を拔け塚崎村へ掛りました時分いもう日が
暮れかゝり又吹掛け降よ雨がザアー〳〵と降つて來ましたから 新「アゝ困つたもンた・と
云ひつゝ二三町參りますと 傍 の林の處に小さい門構への家屋にチラリと燈火が見ゑまし
たゞら 新「兎ゐ角ゐ彼處へ往つて雨止みをしやうと・云ながら門の中へ這入て見ると木連
格子に成つて居る庵室で村方の者が奉納ゝたものか丹で塗つた提灯が幾個ゐ掛けて有りま
す正面には正觀世音と書いた額が掛けて有ります 新「お賤 賤 アイ 新「コンナ處に宿屋は
なし仕方がないから此御堂で少〳〵休んで往かう・ お賽錢を上げたら宜らう坊さんゞ居るた
らう・と云ひおがら格子の間から覗いて見ると向ふに本尊が安置て有り升る正觀世音の像
を小さい龕の中へ入れて有るのですが餘り良い作でい有りません田舍佛師の拵へたもので
どざいませうなれ共金箔を置き直ゑたと見へ閃〳〵と發輝て居升る其前に供臥た三つ具足に
此頃納まつたものかまた新しく村名が鏤り附けて有り坊さんが皇から切つて來たものか黃

菊に草花が供つて居ますすると眞の單物を着腰衣を着けた六十歳近い尼が御燈明を點に參りましたから、新「少こお願ひで御座い升が私共い旅行のもので・此通りの雨で難澁致し升がどうか少この間雨待を仕度と存し升がお邪魔でも此軒下を拜借願ひ度もので御坐い升る 尼「ハイ御參詣の御仁で御座い升かへ 新「イエ通りがこりのものですが此雨に降こめられまして・尤も有驗ナ觀音さまと聞いて居り升からお參りもずる積りで御坐い升る 尼「吹掛け降りですから其處に佇立でお出では嘸お困りで御坐いませうスグ前ま井戸も有り升るのら足を洗つて此方へ上つてお茶でも飲みながれ雨待をなずつて入つしやいまし 新「有難う存じ升・エ・ム賤金か何の遺れば宜いから上んねへナ……ドやア御免なさい誠と二有難う存し升 尼「其處に鹽も有りますから小さい方を持つて往つて足を洗つてお出なさい 新「ヘエ・と是れから足を洗ひ 新「誠とふお蔭さまで有難う御坐います・と上りましたが新吉もお部も鐵面皮から居爐裡の邊へ參り 新「お蔭さまで助かりました 部「誠よどうも頼だ御厄介さまで御坐いました 尼「オヤ〳〵御夫婦伴れで旅行を成さい升の・藤心村まで出るとお茶漬屋位い有升が此邊には宿屋が御坐いませんのら定めて御困りでせう・遠慮なしにもつと居爐裡の邊へお寄んなさい。新吉い何程の金子を紙に包んで尼の前へ差出ス 新「コレは誠に少し計りで御坐い升がお蔭で助かりましたからお茶代では有りませんがどうかコレで觀音さまへお經でもお上成すつて下さいまし 尼「イエ〳〵それは決して戴きません先刻

鷲郎は本堂へお賽錢をお上成すつたからそれでもウ澤山で御坐い升御參詣の仁い皆御馴染に成つて他村の御仁が來ても上り込んで妾の樣ナ老婆でも久しく咄をして入らつゝやい升のですから御心配なく寛りと御体をなすツて入らつゝやいまし・と云へれ新吉いお賤の顏を見ながら小聲よて 新「たつてきまりが悪りいお……コレはほんの私の心計りで御坐い升から尊尼跡で御茶菓子でも買て下さいまし 尼「イエ妾い喰物ば少しも欲しくば有ません・鷲郎をお賽錢を上たからもうお金おどいよう御坐い升よ 新「そんな事を云はずにどうか取て置い下さいまし 尼「そうで御坐い升か又氣よなずつては悪い之折角の思召せすから戴いて置ませう・日が暮ると雨の降る時は寒う御坐い升直に本郷山が接近ですから山冷が仕升からもつと其粗朶をお焚おさいま之 新「ヘイ有難う存じ升・と云ひながら松葉や粗朶を焚ベチヨロ〳〵と火が移り燃え上りました火光でお賤が尼の顏を熟こ見て居ましたが 賤「オヤ和女は實母ぢやないか

第八十七席

尼「ハイ誰婦へ 賤「アレマアどうも實母たよ・マア如何トて和女尼よおなりたか知らあいが眞實に見違へて仕舞たよ・十三年跡ま深川の檜下の花屋へ置去にして往れた娘のお賤たよ・と云はれて尼は驚愕し 尼「エヽ・マアどうも誠に面目次第もない・妾も先刻から見た樣十八たと思つてたが顏貌が違つたから默つてたが・どうも實に妾そ母子と名乘て和女に

逢れた義理ぢやァ有りませんが頭髪を剃つて斯ナ身の上に成たから逢れ升もの丶定めて不實の親たと腹も立ちませうがどうぞ堪忍して下さい、謝罪升 靜「それでも能く後悔してネ 尼「此通りの姿に成つてマァ此庵室に遣入つて今では毎日お經を上げた跡では觀音さまへ向つて若い時分の惡事を懺悔して御謝を申して居 すけれども中ゝ罪障は消滅ませんが頭髪を剃つて法衣を着たお蔭で村の衆がお比丘さまとか尼さまとか云つて種丶ナ喰物を持て來て呉れるので何うやら斯うやら性命を繋いで居ると云ふ丈けのことで、此頃ハ漸ゝ心附いて、十六の時置去よしたお靜ハ如何したかと案〳〵居ても母子で有ながら訪問る事も出來ないと云ふのハ皆ナ罰と思ひて後悔して居るのたよ 靜「どうも子眞實よそれでも能くマァ法衣を着る了簡に成たネ、と云ひながら新吉よ向ひ 靜「和郎さんにも咄をした深川橋下の花屋のソレネ……和女さんの樣ナ親子の情合のあい人ハないけを共能くマァ後悔〳〵ておいたネ 尼「比丘なんぞになり度い事ハ無いが是も皆ナ妾の作つた惡事の罰で世話のして呉れ人もなくなり段ゝ老る年で病み煩ひでも亥た時ハ看病人も無い始末、アー如何したら宜らう、アー是も皆罰でハあいかと身体の不自由時にハ眞に其後悔と云ふものが出て來るもれでノウた靜シテ此御仁ハ和女の良人かね 靜「アヽ 新「ハヽ〳〵でもお靜のら咄ハ聞いて居ませた一人り實母さんが有るけれ其生死が分らない併〳〵强壯ナ人で若い氣象たつたから健康で居るかどうか噂ハ能く仕升が小哥ハ新吉と云ふ不調法もので御坐い升が今か

ら何分幾久しう願ひ升 尼「此お賤ハ妾の方でハ娘とも云へませんまた親とハ思ひ升まい惡〳〵ッてチー、アー實に等汝ハ面會と云ふのも皆 神佛のお叱りたと思ふと身を切られる程難堪と云ふ事を此頃始めて覺ゑまし〻言ふない事ハ解り升まいか私ハ此頃ハ誰が來ても身の懺悔をして若い時の惡事の咄を致し升と遊びよ來る老爺さんや老婆さんもオー〳〵そうざなう惡い事ハ出來あいものたと云て又其人達が若い時分の罪を懺悔して後悔あさる事かあるから妾ゝ懺悔をし升と人さまもそれよ就て後悔して下されば妾の身の爲よもならうと思ッて蓬ふ人毎ゝ妾の若い時分の惡事を懺悔してお咄を致し升か妾も若ひ時分の放蕩と云ふものハお賤ハ知りませんが中丶一ト通りぢやァ有ませんでしたよ 新「母さんあんでそかゝ尊姫さんハ素と何處れ出の御仁で御坐い升、多分江戸子でせう 尼「イエ妾の產地ハ下總れ古河の土井さまれ藩中れ娘で實父ハ百二十石の秩錄を戴いた柴田勘六と申〳〵て少〻〳〵許ハ宜い役を勤めた事も有る身分で御坐いましゝからお孃さま育ちで居たれをすが品行が惡う御坐いまして妾か十六の時家來の宇田金五郎と云ふものと若氣の至りで私通をし金五郎ふ伴られて實家を逃出し江戸へ參り本鄕菊坂ゝ世帶を持て居ましたが丁度アノ午年の大火事れ有た時寶曆十二年で御座いまーたろ子其時妾ハ十七で小兒を分娩だのですが十七や十八で兒を拵へる位だから碌ナものでハ有ません其翌年金五郎ハ傷寒を煩ッて遂ゝ死沒ましたが年端もゆかぬゝ亭主ゝハ死分れ兒持でハどうする事も出來ませんのサ其小兒ゝハ名を甚

藏と附けまーさが何まあやかつたのか肩の處よ黑い毛が生へて氣味の惡い痣が有ッて妾も若い時分の事だから氣色が惡く殊ま亭主ま死別れて喰ひ方まも困るが菊坂下の豆腐屋の水船の上へ棄兒にして妾ハ直ぐ上總の東金へ往て料理茶屋の働き女ま雇れて居る內ま船頭の長八と云ふもれといふ交情となつてまま其處を出奔て出る樣ナ事に成つて深川相川町の島屋と云ふ船宿を賴み亭主ハ船頭をし妾ハ客の接待をして僅少ナ御祝儀を貰ッて何うやら斯うやら活計て居る中ま妾は亭主運がないと見ね長八がまた不圖煩ひついさのが原因を是も又死別れどうそる事も出來ないから心配して居ると島屋の內室の云ふまハ迚も和夫まハ辛抱は出來まいが思ひ切ッて堅氣まならあいかと云ハれ小日向の方の御旗本の奥樣がお鹽梅が惡いれで中働きま住み込んだ處がそれでも若い時分て此樣な醜惡い婆アでもなかつたから殿樣の御手が附いて僅ま中ま出來丁たれハ此お賤ッ

第八十八席

尼「此娘も世が世あらて御旗本のお嬢さまと云れ妾身の上だが運の惡いと云ふものは仕方がないもので此おしやが二歲の時其お屋敷が直ま改易に成て仕舞ひ仕樣がないから深川櫓下の花屋へ此娘を賴んで藝妓ま出して妾の喰ひ物ましやうと云ふ了簡でしたが又妾ゞ網打場の船頭れ喜太郎と云ふ者と私通をして船で房州の天津へ逃げましたが子ろれからと云ふものて惡い事だらけサ手こそ下もて殺さないでも口頭で人を殺すようナ事が度ゝそ妾の爲に身を投げたり首を縊ッて死んだ男も二三人有るから皆ナ其罰で今斯う遣て居るのも彼の時ま斯う云ふ事をしたから其報いだと斷念め漸ゝ改心ましたのさ仕方ゞないから頭髮を剃去し破れ法衣を古着屋で買て子方ゝ托鉢して歩行て居る中此觀音さまのお堂まハ留守居がないからお比丘さん這入つて居ないかと村の衆ま賴まれるから假名附のお經を買つて忍經から始めどうやら斯うやら今でハ觀音經位ハ讀る樣ま成さが此節ハ若い時分の罪亡ぼしと思ひ自分ま餘計お物でも有ると困る人ま施て仕舞ふ位だから何も物ハ欲ーく有ません村れ衆が時ゝ畠の物おゞを提げて來て呉るからもう別に美味い物を喰度と云ふ氣もなし只觀音さまへ向つてお謝事をして居る故か胸の中の雲霧が晴て善ま赴いたものだから皆さんがお比丘さまゝと云て呉れ此觀音さまも段ゝ繁昌して參ッてお比丘さんまお灸を据て貰へノお咀をして貰ひ度のと云て賴みに來るから妾も何も知らないが若い時分から疝氣なら何處が能いとか齒れ痛いのにハ此處ゞ能いとう聞いてゐるから据て遣ると先方から名を附けて觀音さまの御夢想ゞなぞと云ッて現時でハ和郎さん何不足なく斯う遣て居升が今日圖らずもまへ達に逢て妾ハ尙ほ觀音さまの以て入らつしやる運の雷で脊中を打たれる樣ま思ひ升ヨまだお二人とも若い身の上だから是から先き惡い事ハあさらないやうに何卒氣をお附けあさい年を老ると屹度報つて參り升輪回應報と云ふ事ハないでハ有りませんよ、と云ハれ新吉ハ打萎れ太息を吐きながらお賤ま向ひ 新「何だェお賤 賤「妾も始めて聞、

いたよ、そんなら母親さん和女がお屋敷へ奉公よ上つたら殿様のお手が附いて妾が出來たと云へば其のお屋敷が改易にさへならなければ妾ハお嬢さま、和女ハ愛妾とか何んとか云れて居るだア 尼「和女ハお嬢さまよ違いないが妾ハ追出されてでも仕舞位の訝ヱナ譯でア 新「へイ其小日向の旗本とは何處ざエ 尼「ハイ服部坂上の深見新左衛門さまと云ふお旗本で御坐い升、と云ハれて新吉ハ驚愕し 新「エーそんなら此お靜ハ其新左衛門と言ふ人の落胤だア 尼「左様 新「さうかと、口ではいへど慄と身の毛かよだつ程恐ろしく思ひましたハ八年前門番の勘藏が死際に我が身の上の譚を聞けば乃公ハ深見新左衛門の次男よて深見家改易の前よ權妻が這入り間もなく其權妻のお熊と云ふものゝ腹へ懐孕したハ女子を產落そとまもなく家が改易よ成ると聞いて居たがして見ればお賤ハ腹違ひの兄弟で有たか今まで知らずよ夫婦よ成つてもう今年であーかけ七年アゝ頓だ事をしゝと身體に油の如き汗を流し殊よハ又其本郷菊坂下へ棄兒よしたと云ふのは七年以前おしゑが鐵砲にて殺した土手の新藏に違ひない右の二の腕に痣がありそれよ一面黑い毛が生へて居たるを問ひしとき我ハ本郷菊坂へ棄兒よされたものであると私へれ咄ー扨ハ聖天山へ伴れ出して殺した甚藏甚矢張お賤の爲よハ血統の兄であつさか實よ因緣の深い事アゝお累が自害の後ち此お賤が又斯う云ふ變相よなるとハふのも九ケ年以前狂死なしたる豐志賀の祟りなるハ成程恐ろしきハ出來ぬもの乃公ハ畜生同樣兄弟同志で夫婦ふ成り此年月互よ連れ添つて居さハ淺間しい

事だと思ふと總毛立ちましたから新吉は物をも云ハず小さくかたまつて座り只ボロ〳〵涙を落して居ました

第八十九席

尼「頓さ面白くもない咄をお聞せ申ましさがマア緩くりお休みなさい 新「實に和女の咄を聞いて私も若い時分よした惡事を考へますと身の毛がよだち升よ 尼「和郎さんナニを云ふのてを若い時分抔と云てまだ若い盛りぢやアないか是から罪障を作らン樣よゆそので 新「母さん私ハ眞以て改心して見ると生てハ居られない程辛いからどうか私を和女の弟子よして下さいナ、外よ往き處もないから和郎さんの傍へ置いて下されと本堂や墳墓の掃除でもして罪ぼろはしをゑて生涯を送り度ハれで、段々れお咄で私ハ悉皆精神を洗ひ誠の人よおりましたからどうか私をお弟子にして下さいまし 尼「よく子 妾の懺悔咄を聞いて一圖よアゝ、惡い事をしたと云ッて和郎さんのやうよ事を仰しやる御仁も有升ゞ其心持が永久續かないものですからそんナ事を云ハなくッさも只アゝ惡い事をしたと思へば其心が善いれで 新「お賤和女とハ不思義の惡緣と知らゑ是まで夫婦よ成て居さけれ共公然婚姻をしたと云ふ譯でもないから夫婦の緣も今日限りとし乃公ハ頭髮を剃て、和女の母親さんたか乃公ハ母親さんとハ思ハおハ乃公を改心させてくれた導きの師匠と思ひ此お比丘さんよ事へて生涯出家を遂ける心よ成たからもう乃公を亭主を思ッさ呉れるな乃公もまた和女を女房とハ

思いねへからどうのそう思つて呉れ賤「オイ何を云ふんだ極りを云つてるよ」叫を聞た時に
い一圖に悪い事をしたと思ふが少し經過と直ぐ忘れて仕舞ふもの・一寸精進としても七日
仕やうと思つても三日も經過ともう宜ちうと喰べるのが通例ぢやあないか 新「今までの精
神の汚れたのを悉皆洗つて本心よなッたのだからもう乃公の傍へ寄ッて呉れるな 賤「オヤ
新吉さん何を云ふのだよ和郎どうしたんだへ 新「和女いマア眞實に……どうして羽生村お
んぞへ來たんだナー 賤「新吉さん和郎何を云ふのだ、來たつて・アー云ふ譯で來たンぢや
アおいのそれがどうしたンだへ 新「和女い何も解らねへのだ……アヽー厭忌だ、フッ〳〵
厭忌だ、どうぞ五生だから乃公の身邊へ寄つてくんおさんお、と云れお賤ぢ少しムッと
した顏色になり賤「アヽ厭忌なら離縁おさいだが妾も和郎と二人で、悪い事を仕度もな
いが喰ひ方よ困るものだから一緒にしたが昨日私が斯ナ怪我をして恐ろ〳〵い變相に成たも
んだから外の女と乗り替る了簡で甘言く胡麻かして私を此寺へ押附け和郎いそんお事を云
つて逃る心だらう 新「決ッてそう云ふ譯ぢやアおいが・和女……どうして女に生れたンだ
ナア 賤「ナニを無理ナ事を云ふノ女に生れたッて、狂氣じみ切て居るよ 新「和女に口を利
れても總毛立ッよ 尼「喧嘩をしていいけません私もお賤の爲にい實母たから死水を取て貰
ひ度が親子て有りながらそうも云われず又だお賤も私の死水を取る氣い有りますまい 新「
まだ此のお靜ハ色氣が有る・此畜生奴眞實よおまへや乃公い尻尾が生へて四ッン這におッ
て槌の中へ面ア突込んで肴の骨でも喰る樣ナ因果よ二人とも生れたのたからお靜和女も眞
實よお經でも覺て之觀音さまへ其身の罪を謝る爲に尼に成り法衣を着て一文づ、貰ッて歩
行氣におんナ 今更外に仕方がないのちよ 賤「なんだネ厭忌たよそんナ事が出來るものか
……新「そう身邊へ寄て呉れるナよ……どうの私の頭髪を剃て下さい 尼「マア〳〵三四
日此寺に泊ッてお在なさい又心の變るものたから互ひよ喧嘩を云おいで、私いお經を讀誦
に往ッてくるから少し待てお在おさい 新「私も一緒に參りませう 賤「オイ新吉さん和郎眞
實にどうしたんたへ私いどうしても和郎の傍い離れおいよ。新吉はもう誠に佛心と成ましし
て 新「和女いまた色氣の有る人間た乃公い眞よ改心する氣に成た 賤「眞實に和郎どうした
ンたよと、云ひおがら取り縋るのを新吉は突放し 新「此ン畜生奴乃公の身邊へ來ると蹴
飛ず・と云それお靜は腹の中よて私の相貌が斯ナニ成たものたから棄て逃げるのたと思ふ
のら油斷を致ませんで此寺に四五日居り升る中に因果の應報い恐ろ〳〵いもので宗右衛門
の息男宗吉が此庵室へ尋ねて參ると云ふ處から新吉いもう忍耐兼ねて草苅鎌を以て自殺致
しまするとと云ふ新吉改心の端緒て御坐い升

第九十席

拠て申續きました深見新吉いお賤を伴れて足かけ五年間の旅行中の悪行で御坐い升る・不
圖下總の塚崎村と申升る處の觀音堂の菴室に足を留る事に成りました是は勝心村の觀音寺

と云ふ眞言寺持で御坐いまして一切の事ハ觀音寺で引受で致し升る、村の取附に有る觀音堂で靈驗者顯と云ふので信心を致し升る者が有ッて種〻この者を納め升るが堂守を置き種〻の惡い事をして遂電り村方のものも困ッて居る處で、通り掛ッた尼ハ品行も善いと云ふ處からこれを堂守に賴んで置きましたこれへ新吉お靜が泊りましたので、比丘尼ハ前名を熊と申す婦人に似氣ない放蕩無賴を致しました惡姿で御坐い升るが今ハもう改心致しまして頭髮を剃り落し鼠の着物に腰法衣を着け觀音さまのお堂守をして居る程の善心ゑ成りまして新吉お靜ゑ向ッて昔時の慚悔話をして聽せると新吉が身の毛の慓立程驚きまゑたハ門番の勘藏の遺言に和郎は小日向服部坂上の深見新左衛門と云ふ御旗下の次男だが分娩ると間もなくお家改易にナッたから私が抱て下谷大門町へ立退て養育たのだがお家改易の時お熊と云ふ權妻が有ッて其腹へ出來たハ女子と云ふ事を物語ッつたがそんなら七ケ年此方夫婦の如く暮して來たお靜は我が爲ゑハ異腹の妹で有ッたのと總身から冷い汗を流して新吉がア、惡い事をゑたと眞以ッて改心致しました。人ハ三十歳位に成ませんけれど身位の確立あいものでも御坐い升るお靜ハ二十八新吉は三十になり惡い事は悉く仕盡した奴丈け有ッて善ゑも早く立歸りまゝて出家を遂げ尼さまの弟子と思ッて下さい夫婦の緣は是限りと思ッて呉れ、お靜汝も能く考へて見ろ今までの惡業の罪障消滅しの爲に頭髮を剃り落ッて何の樣ナ辛苦修行でもしカン〳〵坊主ゑ成ッて今までの罪を滅ぼさあぐッちやァ往く處へも往かれねへから乃公の事は諦めて呉れとハ云ひましたが汝ハ乃公の眞實の妹たとは云ひ兼て居り、尼が本堂へ往けばお熊比丘尼の跡に附て參り墓場へ往けば墓場へ附いて往くお齋かれたお伴を致しませうと出て參り兎角ゑお靜の傍へ寄るを嫌ひ升からお靜ハ腹の中にて、思ひ掛ない怪我をして半面變相ゑなり斯ナ恐ろしい相貌に成ッたのら新吉さんは私を嫌ひ大方賈母が此庵主に成ッて居るのら私が此庵へ置去りにして逃る心でハないかとまた情慾が有り升から愚痴計り云ッて苦情が絶えません、新吉の能く働き升る事と云ふものハ朝ハ暗い内から起て墓場の掃除をしたり門前を掃いたり畠へ往て花を切ッて參ッて供へたり遠路處まで餅菓子を買に往ッて本堂へ供へたりお齋が有るとお比丘さんの從者をして參り・假名振の心經や觀音經を買て來て覺えやうとして居り升るのを見て尼「誠に新吉さんハ感心ナ事てハ有るが一時に思ひ詰た心ハまた解れるものマア〳〵氣永ゑして居るが宜い只惡い事をしたと思へばまた御前あんぞゑ牡年から罪亡ほしは幾何も出來ませう、と温ゑく云ハれる丈け身ゑ答へ升る、恰ど七月廿一日の事で御坐い升る新吉ハ表の草を刈ッて居りお靜は臺所で働いて居り升る處へ這入て參りましたのハ十二三ゑある可愛らゑい白色ナ小僧さんで名を惣觀と申して觀音寺ゑ居り升ハ、此小坊主を案内して來ましたハ音助と云ふ寺男で二人連で這入て參り音「御免あせへ新「御入來あさい、觀音寺さまで御座い升るか音「上の繁右衛門殿の宅で二十三回忌の法事が有るンで乃公ア旦那さまも往くンたがど

歸ッたらさう言ひませまう 音「能く掃除仕やすれへ墓場の間たの草ア取て跨ェて向ふへ出やうとする時にア能く向う胸を打附け飛ッ返るやうに痛へもンたが若エよ能く掃除しなさるのう 新「お小僧さんはお幼年に能く出家を成さいましたネ・幾歳で御坐い升る 惣「ハイ十二に成り升

第九 十一席

新「十二に、善いお小僧さんたッ十一二位から頭髪を剃ッて出家にあるれも佛の結縁が深いので誠お善い御因縁で通常の人間で居ると悪い事計りするのだが斯う遣ッて幼少内から寺院へ這入ッてれば悪い事をしても高が知をてるが親父さんや母さんも御承知で出家おすッたのてすか 惣「そうゞやア有りません據無僧侶に成りました 新吉「據なくそれぢやア父さんも母さんも御前さんの幼稚うちに死んで仕舞ッて親戚故舊もおく世話の爲人もおいのでお寺へ這入ッたと云ふ事も有り升るがさうてすか 音「ナニさう云ふ譯ちやアあへが此マア惣觀さん位慇懃氣ナ人いねへた 新「ぢやア父さんや母さんは無いので御坐い升か 惣「ヘイ父い七年前に死去ました、と云ひながらメソ〳〵泣出ました 音「泣ねへが宜エと云ふよいつでも父さまや母さまの事を聞かれると惣觀さんは直ょ泣き出すた、親孝行ナ事たゞ出家にあるのい其處を斷念める爲だから泣くナと御尚さまがよく云はッしやるが矢張り直に泣くたが併乞泣ぐも無理はねへた 新「ヘイそれは如何云ふ因縁に成ッて居り升のです 音「ネー惣觀さんお前の父さまい早く死んたッけ 惣「七年前の八月死去ました 音「それから此人の兄さんゞ督家相續て村の名主役を勤めて居ると其處へ嫁子が這入て何ん共ハヤ云ひ樣のなへ程心も標致も善美嫁子たッたそうたが其村に安田八角か……ニ、一角とか云ふ劍術遣へが居て其嫁子に戀慕た處が思ふやうまならねへもンだのら劍術遣への一角が戀の意恨でもッてからに此人の兄さんを切殺て逃走たとヨ其奴に同類が一人有てゞ何んとか云だのう、ウン富五郎か、其野郎が共謀にあッて殺したのだ、すると此の人の宅の嫁子ゐ設令何んでも亭主の讐敵イ報ねへぢゃ置かねへッてゐ武家さんの娘丈けに忍耐ねへ、なんでも讐敵討ちをするッて心よもねへ愛想づかしをして羽生村ゐら離縁狀を取り縁切に成ッて出て讐敵の富五郎を欺編して同類の樣子を聽たら一角い横堀の阿彌陀堂の後方の林の中へ來て居るといふから亭主の讐敵を討ち切殺ベェと思ッテ林の中へ這入たか先方は何んでッても劍術の先生だ婦人位に切られる事いねへから慇然うに其劍術遣へか此人の姉さまを殘酷く切殺て逃走たとヨ、たから怨恨てなんねへ、子心よも兄をんや姉さんの讐の報てへッて、心易い相撲取か有るンだ風車の……ニ、花車・さうかそれか力量ア絶倫から其相撲取を依頼より仕樣かねへと實甘い年イ老てるか此の人を同伴て江戸へ往くベェと出て來る途で小金原の觀音堂で以てからよ盥梅か惡くなったから種こ介抱して此の人の藥劑イ買へに

在った時分に、お母さんを盗賊が組い殺し、左右を取って引き出し、此の人に問って見ると、丹さまの喉を縊めらてて死去んでゐたもンだから、ワー〜泣てる處へ乃公ァ旦那か通るとかゝり頃た事たか皆な因縁だ・泣くあと・兄さんと言ひ姉さんと云ひ母さまでもさう云ふ死ざまをすると云ふのゝ約束事たから縦敵討ちおゞを仕様と云ゝねへて兎も角も乃公弟子よ成て父さまや母さまや兄さん姉さまの追善供養を吊ッたが宜らうと勧めて坊主よなれと云てもならねへたから御尚さまも段々可愛がッて氣永ふ遣たもンだから逐よゝ坊主よなるべェと ッて漸々去年の二月頭まを剃去さのサ 新「へイ、さうで御坐い升か何んですか此お小僧さんのお宅ゝ那處で御座い升と 音「ェ岡田郡か……岡田郡羽生材と云ふ處ど 新「ェ羽生材・へし其羽生村で父さんは何と云ふ御仁て御坐い升 音「羽生村の名主役をした惣右衛門と言ふ人の子の惣吉ざまと言ふのだ・と言ゝれ新吉ゝ大よ驚いと容貌よて 新「エーさうで御坐い升か是ェどうも想ひ掛けねへ事て 音「おんた御前さん知ッてるのか

第九十二席

新「ナニ知ッて居やァ仕ませんかェ私も方々旅行をしたものたから何處の村方よは何と云ふ名主かあるか位ゝ知ッて居升ス惣右衛門さんにゝ水街道邊を一二度お目よ掛つた事ゝ御坐い升が・ろれェマァ愛惜い事を御坐いましたナ・と云ふものゝ音助の話を聞く毎に新吉か身の毛の戦立程辛苦のと丁度今年て七年前忘れも云ねへ八月二十一日の雨の夜よお静か

此人の實父惣右衛門の權妻に成つて居たのを乃公と密通し剰へ病中に縊り殺し病死の体で葬ェは云たなれ共容子を推察た甚藏奴は薬ては置れねへとお静か鐵砲で打殺ーたのだが土手の甚藏ゝ三十四年以前にお熊が薬兒よ云た總領の甚藏でお静が爲にゝ亂違ひの現在の兄を女の身ェとして鐵砲で打殺すとゝ仇同志の集合これも皆因縁だ此惣吉殿の云ふ事を聞けゞ聞く程脊筋へ白刃を當られるより尚ほ辛苦・ァゝ悪い事は出來ないものだと再び油の様ナ汗を流ーて暫くゝ草刈鎌を手に持たなり默然として居りました 音「和郎如何したァだ蟲梅でも悪いか酷く顔色が善くねへせ 新「へイナニ私ゝまだ種と罪障が有て出家を遂げ度と思つて此庵室に參ッて居り升るが此お小僧さんの様に年齢もいかないて出家をなさる仁を見ると眞實よ羨しくつて成りせまんから私も早く出家よならうと思つて尼さんよ懇請でもまだ罪障が有ると見えて出家させて呉れませんゝら斯う遣つて毎日無縁の墓を掃除ずると功徳にあると思つて居り升るか今日ゝ陽氣の爲ゝ苦患て御坐いまーて酷く氣色が悪いやうで 音「和郎さんの鎌ゝエラク錆て居やすネ研げねへのかへ 新「まだ研やうを眞實に知ェませんが此間お百姓が來た時聞いて教ゝつた計りでまた研ないのゞ 音「乃公ァ一挺鎌をもうけたが是を見な古い鎌だが鍛錬が善いと見ゝて研べ研程よく切れるだ全体此鎌はネ惣吉どんの村に三藏とか言ふ質屋が有るとよ其家が死絶て仕舞つたから家ゝ取壊して仕舞たのがすると乃公ァ友達が羽生村よ在て此方へ來たときに貰つただァか法使用て見ねへか宜く

欠

MISSING

樣子が訝しいと思ッてた、變ナ事計り云ッて少し發狂た樣子だが何んだッて科もないお靜を此鎌で殺すと云ふ了簡に成たのだチー、氣丈しないちやいけないよ

第九十三席

新「イエ〳〵決して氣は狂ひません正氣で御坐い升がお比丘さんお賤も私も斯う遣て居られない譯が有ので御坐い升、お賤汝は乃公を眞實の良人と思ッてるか汝は定めて怨恨と思ふだらうが汝一人は殺さねへ汝を殺ーて置き乃公も死なねばならねへ譯が有るンだ汝は知るめへがアー惡い事は出來ねへものだ、此庵室へ來た時にお前さんの懺悔咄を聞くと壯年時に小日向服部坂上の深見と云ふ旗本へ奉公して殿の手が附いて出來たのがお賤だと仰しやッたが私も其深見新左衛門の次男に生れ幼さい時に家ゝ改易と成たので町家で成長たものの、腹ゝ違へど胤ゝ同一、自分の妹とも知ないで七年跡から互ひに親密成ッた畜生同樣の兩人、此惣觀さんの實父さんは羽生村の名主役で惣右衛門と云ふ御仁でしたがお賤を深川から身受して別に妾宅を持せ樂に暮させてお置なすッたものと私は密通をするのみならず申すも恐ろしい事だが惣右衛門さんをお靜と私とで編り殺したので御坐い升、サ斯うヤたら嘸お驚きで御坐いませう、誰も知た者は有りません病死の体裁で葬ッて仕舞たが人は知らずとも此新吉とお靜の心には能うく知て居り升る、畜生の樣ナ兄弟が斯う遣て罪滅しの爲め夫婦の緣を切て出家を遂ず樣と思ひました處へ惣觀さんが御入來成ッてコレ〳〵

を聞て見れば迚も生ては居られません、此鎌は女房のお累が自害をし私が人を斬
鎌だが廻り〳〵て私の手へ來たのは此鎌で自殺と云ふ神佛の懲戒で御坐い升るから
を背かないで自害致し升る、私共夫婦のものは貴坊の親の仇敵で御坐い升、嘸惡い奴と思
召しませうから何卒此鎌でズタ〳〵に斬て下さいましお謝の爲め一ト言申上升か貴坊さん
の兄さん姉さんの仇敵と尋ぬる劔術遣ひの安田一角は五助街道の藤ケ谷の明神山に匿れて
居ると云ふ事は妙ナ譯で戸ケ崎の葭簀張て聞たのですが仇敵を討ちたければ其相撲取を頼
み其處へ往て仇敵をお討なさい、安田一角が他の者へ話して居るのを私が傍で聽て居たか
ら實事を知てるので御坐い升、……お靜和女と乃公が兄弟と云ふ事を知らないで畜生同樣
夫婦に成ッて永い間惡い事をしたがもう一命の納め時だ乃公も今直に跡から往くよ、お靜
惣觀さんにお謝を申上げナ 賤「アイ〳〵、と血に染ッたお賤は聽く毎にそうで有たかと巻
に歸ッてやう〳〵と血だらけの手を合せ苦しき息の下から 賤「惣吉さん誠に濟ない事を仕
ました堪忍して下さいまし、新吉さん早く惣吉さんの手に掛ッて死度い、アー母さん堪忍
して下さい、と苦しいから早く自殺仕樣と鎌の柄に取縋るを新吉は振り拂ッて鎌を取直し
我左の腹へグッと突き立て柄を引て腹を搔切り夫婦とも息は絶々に成りまーた時に惣觀は
惣「アー父さんを殺したのは汝等二人とは知らなかッたが思ひ掛けなく父さんの讐が知れ
ると云ふのは不思議ナ事また兄イさんや姉さんを殺した安田一角の匿れ家を知らせて下さ

れ斯ナ嬉しい事い有りませんから決〳〵て惡いとい思ひません早く苦痛のない樣まして上げ
度・と云ひながら後方を巨顧ると音助ハブル〳〵して腰も立ない樣に成て居ました 惣「父
さんや兄イさん姉さんの仇敵い知れたが小金原の觀音堂で母さんを殺した仇敵い未よ解ら
ないが惡い事をする奴の最後い皆斯う云ふ事に成りませう・と云ふのを最前こら聞いて居
ましたお熊比丘は袖もて涙を拭ひながら惣觀の前へ來て 尼「誠よ思ひ掛けない惣觀さん和
尚さんかへ 惣「ヘエー 尼「忘れもしない三年前の七月小金原の觀音堂で和尚さんの母さん
を縊り殺し百二十兩と云ふ金を取だい此お熊比丘尼を御坐い升よ 惣「エヽコレハ・と惣觀
も音助も驚愕致しまた絶と成ッて居ました新吉い血に塗ッた手を附き耳を欹て聞いて
居升 尼「私も種〳〵惡い事をした揚句一度出家いしたが旅金に困ッて居る處へ通り合せた親
子伴の旅人小金原の觀音堂で病に苦しんで居る樣子だから此惣觀さんを欺騙て藥を買に遣
た跡で母さんを縊り殺したは此お熊私い貴樣さんの母さんの仇敵だから私の首を斬て下
さい・と新吉が持て居ました鎌を取てお熊比丘尼は喉を劃切て相果ました其内村の者も參
り觀音寺の和尚さまも來て何にしろ葉でい置をないと早速此由を名主から代官へ訴へ撿死
濟の上三人の死骸は觀音堂の傍へ穴を堀ッて埋め大きナ墓標を立ました是が今世に殘ッて
居り升る因果塚で此血に染ッた鎌い藤心村の觀音寺に納まりました扨て惣觀い仇敵の行衛
が知れた處から還俗して花車を賴み讐討が仕度と和尚に强頼を云て觀音寺を出立すると云

ふ是から讐敵に成り升

第九十四席

塚崎村觀音堂へ因果塚を建立致す觀音寺の和尚道愚が盡く此因縁を說いて回向を致したまえたから村方の者が集合て餅を搗き大した施餓鬼が納りました斯くて八月十八日施餓鬼祭りを致し升と觀音寺の弟子惣觀が方丈の前へ參りまえて惣「旦那さま道「イヤ惣觀かなんじゃ惣「私もお願ひが有り升が旦那さまにゝ永く御厄介に相成ましたが私は羽生村へ歸り度う御坐い升道「ウンどうも貴樣も剃髮する時も拒絶たが出家よなる因縁が無と見え る何故羽生村へ歸り度いか、歸った處が親も兄弟もなえ所よ知已もない慇然ナ身の上じゃおいか良歸った處が農夫よなる丈けの事、實何して も出家ゝ遂げられんか惣「ハイ私ゝ兄と姉の仇が討度う御座い升道「コレ此間もチラリと其事も聞いたから音助にも宜う惣觀に云ふて呉をと吩咐て置たが報讐と云ふ心は不良心じゃ其念を斷らんければいかん執念してあくまでも敵手を怨むにゝ及ばん貴樣の親父を殺した新吉夫婦と親母を殺したお熊比丘尼は永らく出家を遂げて改心したが人を殺した惡事の應報は自滅するから討ぐものは無い自個で死ぬものじゃから其念を斷つ處が出家の修行で飽までも怨む執念を斷んければいがん、それに貴樣は幾歳じゃ十二や十三の小坊主が敵手ゝ劍術遣ひちやないか眼前返殺よなるは知れて有る、出家を遂げれど其返殺になる因縁を免れて死去れた兩親ヤまた兄嫂の

菩提を弔ふが死おれた人の爲めじゃ、ユ惣「ハイ毎度方丈さまから御異見を伺って居り升るが此頃ゝ毎晩〳〵兄さんや姉さんの夢ばかり見て居り升昨夜も兄さんと姉さんが私の枕元へ來まして新吉が讐敵の匿家を教へて知つて居るよ汝が斯う遣てペン〳〵と寺院に居てゝおらん、兄さん姉さんも草葉の蔭で成佛する事が出來ないから讐敵を討て成佛えて呉れろと判然枕元へ來て申まえた實に夢とえ思はれません・してみると兄さんや姉さんも迷つて居ると思ひ升から讐敵を討て罪作りを致し升樣で御坐い升けれども何うか兩人の怨念を晴して遣り度う御坐い升道「それがいかんそれは貴樣の念ゞ斷んからじゃ平常讐敵を討度ゝ、兄さんゝ怨んでゝせんか姉さんも怨んでゝせんかと思ふ念が重なるに依つて夢に見るのじゃ、それを佛書に睦眠と說いて有る睡は現眠たねむる汝は睡ッて計り居るから夢に見るのじゃ讐敵討の事計り思ふて居るから迷ひの眠じゃそれを避ける處が佛の說れた兼て云ふ教へじゃ根元ゝ何も有りばせんものじゃ眞言の阿字を考へたら宜このらう此の寺院に居て其の位ナ事を知らん筈は無いから斷念ユ惣「ハイ如何しても斷念られません永らく御厄介よ成りまえて誠に相濟みませんか讐敵討ちを致した上ゝ出家よ成りませんでも急度御恩報じを致し升からどうか放還ッて下さいまし强て放還て下さいませんけれゞお寺院を脫走え無斷て羽生村へ歸り升道「イヤ〳〵そんならば無狸に止やせん皆因縁じゃからそれも宜らう報讐が宜らうが氣ぢらが氣ぢした助太刀を依頼が宜い敵手ゝ立派ナ劍術遣ひ殊に同類も有らうか

ら惣「ハイ親父の時に奉公[illegible]人を頼み升積りで道「若し其花車が死で居たら如何する、人間は老少不定じやから昨日死ましたと云はれたら如何する人間の性命は果敢ないものじやがアヽ仕方がない往くなら往けじやが首尾克く本懐を遂げて念が断れたらまた面會に來て呉れ、と實子の樣ナ心持で親切に申升る惣「コレが告訣別となるかも知れません誠にお命令を背きまして相濟みません道「イヤ〳〵念が断んと却ッて罪障になる、コレは小遣ひに遣るから持ッて往けと三年此方世話をしたものゆゑ實子の樣に思ひまして和尚は遣りともながるのを強てと云ふので音助に云付け萬事出立の用意が整ひましたから出立せて遣り漸く五日目に羽生村へ着致しましたが聞けば家宅は空屋に成ッて仕舞ひ作右衛門と云ふ老人が名主役を勤めて居り多助は北阪の村外れの堤下に獨身活計をして居ると云ふから遣ッて參り惣「多助さん〳〵、多助爺ヤア多「アイヤなんだ僧さまか今日は些トペエ志が有るから、銭イ呉れるから此方へ遣入ンナ惣「修行に來たンぢやアない、和郎は何時も壯健で誠に嬉しいヲ多「誰ダ〳〵惣「イ和郎忘れたかへ私は惣吉だヤア和郎の世話に成た惣右衛門の息男の惣吉だよ

第九十五庵

多「オイ成程成長なッたヲヽ、マアヽ坊樣に成たアもんだから些とも知んねへだ、能くマア來たアヲヽ、と暫ク涙に泣き沈み漸々涙を拭ひながら多「アヽ三年前に貴郎さまが宅を出立往く時は心苦ッたが讐討だと云ふから仕方がねへと思ッて出して上げたが跡で思ェ出しては泣て計り居たが作右衛門さまの世話でもッてどうやら斯やら取附いて此處に居やすが貴郎さまを訪問度ッても訪問られねへだが母さまは小金原で殺されてから貴郎さまが僧侶に成ッたと云ふ事ア聞いたからチョックラ往てへと思ッても出られねへので不沙汰ア仕やしたが能くマア來て下せへやした、眞實に見違る樣な成長成たヲ惣「爺ヤア私は和尚さまに願ひ無理に暇を戴いて兄さんや姉さんの仇敵が討度ッて來たが親父さん親母さんの仇敵は知れました、とお熊比丘尼の懼悔をば新吉夫婦が細やかに聞き遂に三人共自殺した處から村方の者が集合て因果塚を建立した事までを話すと多助も不思議の思ひを爲して是から作右衛門にも相談の上讐敵討に出ましたがサう云ふ處に匿れて盗賊をして居るからには同類も有らうから私と和郎さんと江戸へ往ッて花車關を頼まんと頓て多助と惣吉は江戸へ遣て參り花車を便りて此の話を致して頼みました此の花車といふ人ハ追々出世をして現今でハ二段目の中央まで來て居るから師匠の源氏山も出したがりませんのを義に依ッて暇を下さいまし前に私か奉公をした主人の惣右衛門さまの讐討ちをするのでおざい升から義に依ッての懇頼に源氏山も得心して芽出度出立いたし日を經て彼の五助街道へ掛りましたのが十月中旬過ぎた頃ろ、もう日暮れ近く空合はドンとヨリ曇ッて居りマする三人はドットと急いで藤ケ谷の明神山を段々ナダレに登ッて參り升ると樹本生茂り晝でサへ薄暗

い處殊さは曇って居り升るから漸こ足元が見える位落葉の堆積て居る上をザク〳〵踏みながら花車か先へ立つて向を見ると破れ果てたる社殿か有つてメーと石の玉垣か見え五六本の高い樹の有る處でポッポと焚火を云て居る樣子ゆえ彼處らが匿れ家ではないかと思ひながら傍の方を見ると白いものが動いて居り升るがなんだか遠くで確と解りません 花「多助さん氣丈しなせへ 多「モう到着たかねへ私い子劔術もなまも知んねへグ此坊さまに怪我アさせ度ネへと思ふから一生懸命に遣るか尊公ア氣丈遣て下さへ 花「私イ神明さまや明神さまに誓を立てるから私が殺もてをざ構わねへが坊さまま怪我アさせ度ねへ心持だから御前度胸を据ゑおければいかんせ 多「度胸据ゑてる心持たアけンども自然に足ガブル〳〵顫動よ 花「氣を沈静たか宜エ 多「氣イ沈静る心持で力ア入れて踏張バ踏張る程足イ顫動か如何云ふもンだらう私イ斯ナニ身体顫動た事アねへ四年前に瘧イ罹た事が有たが子其時ハ何程上から布團をかけても顫動たが・丁度其時のやうに身体が動くだ 花「ハテナ白いものグ此方へ輾轉て來る樣だが何んだらう・多助さん先へ立て往きなよ 多「申戯云ちやアいけねへアノ林の處に悪漢が匿れて居るかも知れおへからお前さん先へ往ててくンねへと云ひおからやがて三人が彼の白い物の處へ近附て見ると大杉の根株の處に一人の僧が裸体にされ縛られて居まして傍の方ま笠が投げ出して有り升

第九十六席

花「オイ多助さん 多「エ 花「慇然うに僧侶だが盗賊に就縛て災難ま逢えやッたと見え裸体だ 多「ナニしても足か顫動て困る 花「さう顫動てはいけねエ、と云ひながら彼の僧ま近づき 花「和僧さん〳〵盗賊の爲ま裸体にされたのですか 僧「ハイ災難に逢びました木風まで殺り升る途中で以て馬丁が此道が近いのらと云ふて此處を抜けて參り升ると悪徒が出ましたものゝやから馬丁は馬を放り出した儘逃走て仕舞ふと私ま大勢に取巻れて衣服を褫奪れ直ぐ放遣して遣ると此方の勝手が悪い乃公達が逃去る間此處に辛抱シて居ろと申て私は此木の根株へ縛り附られ如何も斯うも寒くつて成りません和郎等も先へ往くと大勢で褫奪れるから後へお返りなさい 花「ナニしろ繩を解いて上げませう、貴僧ま那處の人だへ 僧「有難う御坐い升私は藤心村の觀音寺の道恩と云ふものです、と聞くより惣吉ま打驚き駈げて參り惣「エ旦那さまか意外難にお逢ひおされました道「オー〳〵惣觀か汝イ此山へ警詞に來たか惣「ハイ御命令に背いて參りました・多助や私が御恩に成た觀音寺の方丈さまだよ 多「エそれはマアとんだ難にお逢ひなせえやえたネ道「酷い事をする・人の手ば打れやうと儘酷く縛ッてア、痛い・と兩腕を摩りながら道「中ゝ同類が多勢居る樣子ゝやから歸るが宜い 花「ナニしても寒を冒といけないからうれちやア斯うと・私の合羽ま多助さん和郎の羽織を和尚さまにお貞し申さうさア和尚さまコレとお着なさい・うれのら多助さん此處を下て人家の有る處まで和尚さんを送ッておあ上げおさい 多「乃公此處まで惣吉さんの從